

都市化と社会教育の可能性に関する調査

共同執筆

古	出	矢
野	雲	ヶ
	路	崎
有	暢	孝
隣	良	雄

都市化と社会教育の可能性に関する調査

序章 調査の概要

- 1 調査の目的
- 2 調査の対象
- 3 調査の方法

(古野有隣)

第一章 対象地域の特性

はじめに

- 一 位置と地形

位置

地形

- 二 発展のプロセス

人口の推移

行政区画の変更

金沢駅前の発展

鞍月

戸板

- 三 高度成長に伴う変貌

都市化の進展

鞍月地区

戸板地区

此花地区

(矢ヶ崎孝雄)

第二章 金沢市の公民館と社会教育

- 一 金沢市の公民館の沿革と現状

- 1 発足当初

- 2 その後の歩み

- 3 石川県の公民館の現状と金沢市の公民館

- 二 金沢市の社会教育の現状

- 1 社会教育の重点施策

- 2 組織および職員

- 3 財政

- 4 成人教育

- 5 青少年教育

- 6 その他

- 7 上記以外の関係施設

第三章 対象地区の公民館の現状

- 一 沿革

- 1 鞍月公民館

- 2 戸板公民館

- 3 此花公民館

- 二 施設

- 三 職員

- 四 組織・機構

- 五 公民館費

- 六 事業および活動

- 1 鞍月公民館

- 2 戸板公民館

- 3 此花町公民館

- 七 戸板校下双葉町会のこと

(出雲路暢良)

第四章 生活の実態と学習活動

——調査結果の分析——

- 一 生活の実態について
 - 1 調査対象の構成
 - 2 余暇時間利用の実態とその意識
(出雲路暢良)
- 二 学習活動の実態について

序章 調査の

概要

- 三 学習要求について
 - 四 社会教育観について
終章 まとめ
(古野有隣)
- 資料 調査票

1 調査の目的

昭和四十七・四十八年度にかけて、当研究室の事業として実施されたこの調査の目的は以下の如くである。

「都市化」と称される社会現象の変化を中心的な要因として、社会教育が転換期にさしかかっていることについてはすでに多くの指摘がなされている。それは簡略化した表現をすれば、農村社会を主たる基盤として成立、展開してきたわが国の社会教育が、その基盤の変質にともなうて、都市社会において成立しうるための方策を探し求めているものといえることができる。

このような事情は、学習者の自発的な意志の尊重、生活現実とのかわりといった社会教育の基本的理念が、単なる理念としてでなく、実態的に厳しく要求されてきているものと理解すべきである。とすれば、現在の、転換期に立ち、今後の展望を模索しつつある社会教育のあり方を考える場合、学習者の主体的な学習活動の営み、或いは学習機会への参加がいかなる条件において成立するか、が問われる必要がある。

本調査はこのような観点に立って計画されたものであり、学習者である（もしくは、あるはずの）成人の生活の中に存在している課

題がいかなるものか、又、彼ら自身は何を求めているのか、そして、それを実現していくための条件は何か、を地域の特性との関連の中で明らかにしようとしたものである。

2 調査対象

今回の調査においては、金沢市の地域特性を人口動態の側面によってとらえることとし、次の三類型を設定した。すなわち

- A 旧来からの在住者（地付き層）が住民の大半を占める地域
B いわゆる「ニューカマー」と呼ばれる他地区からの来住者の比率が高い地域
C 旧来からの在住者と他地区からの来住者の比率がほぼ同率である地域

このような条件を含んだ地域の中から、公民館活動の実績その他の条件を加味・考慮の結果、A類型として此花地区、B類型として鞍月地区、C類型として戸板地区を対象地区とし、それぞれの地区の中で、さらに、その条件にもっとも近い区域（主として町会単位）を選定し、その区域内の全世帯の成人全員（二十才以上の男女）を調査対象とした。

3 調査の方法

前記の対象にたいし別掲の調査票を戸別に配布、記入後回収する留置法である。回収数は三地区の合計四三〇であるが、各地区別で

は次のとおりである。

なお、この回収数は、記入不備その他による無効票を除いた数である。

(古野有隣 金沢大学助教
社会学教育)

地区	回収数
此花	一七一
鞍月	二二一
戸板	四八
計	四三〇

第一章 対象地域の特性

はじめに

ここに調査地域として採り上げた^(註1)此花・^(註2)戸板・^(註3)鞍月の三地域は、図1に示したように、金沢駅の南北に隣接する地域である。これらの三地域は意識的に隣接地域として選り出されたものではなく、前述のように社会教育活動のパターンを主体として選出された地域が、偶然にも結果的に隣接の地域となつて示されたものである。しかし、隣接したこの三地域が、それぞれ特色ある社会教育活動を展開し、おのおのが相当の成果を挙げつつある点は、研究上はむしろ興味をいっそう増すものといえるであらう。

本来の研究に先立ち、ここでは一応調査地域の地理的・歴史的特色を概観することとする。とくに近年の著しい地域変貌は三地域において極めて個性的であるので、これらの点にもふれてみたい。

(註1) 此花校下にはつぎの町会が所属する。上鍛冶町・下鍛冶町・

鍛冶片原町・荒町一―三丁目・南安江町・木ノ新保・駅前通り

・此花町・中堀川町・西堀川町・東堀川町・堀川角場町・上淵

上町・中淵上町・堀川通り・西門通り・別院通り・本町通り。

(註2) 戸板地区にはつぎの町がある。二口町・北町・赤野町・示野

中町・桜田町・出雲町・薬師堂町・若宮町・西念町・二ツ屋町

・二宮町・大豆田本町。

(註3) 鞍月地区ではつぎの町がみられる。南新保町・戸水町・直

江町・近岡町・御供田町・大友町。

一 位置と地形

位置 北陸本線金沢駅の南北に展開する調査地域のうちで、駅の南側すなわち駅前を中心とした地域が此花校下の地域である。一方、駅裏の長田校下に接し、戸板校下の地区がある。本来、駅裏の南広岡町は戸板地区に属していたところであることは後述のようである。戸板校下地区は犀川の東岸にあり、金石に通ずる直線道路の金石街道がほぼ中央を縦断している。戸板地区の北方に接して鞍月地区があるが、この地区の北縁は大野川にまで達している。現在ここは金沢港の岸壁とそれに接する臨港地帯で、著しい変貌を遂げつつ

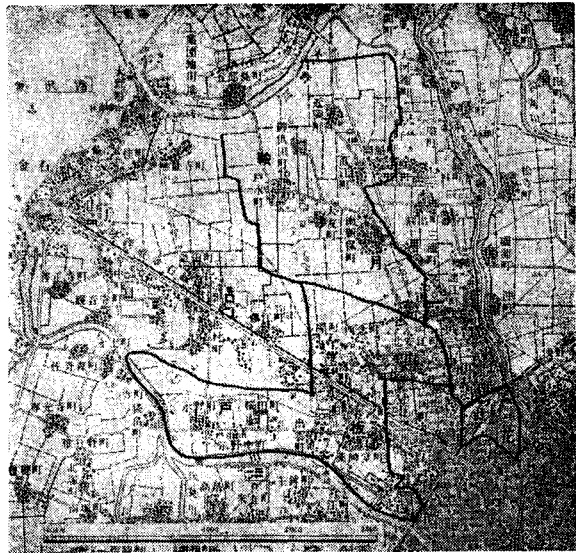


図1 調査地域

ある地域である。

三地域のうちで此花地域は旧金沢市域であった。しかし、市街地からはずれ、郊外であったが、北陸線の開通に伴い、市街化が進んだところである。戸板・鞍月は元来独立した村で、純農村地域であった。金沢市の発展に伴い、新市域に編入された地域である。

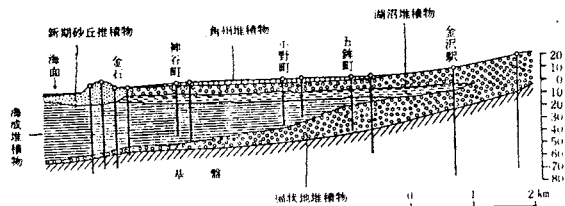
地形 この調査地域は犀川、浅野川に挟まれ、金沢の北西部に当たるが、地形的には扇状地と三角州から成っている。極めて平坦な地

域で、また低湿地であるが、仔細に検討すれば、微地形の変化があり、これがこの地域の土地利用にも関連する面が多いように思われる。

此花地区は金沢扇状地の部分に属し、標高は金沢駅の地点で約一〇呎である。この地形は駅の裏側では広岡町から西念町の近くまで、長田本町・二口町・若宮町などにも及んでいる。これから三角州への遷移は不明瞭であるが、鞍月・戸板地区の大部分はここに含まれる。まことに平坦な地域であり、金沢市街を貫流してきた鞍月・大野庄の二用水路が分流して、一帯の水田をうるおしてきている。ただ集落の所在地は比較的微高地であるようで、集落間の水田地帯にはヨシの生えた沼地が昔はあったという。集落位置とは逆に、その中間地帯は低湿度のやや強い地域であったようである。なかでも鞍月地区の北部、大野川の沿岸地帯はとくに低湿で、増水時にはよく冠水もしたところであった。とくに戸水埠頭のある戸水町などはアシの茂った沼田で、塩水が入ることもあり一坪の値がムシロ一枚(五〇〇円)といわれ、価値のない所であった。これが価値をもつに至ったのは金沢港の建設で、この点は後述の通りである。

一方、戸板地域のうち犀川に沿う示野町・示野中町・出雲町・大豆田本町や、扇状地に接する北町・西念町などは洪水時には冠水したことのある地域である。

扇状地の地域は地質的には砂礫がちの地域であり、三角州は泥がちの地域であることはいうまでもない。しかし、図2の地下成層概念図に示すように、三角州堆積物の下層に扇状地堆積物の層があり、これは金石の砂丘にまで達している。一方、扇状地堆積物は基盤の上にも乗っており、その中間に海成堆積物があり、その上層に新期砂丘堆積物と湖沼堆積物層とが挟まれて、乗っている。扇状地堆積物層の存在から、この地域では伏流水が豊富で、金石方面では



(経済企画庁：土地分類基本調査 地形・表層地質・土じよ
う 金沢〔1966〕による)

図2 金沢駅一金石の地下成層概念図

て興味深い。

自噴もしていた。近年の著しい地下水の汲揚げから、かような現象はみられなくなった。大野が醤油の産地として発達した背景にも、かような伏流水の存在を無視しえないであろう。

二 発展のプロセス

人口の推移 地域の変貌は人口の推移に集約的に示されているといえる。ここではまず第一にこれら三地域の人口の推移を辿ることによって、その発展のプロセスをみよう。図3は集めうる限りの資料を用いて、三地域の人口の推移を示したものである。明治中期以降、現在に至る人口の推移は三地域ともにそれぞれ特色を示している。

此花地区は明治末期から昭和初期にかけて、人口は急増を遂げてきた。明治三一（一八九八）年の北陸線金沢開通による駅前集落の発展が、ここに端的に表明されているとみられる。このあとは人口減少に転じ、昭和二〇年代に若干の増加はあったものの、減少傾向は変わりなく、現在は五、〇〇〇人を割っており、昭和初年の最大人口一万余人の半数以下になっている。おそらく今後においても、この傾向はある程度までは続くであろう。

これに対して戸板・鞍月両地区は戦前まで大きな変化なく、戦後

において急増に転じており、この傾向は今後ともなお続くものと推察される。仔細にみると、鞍月地域は戦前まではむしろ漸減の傾向にある。これは石川郡一円に共通的な現象で、つとに学界においても人口減少地域として注目されたもので、その傾向と軌を一にしてい

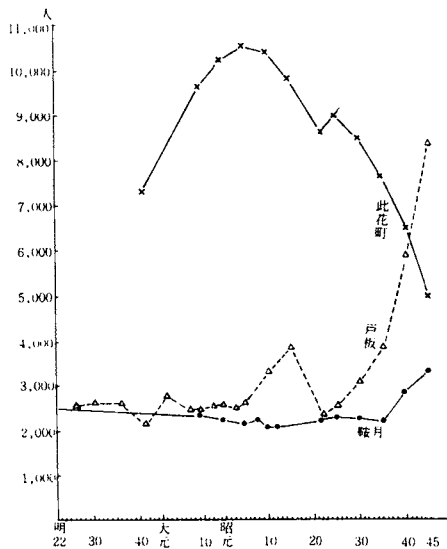


図3 人口の推移〔戸板村史・鞍月郷土史・金沢市統計書・国勢調査結果により作成〕

る。なお、戦後においても人口の減少ないし停滞は続き、これが増加に転じたのは昭和三〇年代後半で、ごく近年のことである。鞍月地域は久しく農村として続き、人口吸引の要因はわが国経済の高度成長と深い関連をもって醸成されてきたわけである。

一方、戸板地区は大正時代まで若干の増減を示しつつも、むしろ

人口増減は停滞的で、戦前に増加を示したものの、戦後は減少した。しかし、昭和二二年を境に人口は増加に転じ、以後はむしろ急増を遂げ、戦前と比較すれば三倍余の八、〇〇〇人台にまでなった。この地域は鞍月地域より、一時はやく人口増加に転じたのである。

ただ、利用した統計の統計単位としての地域には年次により変更があり、それらを完全に差し換えて数値を算出することは、現在不可能になっているので、厳密な人口の推移をたどれない。しかし、三地域の主体をなす地域にはさして変化がないので、この図によって三地域における人口の推移の特色を把握することは充分可能といつてよいと思う。

行政区画の変更 此花地区が旧金沢市域であることは前述した。これに対して他の二地区は新市域である。旧鞍月村が金沢市に編入されたのは昭和一〇年、旧戸板村の編入は昭和一八年であった。金沢市への編入年次は早い方で、とくに山手の諸村が戦後に金沢に編入されたのに対し、平野部の諸村が戦前に多く金沢市編入を行なっていることは、金沢市の発展がこれらの平野部に主方向を向けていたことによるものであろう。しかし、編入されたとはいえ、急激な都市化は実現をみず、農村地域として持続をしていたわけである。

金沢駅前の発展 金沢駅開設当時、駅前一带は「はす田」や畑が続いていたという。駅は金沢市街地の外縁の沼田地帯に設立されたもので、呉服屋の小谷氏の所有地が多く、鉄道へは坪一二一―一三銭で売渡したとか、これは高値でふつうはその半値くらいであったと伝えられていた。近年まで駅前にあった持明院妙蓮池の「瑞蓮」が特別な蓮で天然記念物とされていたが、これは駅開設前の景観を残したもので「残象」であったといえる。

此花地区でも浅野川に通ずる運河にそう堀川町は、江戸時代より曳船が毎日荷物・木材を運んでいた。したがってこの町には荷積宿

が多く、傾城・風呂屋もあって格別な賑わいを示していたといふ。いまもこの地域には小家屋が密集している。⁽³⁾ また象眼町には象眼職

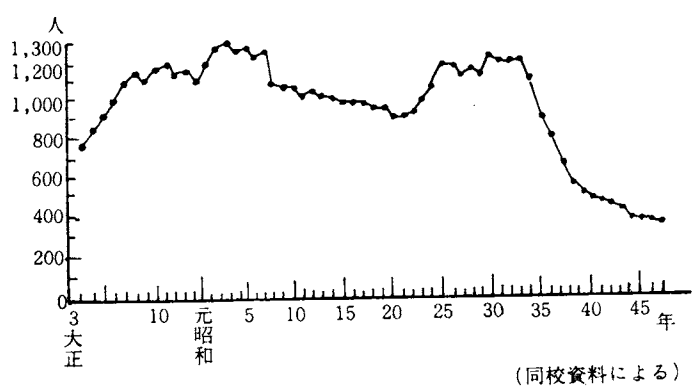


図4 此花小学校児童数の推移

人が集っており、職人町としての賑わいと一種の気風を示していたようである。駅前の木ノ新保はもと上堤町辺にあったもので、寛永一三（一六三六）年の金沢の町割改変に際し、外部へ移転を命ぜられたものと考えられている。これは当時この地域が金沢の郊外であったことを推察しうる。

駅前の発展を予測し、ここに進出を企てた人もいたが、松任出身の高田八三郎氏は駅前の土地を買占め、北海道よりニシンを引いて商売をし、また借屋を建てたりもした。駅前の一五間道路敷はこの家で市に寄付をしたともいう。人々の集散に目をつけ、旅館・飲食店も多く立ち並ぶに至ったが、この傾向は現在も顕著である。また高田氏は宿泊客を相手に芝居小屋を設け経営したが、これは不振となり、昭和二年に旅館にかえた。現在の茶屋旅館がそれで、劇場の面影は今もなおその建築様式に残されている。

人口の急増に伴い、この地区の児童数も増大した。そこで大正三年に此花小学校が新設され、これまで瓢箪・芳芥両小学校に通学していたこの地区の児童を通学させた。当時の小学校の敷地は畑が四筆、宅地が五筆であったが、学校から汽車が見えたという。なお児童の増加は著しく（図4）、大正一二年には隣接の宅地一筆、同一三年に二筆、同一五年に一筆を買取り、校地を拡大してきた。ただし、この地区には商業・サービス業者が多く、工場がほとんどみられなかったのも一つの特色である。

鞍月 低湿な水田地帯に位置する鞍月地区には南新保・直江・近岡・御供田・大友・戸水の集村が古くより成立した。豪雨時は水田に浸水し、夏季の減水時には海水が入り、塩害を増すなどし、決して恵まれた水田地帯ではなかった。正保年中（一六四五ころ）金沢城の防禦の一環をなす倉月用水が出来、その末流がこの地区を分流した。これは大野庄用水とともに灌漑用水に利用された。その主流の

川幅は一八二八呎、深さ四呎もあり、支流は網目状に設けられていた。フナ・コイ・エビなどの川魚が豊富であった。さらにこの小路は川舟の運行にも盛んに利用され、水郷の特色をよく示していた。

農産物は米が圧倒的に多く、あとは大根・ナスなどの野菜も若干作られていた。なお、ここでは梨の名産が今に持続しているが、これは嘉永二（一八四九）年に越後より南新保に苗木が持込まれたことに始ると伝承されている。明月・晩三吉などがその代表的品種で、金沢を主要な市場としている。

ところで昭和一〇年の鞍月村の金沢市編入は一エポックをなすものであった。この時には富樫・大野・潟津・米丸・粟崎の一町五カ村も同時に編入された。この編入問題は昭和八年ころよりおこったが、その背景には大野川の河川改修と、金沢港建設による金沢市の発展計画があった。

大野川河口の大野港は金石港とならび藩政時代より金沢の主要な港であったが、昭和初年には大野港の衰微は著しいものがあった。また大野川は藩政時代より水戸口が絶えず北東方向に彎曲し、このため掘替工事を重ねてき、また飛砂による河口の閉塞もあった。明治以降もこのため大野川の修繕、河口護岸工事が常時行なわれてきた。金沢市は昭和六年より大野川の改修とあわせて河口に金沢港を修築し、工場誘致を計り、飛行場建設とあわせて、大金沢市の建設を計画した。大野町はいちはやくこれに賛同し、他村も同調して前記の金沢市編入が実現した。

ただし金沢築港は、はるかに遅れ、昭和四五年実現をみたことは周知の通りである。この間、昭和七年にも金沢工業港建設計画は出され、さらに昭和三八年の豪雪を契機にまた金沢港建設計画が樹てられてもいた。

鞍月地区の金沢市編入当時、農村の余剰労働力を求めて、金沢市街地に近接の南新保町に三機業場が設けられており、戸水町には大正七年に製綱工場が成立し、漁網のロープを製造していた。工場の進出はさして顕著なものでなく、人口は減少傾向にあったことは前述の通りである。この地区の都市化は昭和三〇年代後半に至り、著しくなったのである。

戸板 旧戸板村には金沢駅裏の広岡町と南広岡町・向中町・大和町などが所屬していた。現在の戸板地区は犀川の右岸で金石街道を中心に南北に跨っているが、集落の密度の高い地区である。この地区も鞍月地区と同様な農村地帯であった。金石街道は古くは金石往還といわれ、元和元（一六一五）年に前田利家の命により金石の港と城下とを結ぶ直線道路として開設されたもので、両側に松を植え整備された。

農家の主体は同様米作にあり、梨の産地としては鞍月地区よりも古い歴史をもっている。その起源は明和六（一七六九）年で、越後より北町に植栽されたものである。当初は川辺の乾燥地に栽培されたが、嘉永四年には広く村内に拡がり、発展をとげてきている。品種も多様であるが、明月・晩三吉などが主体をなしている。

戸板地区の犀川畔はこれまでよく水害に見舞われてきた。とくに梅雨時の七月に多く、堤防を破壊し、田畑・家屋に浸水することが度々で、多大の被害を与えてきた。

明治三一年四月、北陸線の開通と同時に中橋・上金石間に馬車鉄道が開通した。これは金石港と敦賀港とを結ぶ定期汽船への乗客の便を計ったのであったが、鉄道開通に圧倒されて定期航路はやがて廃止された。したがって馬車鉄道は専ら金石・金沢間の交通機関として利用されるようになった。この馬車鉄道は大正三年電化し、金石電気鉄道株式会社を創立し、大正九年には大野町へ延長さ

れた。この軌道は金石街道の北側の土地を占用していた。このため大正九年には自動車・乗合馬車・荷馬車などの通行が著しくなり、道路の一部を一宮利事業に侵害されていることに対して、軌道取除の意見書を戸板村長から石川県知事に提出している。しかし、この軌道撤去はおくれて昭和四六年に実現した。軌道はこの地域住民の金沢市街地への通勤その他に極めて重要な意義をもってきたのである。

三 高度成長に伴う変貌

都市化の進展 敗戦後のわが国経済は国民生活を豊かにし、平和産業の発達に鋭意努力してきたが、昭和三〇年代に入り、いわゆる経済の高度成長が急速に進められた。消費都市である金沢ととも、この全国的傾向の波及には変りなく、非被災都市の恵まれた条件から脱皮して、経済成長を進め、とくに太平洋側地域との格差を是正し、いわゆる裏日本よりの脱却を政財界は祈念し、経済開発を促進してきた。その指向地域は金沢駅西地区から金沢港へかけてであり、鞍月・戸板地区を含む地域である。これは金沢市の六〇万都市構想のなかでも中核をなすものである。

金沢駅裏には戦前すでに鉄工業を主体とした町工場が発達し、工場地帯を形成していた。これらの工場は金石鉄道沿線にも漸次進出していったが、しかし、鞍月・戸板地区の大部分は純農村として近年まで持続してきたのである。

この地域の都市化は昭和三〇年代後半になって、漸次進展の傾向を示すに至った。その自然発生的な傾向はスプロール化にも通じ、合理的土地利用上のためには危惧されていたことである。

その先駆をなすものは金沢市中央卸売市場で、西念町に用地を求め、昭和三八年起工し、同四一年に業務を開始した。さらに昭和三

九年着工、同四二年完成をみた金沢問屋センターがある。これは鞍月地区の直江町に隣接する問屋町に位置するが、金沢市街地より問屋一〇社が集団移転したものである。これらの流通機関の進出は、この地域を縦貫する北陸自動車道を中核として新しい交通体系が近く実現をし、金沢港をも控えていることなどから、適地と予測して、市街地の混雑をさけて進出したものである。その結果はそれぞれに高い業務成績をあげてきつつある。

北陸自動車道は昭和四七年、金沢西インター・小松間が開通した。同四八年には福井県丸岡にまで延長した。比較的距離が短かい事から利用者は少ない模様であるが、同年開通のバイパス（自動車道の側線として建設）は示野中町・藤江町・南新保町を通過するもので、その利用車輛は著大化しつつある。かような背景のもとにバイパス・金石街道などの交通幹線に沿い、工場、倉庫などが急増し、これに関連して住宅、アパートなども建設が進み、スプロール化をいっそう著しくしている。金沢市の六〇万都市構想では居住・商業・工業地域を設定しており、昭和四八年には市街化区域の設定に伴い用途規制を厳しくしている。

鞍月地区 この地区の都市化は金沢市街地に近接する南新保町の方面から著しくなってきた。一方、金沢港の建設に伴い、戸水町の臨港地域からも進展した。したがって中間の大夫町が最も農村的色彩の濃い地域であり、また変貌の少ない所である。しかし、この地区は都市化を受け入れる点には消極的であり、区画整理事業は全く行なわれていない。これには減歩をきらうことも関係している。各集落の外縁や主要道路に沿っては、工場・ガソリンスタンド・食堂などができ、また貸アパート・貸家・倉庫などが建ち進み、なかには貸ビルを建てた人もある。また集落から離れた、微低地では広大な面積を確保できることから、中央病院や県立高校の建設が予定されて

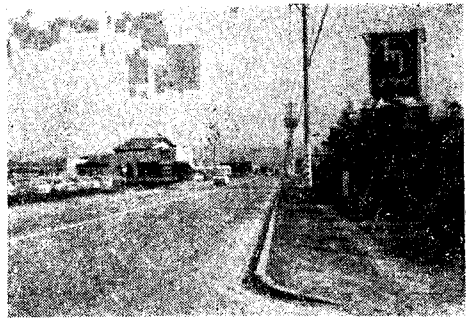
いる。坪三・五万円の価格で売渡しを予定されているという。かような土地売渡代金によって前記の貸住宅・貸倉庫などを建設し、土地の高騰に伴い、長者番付に名を連ねる人もふえてきている。一方、農家は小規模経営者でも機械化を進め、家族の中には勤人が極めて多くなっている。勤先には鉄道・電通・役所など、比較的安定した職種の多い点も特色である。これらの農外収入や家賃・土地売渡代金などは農業収入よりはるかに多く、近年農家は坪二〇万円で延一〇〇坪の家を建築し、庭を豪華にしつらえる人が増えてきている。



水田地帯の住宅地化（鞍月地区）

しかし、米作以外の農業に出精する人もある。ナシは後述のように戸板地区で減少しているが、ここではその分だけ増えており、ナシ組合を鞍月地区一本に結成している。且下、撰果場をつくるか否かが問題になっているという。またメロン栽培をするグループもある。ここにとりあげた地区のうちでは最も農村的色彩の強いのが鞍月地区といえるよう。

ただ、この地区では従来の農村集落に自然的に外来住民が転入するパターンよりは、転入住民が新しい地区に集積しているのが特色である。それは計画的な団地形成とは趣を異にしたもので、南新保町の南部に、双葉町が昭



道路沿線の都市化（狹月地区）

の家も造り、保育所も建てた。かようにコミュニティの団結心はなかなか強いものがある。一方、この人々は旧町の住民とは生活基盤を異にするので、直接的な関係は薄い、しかし、両者の交流が断絶はしていない。ただ、時間的行動運動を行ない、物事を合理的に決めるなど、考え方も根本的にちがった面があり、在来の人々との間にトラブルはないにしても、意志統一に苦心する面もあるという。

戸板地区 前述のようにこの地区は昭和二〇年以後、急激な人口増を遂げつつある。狹月地区よりも、人口増加の時点が一〇年以上も早く、その比率もまた著しく高率である点に特色がみられる。図5をみても、この地区への入居者は出生時からの居住者に比較して著しく多く、近年に至るにつれて多数となり、昭和四〇年以降の入居

者は全人口の半以上を占めるほどである。さらに表1で事業所をみると、戸板地区は卸売小売業の事業所を第一とし、製造業が第二で両者合せて七割以上を占めている点、注目に値する。

戸板地区の都市化は金石街道に沿い、前記事業所がはりついで行ったが、とくにこの道が中橋陸橋で国鉄と立体交差を昭和三四年に行なうてから顕著になった。昭和四一年設立の金沢市中央卸売市場をはじめとして、工場・会社が進出し、住宅建設も急増しつつある。さらに金石街道に直交する自動車道と国道バイパスの建設が進められており、金沢港の開港や金沢駅西口の区画整理による再開発もあり、様相を大きく変えつつあるが、今後の変貌はさらに目覚ましいものと推察される。ただ工場・会社・住宅などの進出により、スプロール化が進行している点は問題である。ところで、この地区では人口増加が著しいのに対して、団地の形成はみられない。農家は一〇年前より貸家・アパートの建設を始めた。当初は屋敷内に貸アパートを建て、五・六年前より一戸建の貸屋の建築に移行した。さらに近年はマンション建設も出現している。入居者の要求によって貸家もデラックス化しているが、そのための建築資金はおもに貸屋賃によって調達される。家賃はアパートで月八、〇〇〇円

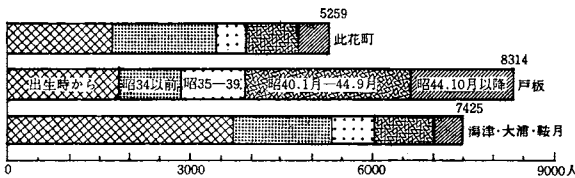


図5 入居時期別人口（昭和45年）〔国勢調査結果により作成〕

者

表1 事業所数(昭和47年)

	此地	花区	戸板	鞍月
総数	1,728	828	172	
農業	—	1	—	
鉱業	1	2	—	
建設業	70	65	31	
製造業	115	217	58	
卸売業・小売業	1,060	386	58	
金融・保険業	36	4	—	
不動産業	41	40	—	
運輸・通信業	40	28	7	
ガス・電気・熱・サ	—	2	—	
(別掲) 公務	365	83	19	
	—	—	1	



農家の庭先に設けられたアパート(戸板地区)

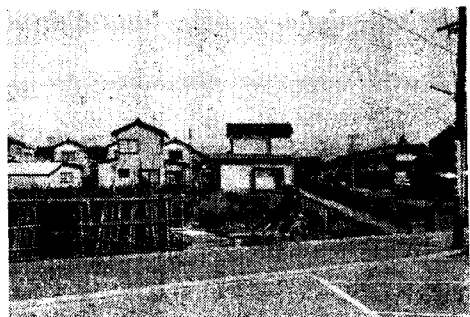
から一万五、〇〇〇円位、一戸建の貸家で二万円程度といわれる。

農家はこの結果、経済的に豊かで、豪壮な母屋を新築している家が多い。水田耕作は行なっているものの、農家収入の主体とはならず、ナシ畑は減少の傾向で、かえって一〇年前ころよりキク栽培が盛大になってきた。キクは手数がかかるときの、ナシより収入が大きく、中央市場へ出荷できる点で極めて喜ばれている。

註) 此花地区は此花校下にまたがる町の総計で、同校下より広域の数値である。(事業所統計調査結果より集計)

る。農家は土地の売渡しは好まないが、五、六人の高所得者もあり、あわてて土地を手放す必要もないわけである。都市化の進行はこの地区の農家を脱農化しつつある。この地区の都市化は今後さらに進むであろうが、それに対して区画整理を行なう意向は農家には極めて乏しい。これは減歩をきらってのことで、それをしなくても土地はいくらでも高く売れるからである。ただ外来者が多数この地区へ入り込んではいくもの、在来者と混在しているため、新旧の居住者間で別にトラブルは生じていないといわれる。

此花地区 鞍月・戸板両地区に対して、この地区はすでに戦前より人口減少が起り、とくに戦後はドーナツ化が著しく、此花小学校の児童数は高度成長の昭和三〇年代に急激な減少に転じた。金沢駅前を中核とするこの地区に商店・事務所・旅館・飲食店などがますます集積してきた(図6)。その結果、居住地としての条件は漸次悪化してきた。それにこれまでの木造建築は耐用年数がき、改築の時期に相当している。一方、この辺の市街路も金沢市街地の特色と変わりなく、小路が多く、自動車は一方通行となっており、子供の遊び場にも全く恵まれていない。また車の騒音も甚しくなってきた。それで事業所のみをここに置き、家族は郊外の住宅に移り、主人が通勤



梨畑の農村に進展する住宅群(戸板地区)

近年の著しいモーターゼーションにより、また駐車場が多くみられるようになった。駅前・白髷神社の境内はすっかり駐車場となり、社殿が丸裸で残されている点、鎮守の森のイメー

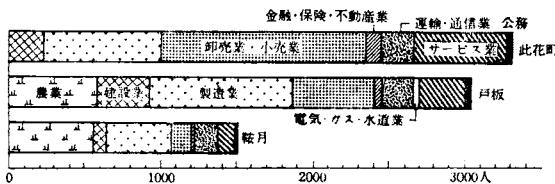


図6 産業別就業者(15才以上)の構成〔国勢調査結果により作成〕



民家・商家の密集地と近代建築(此花地区)

する事例が多くなった。一方、会社組織の事業所は夜間には人影もなくなり、このため公民館活動は極めて不都合になりつつある。
駅前地区のため旅館・飲食店が集中し、その従業員には母子家庭の婦人が比較的多いといわれる。なおこの地区では風紀の悪いことはなく、治安も良好といわれる。これには地区民の防犯委員会が活発な活動をしていることも大きく関係している。



金沢駅前の旅館と駐車場(此花地区、都ホテルの裏)

旅館・事務所・飲食店・商店にまじって住宅もあるが、これらはますます居住条件が悪くなり、郊外へ転進を余儀なくされるであろう。現にこの地区には多くの宅地・空屋がみられるが、これは郊外転住とその跡の再開発へのプロセスを示していると考えられる。かような変貌は今後さらに進展が予測されるので、公民館の活動はますます困難になるのではないかと危惧される。
参考文献

- (1) 経済企画庁 土地分類基本調査 地形・表層地質・土じよう
金沢 一九六九。
- (2) 金沢文化協会 金沢古蹟志 第十一編 卷廿八 昭和九年
三七―三八頁。

ジは全くない神社である。
一方、ビル建設も進行中で、金沢ビル・丸山ビル・高田商店ビルなどがみられるが、白髷神社・旧持明院をふくむ駅前の一角に再開発ビルを建設し、流通界の雄である一企業の進出が予想されている。持明院はもと白髷別当であったが、明治三年に分離したもので、昭和四六年に神宮寺へ移転し、あとは駐車場となった。また白髷神社も近く移転し、社寺は漸次姿を消していきつつある。これらのビル・

- (3) 同 第九編 卷廿三 三七頁。
- (4) 北田八州治 鞍月郷土史 昭和四七年。
- (5) 石川県 金沢港の沿革 昭和三八年。

第二章 金沢市の公民館と社会教育

一 金沢市の公民館の沿革と現状

1 発 足 当 初

周知のように、わが国における公民館運動は、昭和二年七月五日付都道府県知事宛の文部次官通牒「公民館の設置運営について」に始まる。石川県では、同年八月十四日付で、内務部長名で、この通牒と「公民館設置運営要項」を各市町村長、青年学校・国民学校長宛移牒している。

金沢市の公民館運動もこれにその端を発していることはいうまでもないが、その歩みについては、昭和四六年十月一三・一四日に金沢市で開かれた第二〇回全国公民館大会の際の資料「金沢市における社会教育の沿革と展望——地区公民館を中心に——」に要領よく記されているので左に転記する。

古くから学都、文化都市としての伝統をもつ金沢市は、数少ない非戦災都市のため公民館設置にはめぐまれた条件のもとにおかれ、加えて市民の社会教育に対する関心の深さと、行政面での積極施策が相乗的に働き、昭和二二年に自主的な校下（地区）公民館が三館（森山町、石引町、長田町）、翌二三年には中央公民館と、金石町公民館がそれぞれ設置された。

昭和二四年六月社会教育法が施行され、同年八月三馬公民館、

- (6) 金沢市役所戸板支所 戸板村史 昭和二〇年。

(矢ヶ崎孝雄 金沢大学教授・地理学)

翌二五年に瓢箪町、材木町および米丸の三公民館が相次いで開設され、地区館は八館となった。これらの公民館は、すぐれた指導者と、消防会館や善隣館などの施設、あるいは新築の専用施設（第一号は昭和二四年十一月工費一八〇万円で完成した材木町公民館。）を活用して、民主主義普及のための成人講座（この中には「聞く雑誌の会」という新しい企画もあった。）図書の実用と利用促進および体育レクリエーション活動を柱に、大きな実績をあげてきた。

市は、各公民館に対して年額二八万円を補助したが、これは当時としては相当大きな金額であり、専従職員給料（月額おむね七、〇〇〇円）が含まれていた。

しかし、この金沢市における公民館設置の歩みは、石川県の公民館設置の動きが他の都道府県にくらべてかなり急速なものであったということもあって、石川県他の市町村のそれとくらべて決して先進的なものだったとはいえない。特にその人口が県全体の三分の一を占める点を考

表 2

年次	県下の設置数	金沢市の設置数
昭和22年 3月末	40	0
昭和22年 8月末	71	0
昭和23年 3月末	116	4

育委員会に対しそれぞれ年額二五、〇〇〇円の運営費を交付している。

その後金沢市における公民館は徐々に増加していくが、この間昭和二四年九月「公民館設置条例」を公布施行し、昭和二七年四月より全市の小学校区に一斉に地区公民館を設置し、この時その数三八館となった。その後隣接町村の編入等が増加し、現在、中央公民館一、地区公民館四五、自治公民館五（これは昭和四四年四月に森本地区を六区域に組織替えし、従来の森本地区公民館の他に五自治公民館を設けたもの）となっている。

この金沢市における公民館設置の方式は、地元の要求を掘起こし、これに支えられた公民館づくりを意図したもので、まず「公民教育委員会」という各町内会に基礎をおく校下単位の組織をつくったのもその現われといえよう。そして、設置する限りの公民館は独立館とし、財政的にもかなりのものにしよと努力したことがある。このような努力が一時、金沢方式とよばれる、各小学校区に一館を設置し、町内会とも密接に連繫した、市民の自発的参加による公民館というものを根づかせたものとして評価してよい。

このようにして始まった金沢市における公民館運動は、昭和二十五年九月に結成された、石川県における公民館活動の一特色をなしたものと評価される青年産業研究会（いわゆる青産研）の活動や、二六年五月に発足した生活改善協議会の運動など、青年、婦人の生産・生活問題を中心とする学習運動の拠点となると同時に、身近な問題の調査や、各種資料の配布、グループの結成と研修の促進、研究発表会の開催などを通して、新しい町づくりの気運をつくる拠点ともなった。

一方、戦後社会教育の一つの主要な柱であった民主主義の普及定着のための啓蒙活動もこの公民館を拠点として行われた。この活動

は、昭和二三年十月に連合軍総司令部より貸与された三台のナトコ映写機を利用してのCIE（民間情報教育局）映画による巡回映画会とからめて行われることがしばしばで、当時娯楽に飢えていた民衆の要望とも合致して、多くの人を集め、それなりの役割をはたした。そしてこのことは社会教育における視聴覚教材利用普及の素地をつくった。

このような活動の経費は市の交付金四五％、地元負担金五五％の割合でまかなわれている。即ち昭和二八年度の地区公民館予

表 5

分 類	回 数	参加人員	
		人	回
聞く会	1181	73,154	
座談会	627	24,988	
合 合	2,578	72,383	
視 察	181	12,884	
レクレーション	1,026	182,202	
議 事	1,492	35,489	
行 計	144	66,742	
合 計	7,230	467,842	

表 4

区 分	金沢市総数	1館平均額
市 交 付 金	4,856,000円	138,742円
地 元 維 持 金	6,229,979	178,000
合 計	11,085,979	316,742

算は表4の通りとなっている。なお、この年の活動実績は表5の通りである。

2 その後の歩み

以上のようにして発足した金沢市のいわゆる「金沢方式の公民館」は、その他にほとんど社会教育施設らしい施設の皆無といつてよいような状況の中、しかも市民の生活も戦後の貧困の一般的であ

表6 石川県の公民館の状況

公民館 職員 総数	公民館の職員								人 口	参考		
	本館職員数				分館職員数					人口	公民館費	左の 公 費 額 の中の 費 額
	計	専任	兼任	非常勤	計	専任	兼任	非常勤				
55	55	6	1	48					366,035人	228円	130円	
43	34	20		14	9			9	48,519		(406)	
50	50	2		48					97,376	120	66	
29	29	3	11	15					35,179		(46)	
48	20	10		10	28				30,300		(123)	
39	39	11	1	27					58,154	115	95	
22	20		6	14	2				28,528		(250)	
39	39	8		31					31,904	677	594	
4	4	3		1	3				13,432		(557)	
10	10		5	5					12,953		(1118)	
5	5	3	2						12,013		(582)	
7	3	3		4					8,587		(136)	
2	2		1	1					4,302		(504)	
13	13	3	7	3					11,793		(535)	
16	16	10	1	5					12,296		(925)	
10	10	5		5					14,383		(166)	
2	2		2						1,190		(443)	
3	2		2		1			1	1,874			
7	3	2		1	4			4	4,432		(174)	
4	2		2		2			2	1,396		(1534)	
4	4	1		3					2,167		(1406)	
28	4	3		1	24			24	22,128		(88)	
7	7	5	1	1					11,438		(256)	
16	4	2	1	1	12			12	11,120		(604)	
41	3		2	1	38			38	10,170		(188)	
16	14	6		8	2			2	12,222		(917)	
22	2	2			20			20	14,218		(400)	
16	4			4	12			12	7,940		(5204)	
3	3			3					17,991		(301)	
10	10			10					9,366		(200)	
4	4		3	1					6,716		(787)	
33	6	5	1	1	27			27	6,702		(1075)	
19	7	6		1	12			12	9,980		(323)	
6	6	1	4	1					10,890		(145)	
13	13	2		11					4,600		(780)	
5	5	2	2	1					6,187		(813)	
56	56	2	2	52					16,682		(252)	
18	18	2		16					14,751		(1274)	
16	16	5	3	8					17,349		(31)	
19	3	1	2		16			16	6,741		(669)	
15	15	6		9					10,675		(276)	
777	562	140	63	359	212			15 197	1,024,579	340	(296)	

() は全額公費の市町村

った中であつては、市民の茶の間的な親しみやすい公民館、市民の身近かな生活関連事項をとりあげてくれる公民館として、その役割を相当地果してきた。しかし、戦後の状況を脱し、さまざまな問題をほらみつつも相対的な繁栄を手にした市民にとって、教育施設（媒体）も娯楽施設（媒体）も、それぞれに分化かつ高度化すると同時に、市民自身の生活課題、学習要求も大きく変質してしまつて

いる今日にあつては、かつて役割を果した「金沢方式公民館」もさまざまな矛盾を露呈しはじめている。その一、二の例をあげれば、公民館の施設設備の古さみずばらしさ。職員の身分の不安定・給与の劣悪（市教委の許可を得て館長が任命するという地区抱込み方式、市よりの給与も事業費の中に含めて計上されている）。学習課題が不明確になり、従つて事業がマンネリ化している。市民の公民

市町村名	公民館の設置状況					公民館の子算														
	公民館数	中央館数		地区館数		分館数	公民館の 予算額	左の中の 公費額	計	子算規模別館数										
		独立	併置	独立	併置					10万未満	10万20万	20万30万	30万40万	40万50万	50万60万	60万70万	70万80万	80万90万	90万100万	100万以上
金沢市	46	1		30	15		83,468千円	47,712千円	46						1		1	5	1	37
七尾市	13		1	4	8	9	19,712	19,712	13					2	3	1	2			
小松市	29			1	2	26	11,645	6,443	29	1	14	8	2			2				2
輪島市	10	1		4	5		1,601	1,601	10	9										1
珠洲市	10			6	4	16	3,722	3,722	10			1	6	3						
加賀市	17			6	11		6,715	5,507	17		8	5		2	1				1	
羽咋市	10			5	4	1	7,122	7,122	10		2	6			1					1
松任市	13		1	6	7		21,584	18,952	13											13
山中町	1	1				3	7,479	7,479	1											1
根上町	2		1	1			14,477	14,477	2											2
寺井町	1	1	1				6,990	6,990	1											1
辰口町	2	1		1			1,170	1,170	2	1										1
川北村	1		1				2,169	2,169	1											1
美川町	3	1		2			6,315	6,315	3											3
鶴来町	5	1		4			11,374	11,374	5										1	4
野々市町	5		1	4			2,393	2,393	5						4		1			
河内村	1		1				527	527	1						1					
吉野谷村	1	1				1														
鳥越村	1	1				4	769	769	1								1			
尾口村	1		1			1	2,141	2,141	1											1
白峰村	2				2		3,049	3,047	2											2
津幡町	1	1				12	1,938	1,937	1											1
高松町	2	1		1			2,923	2,923	2											2
七塚町	2	1		1		6	6,711	6,711	2	1										1
宇ノ氣町	1		1			19	1,910	1,910	1											1
内灘町	9		1	7	1		11,207	11,207	9	5	1		1	1		1				
富来町	1	1				10	5,684	5,684	1											1
志雄町	1	1				6	41,319	41,319	1											1
志賀町	1	1				7	5,413	5,413	1											1
押水町	4		1	3			1,876	1,876	4			3								1
田鶴浜町	1	1					5,285	5,285	1											1
鳥屋町	1	1				13	7,204	7,204	1											1
中島町	1	1				6	3,228	3,228	1											1
兜島町	1		1				1,583	1,583	1											1
能登島町	1		1				1,287	1,287	1											1
奥西町	1	1					5,032	5,032	1											1
穴水町	14	1		1	12		4,201	4,201	14		7	4	2							1
門前町	8	1		5	2		18,786	18,786	8		4	1								3
能登町	6	1		3	2		535	535	6	5		1								
柳田村	1	1	1			8	4,511	4,511	1											1
内浦町	6	1		1	4		2,944	2,944	6		2		2				1			1
合 計	237	22	15	97	103	120	347,999	303,102	236	22	29	31	15	9	9	5	6	5	3	92

備考

館への期待と参加の減退。等々があげられよう。

3 石川県の公民館の現状と金沢市の公民館

ところで、以上述べてきた金沢市の公民館の現状は、石川県の各市町村の公民館と比較してどのような状況にあるのか。その設置状況、職員、予算の状況を、昭和四十七年六月石川県教育委員会発行の『社会教育の現状』所載の表を転記して示そう。(四六・十一・一現在。なお、数値に若干の不備がある模様だがそのまま転記)

この表6で知りうる金沢市の公民館と石川県下諸市町村の公民館の状況との差異は、およそ次の点であろう。

- ① 前述の小学校下単位に地区館を設置した方針のため地区館に独立館の多いこと。(しかし、その多くは老朽化している)
- ② 一館当りの公民館費は、公費負担額のみをとってみても平均百万円を越えている点、他の市町村よりすぐれているようにみえるが、石川県下の公費負担額の総額三億円、人口百万人、県民一人当り二九六円に比較すると、金沢市の一人当り一三〇円は半額にもならない。しかもこのうちに前にも述べたように、事業費に込みに含まれている職員給与が含まれているのであってみれば、事業費の市民一人当りの額はもっと少くなる。
- ③ さらに職員に至っては、人口三十六万人に対し専任六名、他のはとんど(四八名)が非常勤であつては、活発な公民館活動を期待することはとうてい出来ない。しかし、この点については、昭和四十八年度より改善されつつあることは、金沢市の公民館活動の将来にとって明るい材料といえよう。

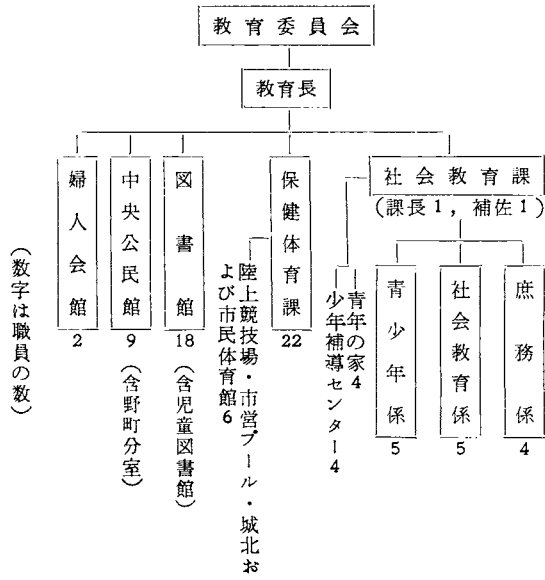
二 金沢市の社会教育の現状(公民館関係を除く)

金沢市の社会教育の現状は、金沢市教育委員会発行の『社会教育要覧昭和四十七年版』にくわしい。そこで、ここでは、この要覧から

抄出する形で、金沢市の社会教育の現状を紹介しよう。(必要に際し要約)

1 社会教育重点施策

- (1) 成人教育の振興
 - (イ) 家庭教育、婦人教育、高令者教育の推進
 - (ロ) 公民館活動の振興をはかり、変動する社会に対応した住民の教育、住民の地域連帯意識の醸成に努め、施設の整備拡充につとめる
- (2) 青少年教育の推進
 - (イ) 青年学級、青年セミナー等の勤労青少年教育充実
 - (ロ) 青少年団体、グループの育成と指導者の養成
 - (ハ) 青少年育成の市民運動促進と社会環境の浄化
 - (ニ) 青少年のドイツ、フランス、ベルギーへの派遣による国際理解と親善の促進
 - (ホ) 青年の家の増築
- (3) 公民館等施設の充実
 - (イ) 地区公民館運営費の増大をはかり、住民負担の抑制につとめる
 - (ロ) 視聴覚ライブラリーの整備と利用の促進
- (4) 伝統的文化環境の保存と整備



(昭和四七年度当初予算・歳出)

(1) 家庭教育学級

昭和三九年度より国庫補助をうけて二〇学級開設(一学級国・市各二万円計六万円、平均三〇人参加、学習時間平均二二時

表7の(2)

一般会計と教育費の關係
(当初予算・単位千円)

年度	一般会計		教育費		一般会計 に対する 比率
	金額	指数	金額	指数	
昭和137	3,626,022	100	639,146	100	17.6%
38	3,612,718	99	761,607	112	21.0
39	4,767,205	131	1,096,343	171	22.9
40	5,697,980	157	903,210	141	15.8
41	5,922,000	163	961,907	150	16.2
42	6,567,000	181	1,167,358	183	17.7
43	7,578,000	209	1,225,165	192	16.1
44	10,027,000	276	1,484,269	232	14.7
45	12,200,000	336	1,804,087	282	14.8
46	15,604,000	430	2,808,372	439	18.0
47	18,607,400	513	3,321,897	519	17.9

表7の(1)

昭和47年度金沢市一般会計歳出予算
ならびに教育費内訳

科目	当初予算額 (単位千円)	構成比
歳出合計	18,607,400	100%
内・教育費	3,321,897	17.9
教育費内訳		
教育総務費	148,445	4.5
小学校費	1,376,762	41.4
中学校費	365,033	11.0
高等学校費	191,600	5.8
社会教育費	203,605	6.1
保健体育費	461,277	13.9
大学費	575,175	17.3
合計	3,321,897	100

表7の(3)
昭和47年度主要事業費（関係分）（単位千円）

主要事業名	金額	事業内容の説明	
社会教育の強化	143,024		
内 訳	成人教育振興費	10,014	家庭教育学級（38学級） 1,577 婦人教育 1,388 美化運動 1,500 視聴覚教育 1,619 その他成人教育 3,930
	青少年対策費	17,841	少年教育 1,050 青少年問題協議会 216 青少年特別対策 880 国際青年交歓受入 500 青年海外派遣 2,000 校庭開放事業 420 留守家庭児童会育成 300 勤労青年国内研修 926 青年教育費 807 勤労青少年育成 2,530 中央青年学級 1,697 職域、地区青年学級 1,515 少年補導センター 5,000
	文化振興費	3,931	
	中央公民館費	5,465	
	地区公民館費	36,765	地区公民館事業委託，地区公民館長研修
	青年の家運営費	2,375	
	婦人会館運営費	1,825	
	社会教育施設整備費	46,867	地区公民館施設整備 青年の家施設整備 婦人会館施設整備
	図書館	8,687	
	保健体育の強化	275,537	
	学校保健費	28,561	
	学校給食費	20,053	
	学校体育費	700	
	その他保健体育費	226,223	（社会教育と関連の深いもの）

花等の教室に六八二回、一〇、八八三人、合計九〇二回、一五、〇九四人であった。

5 青少年教育
青年学級

表 9

計	特殊学級	職域学級	地区学級	中央学級	学級区分学級数		総額	当り	学級生(内女子)	備考
					総数	当り				
12	1	2	6	3	3,087	1,697千円	537 (209)	57 (19)	171 (57)	
	185	300	905	566	257	151	50 (23)	36 (7)	244 (115)	児童、建設

(2) 現代セミナー・青年セミナー

現代社会の急激な変動にともない青年の生活環境にも大きな変化が現われ、都市化と情報化社会の進行による孤独感、疎外感の増大と地域連帯性の衰退があげられている。このような社会変動に積極的に対処する態度を培うため、現代青年に生きがいを求める場を与え、郷土を愛する心をうえつけ、あわせて学習と仲間づくりの機会を拡大することが急務であると考え、青年たちの自主性、創意性を尊重したコース別の現代セミナーを開設した。(五教室—現代セミナー)

また社会生活に必要な一般教養を向上させるとともに、学習を基礎とした集団活動を体得させ、青年期の人間形成に資することを目的に、地区公民館を実施機関とした青年セミナーを二二教室開設した。

現代セミナー開設状況(四七年度)

表10の(1)

一教室	平均	教室名					平均	学習内容		参加人員 ()内はその うちの女子の数	経費
		科目	科目	科目	科目	科目		時間	時間		
青年セミナー	80	農業の実態	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	54	生きがいの探求	50	50	55
湖南自治	50	生きがいの探求	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	30	生きがいの探求	24	31	60
浅野町現代	50	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	50	野 外 活 動	21	25	45
長土堀現代	40	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	50	野 外 活 動	50	50	75
城南ユース	50	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	50	野 外 活 動	25	25	50千円
中村町現代	50	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	野 外 活 動	50	野 外 活 動	25	25	50千円

青年セミナー開設状況(四七年度)

表10の(2)

一教室	平均	教室名		科目	学習内容	参加人員 ()内はその うちの女子の数	経費
		科目	科目				
此花町・戸板	1,253時間	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	638 (230)	1,051千円 (市費660 地区負担391)
鞍馬等	1,253時間	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	638 (230)	1,051千円 (市費660 地区負担391)
二十二	1,253時間	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	一般教養・職業	638 (230)	1,051千円 (市費660 地区負担391)

(3) 開発青年セミナー

表10の(3)

教室名	人員	グループ	研究科	経費
医王山 青年セミナー	33	郷土史	過疎地対策と郷土史研究	100
理容青年 セミナー	62	理容	新しい理容技術の開発と新時代に対処する理容師の道徳の拡大について	100
水稲教室	20	水稲	稲作の機械化による経営規模の拡大について	100
一般野菜教室	27	一般野菜	野菜栽培を主軸にした農業経営の合理的なあり方	100
砂丘地 野菜教室	37	西瓜・大根	大規模経営の合理的あり方	100
果樹教室	20	なりんご	品種の検討と育成	100
畜産教室	27	酪農・養鶏	糞尿処理の実態調査とその対策	100
花卉教室	20	花一般	花卉栽培技術確立と経営安定	100
林業教室	20	林業	特産林業	100
りんどうの会 セミナー	52	写真・生花 文集・洋裁	身体障害者福祉法の研究	60

勤労青年達が、地域課題にとりくみ連帯意識を高め、また進んで地域の開発に参画する気運を培うとともに、激動する現代社会に対処し、たくましく生きぬくための知識や産業技術を研究体得し、将来への糧とするため

開発青年セミナー開設状況(四十七年度)

(4) 勤労青年国内研修事業

昭和四〇年に科学教育の振興と勤労青少年の健全育成を目的とし戸沢勇次郎より寄付されて創設された「戸沢教育基金」による事業で、全国各地の国立青年の家で、合計八回のグループリーダー研修会を、各回二―六日(平均四・五日)、各回十数名(能

登青年の家の場合の六〇名と他に五名一回、七名一回という例外を除いて)総計一三八名(平均一七名強)の参加によって実施している。

(5) 青少年団体の育成

このことについては、組織としては、金沢市青年団協議会(団員男二、八〇〇人、女一、五〇〇人計四、三〇〇人)の他、青少年団体連絡協議会、サークル連絡協議会があり、これらに結集している青少年団体グループとしては、宗教関係、合唱や美術などの文化関係、BBSなどの社会活動、スキーや卓球等のスポーツ関係、理容、栄養士などの職業グループ、若い根っ子の会など全国組織をもつもの、さらには親睦や趣味のグループ等々、四二の団体をあげている。

また少年団体では、各町会単位でも会が組織され、小学校一年生から中学三年までの少年がリーダーや育成委員の指導助言によって活動している。団体数九一四、これも会員数三七、〇〇〇名、指導員(リーダー)五五〇名、育成委員一、五〇〇名。その他の少年団体としては、ボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団、青少年赤十字などがある。

(6) 青少年問題協議会

金沢市の青少年問題協議会は、昭和三十七年四月条例で設置され、委員三〇名、(市長、教育長が会長、副会長)幹事十一名で構成され、事務は社会教育課青少年係が担当している。事業としての特質は、

青少年談話室の開設 青年学級、青年セミナー、青年団活動、青少年グループ等を育成する拠点として、昭和四二年度から地区公民館に青少年談話室を設置。その状況は、四二年度一、四三年度二、四四年度二、四五年度一、四六年度三、四七年度戸板公民館

他二、以上計十一に及んでいる。

青少年健全育成実践地区指定 瓢箪町公民館地区が指定されている。

こどもの広場民間施設開放事業 市内十三ヶ所、延六、七六二㎡
対象少年人口三、五八六人となっている。

環境浄化運動の推進 地域婦人が中心に、環境浄化パトロールや懇談会を開き、重点事項としてよい本、すぐれた美術をすすめる運動、よくない本・映画・テレビ番組をなくする運動をとりあげている。

企業青少年代表コンパニオン育成事業 昭和四七年度は一一〇名のコンパニオングループを育成する。(企業内における青少年リーダー)

その他の青少年関係事業 留守家庭児童会育成事業、家庭開放事業、青少年の国際交流——海外派遣等を行っている。

金沢市少年補導センター(新設) 昭和三十一年十月石川県警察本部防犯課が主管となって開設したものを、青少年の健全育成の立場から全国的な例にもならって昭和四七年四月より、市社会教育課が主管となって運営することとなった。所在は石川県社会福祉会館の三階で、職員は九名。なお少年補導員として、小中学校校外指導連盟、BBS、婦人会、青少年団体、その他民間有志に、一ヶ年任期で少年補導員を委嘱している。

青年の家 昭和三四年八月一日開設。敷地四〇、六一一㎡。鉄筋コンクリート二階建五四七・八㎡と別館一階建二三七・六㎡。山間にあつて、キャンプ、ハイキング、登山、スキーなどの野外活動や、合宿研修に利用されている。職員四名。昭和四六年度の利用者は、宿泊者九、七七二名、日帰者二五、九一五名。

なお昭和四七年度に鉄筋コンクリート二階建四九八・四一㎡が

増築された。

6 その他

(1) 視聴覚ライブラリ

昭和四五年四月中央公民館新築を機に、同館に二九・五㎡の専用部分を設け、その充実と利用の普及をはかっている。

(2) 図書館

金沢市立図書館は、昭和五年に開館。蔵書数一七八、六五八(昭和四七年三月末現在)もさることながら、二二の特殊文庫を蔵して、質的にもすぐれている。

他に、平和町児童図書館(蔵書五、七六五)がある

(3) 体育施設

社会体育の施設としては次のものがある。

市営陸上競技場。面積三五、五五二㎡。第二種公認陸上競技場。収容人員一五、〇〇〇人。

城北市民体育館 敷地面積一、六九六・五九㎡。建物面積九九〇・五九㎡。バレーボールコート二。バスケットボールコート一。バドミントンコート三。卓球八面。その他

城南市民体育館。敷地面積二、五五八・〇八㎡。建物面積以下城北市民体育館と同じ。

市営プール。面積一三、五三〇㎡。五〇m長水路公認プール。二五mプール。飛込プール。収容人員四、五〇〇人。

他に二五mプール四(本多町プール。穴水町プール。平和町プール。泉野町プール)。

7 上記以外の関係施設

金沢市民の利用しうる(金沢市所在の)社会教育関係施設および社会体育施設は次の通り。(施設名のみ列記するに止める)

(1) 石川県立の社会教育関係施設

- ① 社会教育センター
- ② 図書館
- ③ 石川県美術館
- ④ 郷土資料館
- ⑤ 能楽文化会館
- ⑥ 生活科学センター

第三章 調査対象地区の公民館の現状

一 沿革

昭和四六年に金沢市で開催された第二〇回全国公民館大会の際の資料「金沢市における社会教育の沿革と展望」作成に当って、金沢市が市内各公民館に提出させた「公民館沿革調査書」には市内各公民館の沿革が簡潔に記されているので、調査対象地区三公民館の沿革については、これを左に転載する。

1 鞍月公民館

(1) 公民教育委員会当時の状況

昭和二四年二月十三日、鞍月公民教育委員会によって「大衆のための民主主義講座」の第一回が開催された。法律、教育、産業衛生、「時事問題など、三月十八日まで」に十回、延二九九名が参加。戦後なお日浅く人心まだ安定せぬ中において民主主義の普及を目ざし、鞍月校下における社会教育活動の第一歩をここに踏み出している。二五年二月に始めて冬期青年学級が開設されるなど、講座、学級が盛んに開設される一方、二四年四月には鞍月青年産業研究協議会が発足、台所の調査改善研究発表会等実践活動

- (2) 石川県立の体育関係施設
 - ① スポーツセンター
- (3) 金沢市立のもの
 - ① 勤労青少年ホーム
 - (4) 私立のもの
 - ① 中村美術館 その他

もまた盛んであった。

当時めざましく普及してきた「ナトコ映画会」が盛んに開催され、また講座や学級などにもとり入れられるなど、その頃行われていた「語る雑誌の会」と共に娯楽の少なかつた当時の人達に大きな安らぎと楽しみを与えていた。

(2) 公民館発足から今日までの経過

昭和二七年四月鞍月小学校内に公民館が設置され、都市近郊の純農村の特質を生かし、社会教育を進めてきた。昭和二八年六月に市の実験公民館としての指定をうけ、「農業地帯における成人教育と分館活動について」研究するなど分館活動もまた盛んであった。昭和三十五年頃よりは農業は次第に兼業化の方向に向い、近々十年足らずで、これまで純粹の農村で農家三五〇といわれたものが、専農といえるもの十数戸という変りようで、生活のあわただしさは人々を労働過重へ追い込み、更に休養の不足から健康は阻害され、スポーツは勿論公民館事業への参加意欲の低下もまた当然のことであった。こうした変貌に対処するため、各種の講

座、体力テスト、成人病検診を含む健康増進運動、交通安全、時間勵行運動等の住民運動を通じ、公民館への関心を高めることに努めてきた。昭和四二年間屋団地の竣工、続いて金沢港の開港、道路整備と、地域開発は急激に進み、地域の様相は更に大きく変化した。こうした地域の状態をふまえ、地域開発に対し住民の関心を高め、健全な町づくりのため「成人講座」の開設、先進地の見学、更に校下民の要望による学級の開設等、地域に即した魅力ある公民館活動の展開に努力している。

2 戸板公民館

(1) 公民教育委員会当時の状況

(昭和二四年—二七年)

戦後の混乱の中からおこった公民館活動は、民主主義普及のための成人講座、体育レクリエーション活動のほか、青年婦人層が青年産業研究会、生活改善協議会などを組織し、①地域課題の調査、②グループ別研修および実践、③資料の発行、④研究発表会などの実践活動を展開してきた。これらの地道な地域活動の積み重ねが新しい町づくり、公民館設置の原動力となった。

(2) 公民館発足から今日までの経過

(昭和二七年四月から)

昭和二七年四月、(金沢市役所の)戸板支所内に公民館を設置し、都市近郊の特質を生かした社会教育を進めるとともに、住民自治活動のセンターとして地域の開発と住民福祉の向上につとめてきたが、県道中橋陸橋の完成にともない、金沢中央卸売市場をはじめ、会社工場住宅が急増し、さらに金沢西口駅、北陸自動車道、バイパスの建設、金沢港の開港などで、地域の様相は大きく変った。こうした変貌に対処して、住民の融和と連帯感を育成するため、郷土美化、交通安全、明正選挙推進などの住民運動を展

開するとともに、社会教育関係団体指導者研修会をはじめ、各種の学級、講座、教室等を開設し、新鮮かつ魅力ある公民館活動を展開してきた。これらの成果として次のような事項があげられる。①婦人学級での学習から、グループ活動の必要を知った大豆田本町の主婦たちの熱意が町会を動かす、神社境内に分館を建てた。②昭和三九年九月、県下初の少年連盟美化推進隊が結成され、美化奉仕と花いっぱい運動を率先実施している。③北町の主婦が「ふきのとうグループ」を結成して貯蓄推進、廃品回収、衣料交換会、台所はかり・残菜入れの共同購入などを行い、暮しの合理化と環境美化をすすめている。④婦人会が昭和三九年以来、機関誌「戸板婦人」を年六回発行し、内容豊かな広報活動を行っている。

3 此花町公民館

(1) 公民教育委員会当時の状況

組織としては総務・財務・教務・図書・産業・視聴覚・生活科・学・体育の八部が設けられ、各町会から男女各一名の公民教育委員が推薦され、運営に当たっていた。昭和二六年一月校下成人式当日、成人該当者一同から図書購入費の寄贈があり、図書部開設の基因がつくられたが、翌二七年にも同じく寄贈を受け、図書部の内容が充実し、青年学級生等に喜ばれた。青年学級と並行して婦人講座、成人講座がもたれ、各種の教育講座が開かれたが、同時に青年産業研究も市から補助を受け(昭和二六年二万円)活動を展開していた。しかしそれは、都市的性格からその運動には種々の困難があったようである。

(2) 公民館発足から今日までの経過

昭和二七年四月公民教育委員会から公民館として新発足し、今日に至っている。その間、駅前地区という当校下の特殊事情もあって、公民館活動には多大の支障を伴ったが、歴代館長をはじめ

め、特に執行部委員の熱意と努力によって着実な歩みを続けてきた。その主なものとして、①新発足当初は広報部もなく、各種のグループ研究の組織もなかったが、教養部の事業として館報第一号が発行され、同年度(二七年度)中に第二号も刊行されて、公民館活動の伝達とP・Rに大きな役割を果たしたようである。翌二八年度に調査広報部が新設され、今日の発展の先駆となった。また同時に、謡曲、短歌、生花、茶道の四教室が開設され、今日のクラブ活動の草分けとなったが、現在では民謡と囲碁が公民館事業として取上げられ、他は全て貸館事業となっている。②公民館となつてから、青年学級は代々よいリーダーを得て昭和三八年に市中央第二普通青年学級(瓢箪町小学校に設置)に統合されるまで、自治会が組織され、文化部体育部等が置かれ、学習科目も生花・編物・茶道・習字、クラブ活動(体育・読書サークル)等のほか、一般教養講座、座談会等が実施され、活発な活動がなされてきたようである。③駅前という特殊地域の関係上、昭和三七年六月「金沢駅前を美しくする会」が設立され、以来毎月十五日を定例日として、駅前地区の清掃美化をなし、毎月十日二〇日を「こどもを守る日」として駅周辺の巡回補導をなすなど、関係町会並びに各種団体の中心となつて防犯と美化につとめている。④長期継続事業として、主なものに次のような行事があげられる。(イ)校下社会体育大会(本年は第二四回目を迎えるが、公民館が主催するようになったのは昭和二九年からである。近時各校下とも廃止の傾向にあるもようであるが、本校下は町会連合会も共催で、数年前から大会費として十九万円の計上が認められ、年と共に盛大に行われている)。(ロ)囲碁・将棋・連珠大会(昭和三三年から近くの鍛冶八幡宮を会場として開催し、本年は第十四回目である。毎回一〇〇名を超す参加があり、きわめて盛大である。総

合審判長は青木栄山連珠九段で、他校下もオープン参加を認め、北陸中日新聞、石川テレビの後援で、全市の大会として人気を呼んでいる)。(ハ)早朝ラジオ体操の会(全校下を一本に公民館委員の世話で行っている。公民教育委員会時代より継続し本年は二十二年目)。(ニ)特殊指定健全育成事業。昭和四一年度、市から「青少年非行化防止モデル地区」に指定され、各種団体と協力のもと、不断の啓蒙運動と子どもを守る日の巡回補導に力を注いだ。昭和四六年度、市及び県から「健民運動実践地区」の指定を受け、公民館が主体となつて、実施委員会を設け、関係機関、団体ともども地域ぐるみで「青少年健全育成事業を推進している。実施の重点目標は次の三つである。「家庭の日立志の日の普及推進」「勤労青少年のグループ育成と加入促進」「非行防止活動」

二 施設

1 鞍月公民館

敷地 五一八・一㎡

建物 木造平屋建(専用)。昭和二九年七月新築、

建坪二二七・六㎡

内訳 事務室、会議室、応接室(兼図書室)、講堂(一〇〇

㎡)、宿直室、第二会議室、台所、玄関、便所、廊下

分館 二館(戸水町公民館・双葉町子どもの家)

2 戸板公民館

敷地 六一〇・五㎡

建物 木造二階建(専用)

建坪 四五〇・九㎡

内訳 集会場、談話室、各種教室、図書室兼青少年談話室、

料理実習室等

分館三館

① 北町公民館

② 西念町公民館

③ 大豆田本町公民館

3 此花町公民館

老朽化がはなはだしく、公民館建設期成同盟が出来て再建に努力しているがまだ実現に至っていない。

敷地 一一五㎡(借地)

建物 木造二階建(社会福祉協議会より借用)

建坪 一三五・五㎡

内訳 事務室兼図書室、集会室、教室、台所、便所

三館の施設の概要は右の通りであるが、戸板公民館は広さとしてはまずまずとしても、そのうちの最大の室では保育所が併設されていて、公民館の機能をかなり阻害している点を考慮に入れば、三館ともに狭隘であり、特にその老朽化は今後の公民館活動にとって致命的な欠点といわねばならない。

三 職 員

1 鞍月公民館

館長 非常勤

主事 一名 専任・常勤

宿直員 一名(月手当三、〇〇〇円)

2 戸板公民館

館長 非常勤

主事 一名 専任・常勤

事務員(女子) 一名 常勤

管理人 一名 宿直および雑務担当(月手当一〇、〇〇〇)

3 此花町公民館

館長 非常勤

主事 一名 専任・常勤

戸板公民館は校下が大きい事もあって常勤事務員が一名あるが、他は常勤者は主事一名で、いずれも市行政の末端業務をかなりかかえている。したがって、この地域の公民館活動はこの主事のいわば八面六臂ともいふべき活動に支えられている部分大きい。

四 組 織 ・ 機 構

三館ともに、公民館運営審議会と公民館委員会によって運営されている(公民館委員が何名かづつでそれぞれの部を構成して活動している)が、この両者ともに、校下の町会長もしくは町会代表者と各種団体の代表者によって構成されていることは共通している。したがって公民館活動自体も、町会と各種団体(婦人会、青年団、社会福祉協議会等)に支えられて行われることになっている。

1 鞍月公民館

公民館運営審議委員 二〇名

一号委員 小学校長 一名

二号委員 校下八町会の町会長全員八名、校下の社会教育関係団体の長をはじめ各種団体の長八名

三号委員 三名

公民館委員 四三名

校下八町会より代表各三名計二四名、各町会の婦人会(八名)

少年連盟(七名)、青年団(四名)計十九名

なお、右のうち各町会代表一名の代表委員計八名によって代表委員会が構成されて運営に当たっている。

2 戸板公民館

公民館運営審議委員 十四名

公民館運営審議委員 十四名

表11の(1)
収入の部

	此	花	戸	板	靴	月	備考
	円	円	円	円	円	円	
(県)市交付金	763,400		902,500		800,500		①
校下負担金	515,250		1,332,880		530,400		
雑収入	97,324		1,243,367		91,042		②
団体助成金					440,000		
繰越金	136,999		70,372		23,735		
計	1,512,973		3,549,119		1,485,677		
(参考:世帯数) (負担:世帯当り)	1,448		2,059		704		
	356		647		753		

備考

① 運営費、指定事業費

② 戸板のばあい内訳

事業収入	習字	597,582円
	貸会場	98,700円
雑収入	社協人件費	137,700円
	体育大会広告菜	216,500円

ほか

一号委員 小学校長 一名
 二号委員 社会教育関係団体をはじめとする各種団体の長(校下町会連合会長を含む) 八名
 三号委員 校下町会連合会役員 五名
 公民館委員 三五名
 校下十七町会のうち運営審議会委員を出していない町会長 十名
 校下十七町会より推薦された二四名(大きな町会は男女各一名、町会の役員や町段階の各種団体の役員が多い)

3 此花町公民館
 公民館運営審議会委員
 定数二〇名(現在十八名)
 一号委員 小学校長 一名
 二号委員 町会連合会長、副会長(二名) 諸社会教育関係団体の代表五名、計八名。(この中に公民館建設期成同盟の会長一名を含む)
 三号委員 元公民館長、元町会連合会長等、九名。

さらに、公民館活動の組織としては、館長を中心に、総務、体育、視聴覚、広報、文化教養、青少年、婦人、老人等の諸部をおいていることは三館ほぼ共通している。(此花公民館に美化部というのがあるのがやや特長)。

五 公民館費

三館の昭和四十七年度決算は次の通りであるが、事業費に関してはその項目の立て方がそれぞれ異なるので、事業費内訳については三館別々に示した。

表11の(2)
支出の部

	此	花	戸	板	靴	月	備考
事務内訳	828,260	1,927,244	1,005,604				①
業務費	589,634	1,635,040	659,000				
その他	238,626	292,204	346,604				
繰越金	534,091	1,249,045	432,302				
予備費		80,470	19,300				
計	1,512,973	3,549,119	1,485,677				

備考① 負担金、管理費、備品費を含む

表11の(3) 事業費内訳

此 花		戸 板		鞍 月	
				円	
総務部費	140,170	成人式費	32,090	総務部費	114,777
(成人式・立志の日・研修会・表彰費)		成人講座費	15,960	(成人式費・研修見学費)	
文化教養部費	39,110	社教団体研修費	27,169	文化部費	79,915
(囲碁将棋連珠大会費)		消費者学級費	4,760	(講座費・社会見学費)	
文化祭費・図書費		習字教室費	391,620	体育部費	60,037
体育部費	291,941	社会体育費	249,999	(ソフトボール大会・ボーリング大会ハイキング・バレーボールグループ諸大会参加費)	
(会体育大会、市民体育大会、バレーボール大会、ラジオ体操会、歩こう会、体力検定、親子ハイキング・スポーツ教室)		市民体育大会費	13,230	広報部費	37,980
広報部費	13,000	教材費	8,000	(公民館ニュース費)	
視聴覚部費	15,150	視聴覚費	60,207	視聴覚部費	15,000
青少年部費	15,250	敬老会費	94,390	少年部費	47,593
婦人部費	10,000	老人憩の間	48,250	(事業費・講習参加費等)	
(講習会費)		青年セミナー費	34,500	青年部費	45,000
美化部費	9,470	婦人学級費	62,860	(青年セミナー費)	
計	534,091	事業手当	26,500	婦人部費	22,000
		助成金	136,000	(講座費・美化推進費)	
		雑費	43,510	老人部費	10,000
		合計	1,249,045	合計	432,302

1 鞍月公民館

昭和四八年四月二五日に開催された運営審議会と公民館委員会合同役員会に提出された資料によれば、昭和四八年度の重点目標として次のことが掲げられている。

(1) 鞍月を知らう

地域の現状に添って公民館活動を推進することにより、良識ある市民の育成につとめ、更に地域への関心を深めることによつて、郷土愛と地域社会への連帯感の振興につとめる。

(2) 青少年をのばそう

青少年問題に対する関心を高めると共に、家庭内の人間関係の明朗化につとめ、次代を担う青少年の健全育成に努力する。

(3) 豊かな心を育てよう

健康鞍月を目ざし、スポーツを奨励し、心身の健全な発達と、明るく豊かな生活の実現に努める。

なおこれらに関し、(1)については昭和四四年以来成人講座「未来を語る」を連年開講し(四七年度は五回)、昭和四八年度は金沢市の特別指定事業「明るく住みよいまちづくり」の一環である「文化生活の町づくり」の指定(市補助金二〇万円。地元負担金五万円)をうけて実施している。

また、(2)については現代地域青年セミナー(金沢市指定事業)を実施、昭和四七年度の実施報告書によればその概要は次の通りである。

セミナー生 男一五、女一〇 計二五

平均出席数 一五

学習内容 一般教養三八、職業二、体育レクリエーション二〇

計六〇時間

經費 市補助金三万円、公民館費一万五千円、寄付金三千円計四八、〇〇〇円

さらにまた (3)については、昭和四二年二月、石川県内ではじめて壮年体力テストを行い、翌年より血液型判定、成人病検診を加えて地域住民の健康管理に意を用いている。

以上述べたもの他には次のような事業を実施している。

家庭教育学級。七—十一月の間九回

総務部関係。役員研修会や政治講座、成人式。文化部関係。趣味の教室。成人講座(前述)、富山火電見学他社会見学二回、時事放談、郷土史や身近な法律の講座、園芸講座等。

体育部関係。親子ハイキング、社会体育大会、ボーリング大会(二回)、バレーボール教室(年間)、バレーボールグループ活動等。

少年部関係。子ども教室(年間)、子ども映画教室、時の記念日ポスター展、校下球技大会、ラジオ体操の会等。

青年部関係。絵画教室、作品発表会、ハイキング、話し合い、民謡講習会等。

婦人部関係。巡回婦人教室(五町会で二月一日—三月一日の間十回開催)、着付教室等。

老人部関係。慰安会その他広報部関係。一月館報発行

視聴覚部関係。ハイキング記録写真、成人式記録写真等。その他。習字教室、珠算教室、生花教室、あみもの教室、正信儀練習会、宗教講座等。

なお校下の各種団体も公民館と連繫しつつそれぞれに活動してい

るが、校下婦人会の活動の概要を次に記してその一端を示そう。
鞍月校下婦人会(昭和四七年度総会議案書による)昭和四六年の活動は次の通り。

年間經費は一八一、六〇〇円で内会費は四万四千百円(二四%)。主な事業は公民館主催の成人講座への参加(共催)の他、指導者講習会、庄川温泉での母の会、医王園奉仕、日光への慰安旅行、正月料理講習等となっている。

なお、公民館運営審議会に委員を送っている団体に、農協、青年団、婦人会、社会福祉協議会、郷友会(壮年会)親寿会(老人会)育友会、拓心会(青年団と郷友会の中間年令の会)消防団校下分団があり、これらが公民館運動を支える団体として機能している。

2 戸板公民館

昭和四七年度公民館事業実施報告書及び月別行事実施表によれば、戸板公民館の重点目標として次の二項があげられている。

(1) 地域に密着した教育機関としての新しい公民館像を追求し、創造し、定着させていく。

(2) 地域住民のよりよい文化生活の実現と相互の親和、生活の合理化をはかる。

これらの目標実現のため、特にその重点を各種団体や学級等の指導者養成に置き、各種のリーダー研修を行っているのが特色といえよう。なおそのような研修の他、この公民館で実施している事業は次の通り。

主催事業

△対象別▽

① 青年 青年セミナー

三日間の研修旅行を含め年間二一回開催。学習内容は体育レクリ

エーション六回、一般教養十二回（歴史・社会に関するもの、人生観に関するもの、観劇とその話合等）。出席は平均男九・三人、女三・八六八、計十三・二人で終始平均しているところが長所といえよう。

② 婦人 戸板中央婦人学級（十回）
西念町消費者教育学級（五回）

③ 成人 研修旅行（二回）
歴史研究会（三回）

④ 高令者 校下敬老会
法話会・老人団体研修会・研修旅行

△事業別▽

① 体育レクリエーション
社会体育大会

バレーボール大会（二回）
ソフトボール大会、親子ソフトボール大会、納涼盆踊り大会

② 視聴覚 8ミリ映画制作

カラースライド制作（金沢市の指定事業で、郷土史の発掘を目的としたもの。作品名「天保義民」）

③ 定期講座 家庭教育学級（北町にて十一回）
④ 教室 習字教室

△市民運動▽

① 交通安全 町別交通安全全教室
美化運動 町を美しくする運動

花一ぱい運動

③ 明正選挙 選挙の話合・政治講座

△その他▽

成人会、カメラ教室

自主的活動（公民館を場とする団体活動）

① 婦人 婦人読書会、婦人バレーボールグループ、料理講習会

② 青年 青年会活動（体育・話合い学習・美化運動等）

③ 老人 囲碁教室

④ 体育レクリエーション

民謡研究会、バレーボール教室

公民館創立二〇周年記念文化祭

なお昭和四七年度は公民館創立二〇周年に当たったため、十一月三日―五日の間、記念式、講演会、芸能まつり、焼もの大会、菊花展、書道展、写真展、生花展、絵画展、工芸展などを内容とする記念文化祭を開催した。なお文化祭は昭和四六年度にその第一回を開催している。またこの二〇周年記念事業の一環として、十一月十一、二の両日、京都の史跡探訪の研修旅行を実施、参加二八名。

青少年談話室

昭和四七年度、市補助金五〇万円によって公民館の二階を一部改装、青少年談話室が八月に竣工した。広さ三七㎡（総工費一〇二万円、備品費四五万円、事務費三万円、計一五〇万円）のこぢんまりしたものだが、割合に活発に活動しているこの地域の青年会、さらには青年セミナーのよい拠点になると考えられる。

各種団体

前述の、青年セミナーや、婦人学級、家庭教育学級はそれぞれ青年会、婦人会に支えられているものであり、これらの活動からも見られるように、戸板校下の青年会、婦人会は他地区に比較してかな

り活発に活動している。特に婦人会はこの年度に機関誌「戸板婦人」を三号(38号、39号、40・41合併号)を発行している点が注目される。その他少年連盟の活動も比較的活発なように見うけられた。

3 此花町公民館

この地区は金沢駅前地区という特性から、駅前地区の再開発とからんで、店舗のみを残して居住地を郊外に移すなどの現象もみられ、公民館活動は次第に停滞し、謡曲、民謡等趣味の会などが中心になりつつあるようである。特にかつては活発に行われていた青年学級も昭和三八年より金沢市第二普通青年学級に統合されてからは、この地区での青年の学習活動は停滞しはじめた。しかし、それ以降も青年教室として地道にはあるが活動が行われ、昭和三八年七月以降四三年一月までに二十一号に及ぶ会報を出している。だが、この地道な活動も四三年度以降はほとんど見られなくなっている。したがってこの地区での公民館活動の重点の一つとして、青少年の非行化防止とそれから(特に駅前地区であることもあって)青少年の健全育成をとりあげ、昭和四一年度は市から「青少年非行化防止モデル地区」、昭和四六年度は市及び県から「健民運動実践地区」の指定をうけて、努力している。

「昭和四七年度此花町公民館実施事項」によれば、次のような事業を実施している。

年間定例

部長会 十二回(部会は必要に応じ)

定例教室

バレーボール教室(毎週火)

婦人謡曲教室(毎週火)

民謡教室 (毎週木)

囲碁教室 (毎月2・4土)

金沢民謡会 (毎週水) (貸館)

書道教室 (毎週金) (貸館)

謡曲同門会 (隔月) (貸館)

定例行事

子どもを守る日巡回補導(毎月一〇日・二〇日)

このはな步こう会(毎月第一日)(冬を除く)

駅前を美しくする会に協力(毎月十五日)(〃)

その他

家庭教育学級(十回)

親子ハイキング(春秋二回)

囲碁将棋連珠大会(全市的催し)

児童幼児のための正しい自転車乗り方講習

体力テスト

婦人のための水泳教室(二回)

早朝ラジオ体操会(七月二六日―八月十三日)

町会対抗バレーボール大会

社会体育大会

園芸講座

時局講演会

書道展

公民館関係者一泊研修会

成人式

新年子ども大会

立志の日のつどい

ボーリング教室等。

なお、これらの行事のうちには、健民運動「青少年健全育成事業」実践地区としての行事が多くふくまれている。

また、館報「公民このはな」は昭和四八年二月三八号を発行している。(なお、昭和三十一年六月発行の七号までは確認しえたが、第一号の発行年月は確認しえなかった。)

七 戸板校下双葉町会のこと

今次の調査対象のうち、新たに造成された団地の典型としてえらんだ双葉団地はどんな地域なのか。そのことについては、幸にこの団地在住の勝田芳夫氏の手になる「手づくりの町づくり」(新生活運動協議会の主催する、第二回あすの地域社会をきずく住民活動賞を受賞し、「コミニティ形成への道」に登載された報告書)がある。で、それに基づいて、この町の町づくりのプロセスを紹介しよう。

(同氏の執筆されたのは昭和四六年)

最初の入居は昭和三五年三月、同年秋九世帯になり、町会づくりの話を交している矢先、近くに製箔工場の基礎工事の行われているのを知り、翌三六年一月十日「南新保町上丁町会」を結成して、工場移転の住民運動開始。遂に二〇〇万円の借入金で代替地を求め、日曜日には土盛りや整地作業の協力もして、移転を円満に解決。町会先第一歩は抵抗運動から始まった。三十七年夏、アンケートにより「双葉町」と改称。四六年現在一九〇世帯七〇一人。

この団地は、引揚者や疎開などの経験のある人が各自に永住の地を求めて集ったものであり、公営や企業造成団地と異り、苦情や不便の訴え先もなく、結局、住民自身の知恵と努力の結果によって切り開く他なかったのが町づくりの原動力となった。このエネルギーで次のような事を実現して今日に至っている。

① 町会長の公選

② 毎月一回町公報発行(三十九年一月より)

③ 子どもの家

四〇年二月、町集会所、鍵っ子の家、青少年の家、幼児の遊び場、保育所などの機能をもった建物の建設が計画され、八月八日竣工。経費は勿論、市より払下げ(有償)を受けた田上小学校見分校の解体から、運搬、用地埋立等、全て住民自身の手で行った。なお、このことに従事した、町在住のそれぞれの専門職は次の通り。建設業九、運送業六、配管業四、板金塗装六、建具業三、電気工事三、鉄工業八。

なおこの他、町内の木橋、道路、神社、保育所などもこれらの人々を中心とする住民の手づくりで出来ている。

③

保育所の開設 入居者に共稼ぎサラリーマンが多く保育所開設が熱望され、子どもの家の竣工もあって、四〇年十一月一日園児十八名、保母二名で「双葉町子どもの家保育園」を開設。しかし無認可の為一切の補助なく、保育料のみにたよらざるをえない為、園長の私費によるやりくりという事態さえあったが、このような苦しい経験が認可を得ようとの努力となり、四四年三月厚生大臣認可、同四月一日に石川県知事保育所開設認可を得た。現在、職員六名、園児七六名。年間運営費約八〇〇万円。

④

地域連帯のために

(ア) 婦人部三七年発足。次の事業を行う。

・各種物資の共同購入あっせん

・盆おどり、お祭り事への協力

・各種公民館行事への参加

・簡易保険をはじめとする委託事業の遂行

(イ) 青年部三七年発足。子どもの家建設の原動力となったが、最近停滞気味。

(ウ) あすなる会 子ども会OB。高校生グループにより四二年発足。子ども会のリーダーグループとして活躍している。

⑤ 子ども会 極めて活発。四二年優良子ども会として金沢市より表彰をうけ、ついで同年三月、全日本中部地区優良子ども会として中部日本新聞より表彰。さらに四三年一月財団法人大日本奉仕会より全日本優良子ども会として表彰された。

この子ども会は、子どもが家建設の時、大人といっしょに働いた事が大きなエネルギーになっている。主な活動は次の通り。
 ① 廃品回収(小・中学校へ寄付) ② 防火・防犯・夜回り
 ③ ラジオ体操、ハイキング、キャンプ、海水浴、盆おどり、お祭り、美化運動参加。④ 校下公民館主催の球技大会、七夕、左儀長参加。⑤ そろばん教室、剣道教室、エレクトーン教室開設
 以上が、双葉団地の今日までのプロセスであるが、勝田氏はさらに「明日への課題」を結ぶに当って

子どもの家保育園の建設費については、各世帯から月三七〇円、三十六ヶ月の負担をし、農協借入金二二〇万円を返済したが、保育園開設の際の保育室増築費七〇万円の借入金が未返済で保育園に引き継がれている。また道路舗装、用水護岸工事の地元負担金二四〇万円のうち町会として分担すべき経費も今後町借入金として残るものと思われる。

建設第一期を一応終えようとしている現在、考え方の相異からくる静かな対立のあることも事実だ。さらに、住民の自主活動による町づくりには、おのずから限界がある。道路や橋は公共物であり、行政施策によって管理されるべきで、今後の町づくりはこうした観

点から考えていくべきである。と指摘している。

参 考 資 料

① 金沢市における社会教育の沿革と展望(第二〇回全国公民館大会提出資料)

② 金沢市鞍月公民館沿革調査書

③ 金沢市戸板公民館沿革調査書

④ 金沢市此花町公民館沿革調査書

⑤ ②③④は①作成の際金沢市教育委員会が各公民館より提出させたもの。同委員会所蔵)

⑥ 昭和四六年度、社会教育の現状(石川県教育委員会発行、昭和四七年六月一日付) 昭和四七年版社会教育要覧(金沢市教育委員会発行)

⑦ 鞍月公民館所蔵諸資料

⑧ 戸板公民館所蔵諸資料

⑨ 此花町公民館所蔵諸資料

⑩ 昭和四七年度金沢市町会長名簿(金沢市町会連合会発行)

⑪ 『コミュニティ形成の道』新生活運動協議会

一 生活の実態について

1 調査対象の構成
 一とくは余暇利用の実態とその意識を中心に

今次の調査で得られた回答数は総数六三〇名。内訳は、此花地区

第四章 生活の実態と学習活動

一七一名、戸板地区二四八名、鞍月地区二二一名で、さらに、(1)男女別、(2)学歴別、(3)世帯主との続柄別、(4)職業別、(5)子どもの数別の詳細は次表の通りである。

第 1 表

	男女別 (実数)			年 令 別 (実数)											合 計
	男	女	無 答	20	25	30	35	40	45	50	55	60	無 答		
				7	1	1	1	1	1	1	1	1		1	
此 花	45.0 (77)	55.0 (94)	0	13.5 (23)	12.3 (21)	9.9 (17)	12.3 (21)	9.9 (17)	5.8 (10)	4.7 (8)	7.6 (13)	19.3 (33)	4.7 (8)	100 (171)	
戸 板	53.2 (132)	46.8 (116)	0	15.5 (38)	18.1 (45)	17.7 (44)	12.5 (31)	7.7 (19)	6.9 (17)	6.0 (15)	4.0 (10)	11.3 (28)	0.4 (1)	100 (248)	
靴 月	48.8 (103)	51.2 (108)	0	10.9 (20)	11.4 (24)	16.6 (35)	18.0 (38)	11.8 (25)	8.1 (17)	6.6 (14)	6.6 (14)	8.5 (17)	1.4 (3)	100 (211)	
計	49.5 (312)	50.5 (318)	0	13.3 (84)	14.3 (90)	15.2 (96)	14.3 (90)	9.7 (61)	7.0 (44)	5.9 (37)	5.9 (37)	12.5 (79)	1.9 (12)	100 (630)	

第 2 表

地 区	学 歴 (%)										計 { % (実数)
	小 卒	新中卒	旧中卒	新高卒	旧 高 卒	短大卒	大学卒	無 答	計		
此 花	26.3	17.0	14.6	21.1	5.8	2.3	4.7	8.2	100 (171)		
戸 板	24.2	21.4	10.1	30.2	1.6	2.8	6.9	2.8	100 (248)		
靴 月	26.5	21.8	8.5	26.5	5.2	4.7	2.4	4.3	100 (211)		
計 { % (実数)	25.6 (161)	20.3 (128)	10.8 (68)	26.5 (167)	4.0 (25)	3.3 (21)	4.8 (30)	4.8 (30)	100 (630)		

第 3 表

分 類	世 帯 主 と の 続 柄 (%)											計 { % (実数)
	本 人	妻	夫	父	母	姉妹	兄弟	息子	娘	無 答	計	
此 花	33.3	27.5	0.6	2.3	6.4	0.6	0.6	18.1	1.8	8.8	100 (171)	
戸 板	41.5	35.5	0.0	2.0	3.2	0.0	0.0	13.3	3.2	1.2	100 (248)	
靴 月	37.0	36.0	0.5	2.8	2.4	0.0	0.5	13.3	3.3	4.3	100 (211)	
計 { % (実数)	37.8 (238)	33.5 (211)	0.3 (2)	2.4 (15)	3.8 (24)	0.2 (1)	0.3 (2)	14.6 (92)	2.9 (18)	4.3 (27)	100 (630)	

第4表(1)

		家の職業(%)						計	(% (実数))
		勤め人	商店 サービス	工場経営	農家	その他	無答		
此 戸 鞍 計	花	57.3	22.8	5.3	0	8.2	6.4	$\frac{100}{171}$	
	板	62.1	5.2	10.9	12.1	7.7	2.0	$\frac{100}{248}$	
	月	70.6	11.4	5.7	0	7.1	5.2	$\frac{100}{211}$	
	{ %	63.7	12.1	7.6	4.8	7.6	4.3	100	
	{ 実数	401	76	48	30	48	27	630	

第4表(2)

		現在従事している仕事(%)							無答
		自営農 林漁業	自営商工 サービス業	きまった 職に毎日 勤務	パートタ イムで動 務	内職	家事のみ	何もして いない	
此 戸 鞍 計	花	0.6	22.8	31.6	3.5	4.7	18.1	8.2	10.5
	板	6.0	12.5	44.4	5.2	7.3	16.9	2.4	5.2
	月	0.5	11.4	47.9	9.5	7.1	13.7	3.3	6.6
	{ %	2.7	14.9	42.1	6.2	6.5	16.2	4.3	7.1
	{ 実数	17	94	268	39	41	102	27	45

第4表(3)

		左のうち〔きまった職に毎日従事している人〕の職業内容(%)							無答 (*)	計 (% 実数)
		自由業	管理職	事務職	単 労 務	純 職	専 技	門 職		
此 戸 鞍 計	花	4.7	5.3	9.9	7.6	14.0	3.5	55.0	$\frac{100}{171}$	
	板	7.7	5.2	10.1	7.7	19.8	4.0	45.6	$\frac{100}{248}$	
	月	9.0	8.1	11.4	10.0	16.6	4.3	40.8	$\frac{100}{211}$	
	{ %	7.3	6.2	10.5	8.4	17.1	4.0	46.5	100	
	{ 実数	46	39	66	53	108	25	293	630	

(備考) この表の%は全回答者を母数とするもの。
したがって〔無答〕の内容は、第4表(2)の〔きまった職に毎日勤務〕と
〔自営業〕のうちの若干を除いた他の回答者。

第5表(1)

		子どもの数(%)							
		0人	1人	2人	3人	4人	5人以上	未婚	無答
此戸鞍計	花	5.8	15.2	26.9	18.1	8.2	5.8	12.9	7.0
	板	6.0	22.2	37.1	16.5	3.2	4.4	9.3	1.2
	月	8.1	20.4	44.5	10.9	1.9	1.4	7.1	5.7
	{ % (実数)	6.7 (42)	19.7 (124)	36.8 (232)	15.1 (95)	4.1 (26)	3.8 (24)	9.5 (60)	4.3 (27)

第5表(2)

		最年少の子どもの年齢(子どものある人について)										
		1才未満	1~3才	4~6才	小学生	中学生	高校生	大学生	就職	その他	無答	計 { % (実数)
此戸鞍計	花	6.4	9.4	10.5	10.5	4.1	5.8	1.8	19.9	4.1	27.5	$\frac{100}{171}$
	板	12.9	18.1	6.9	12.1	5.2	4.0	0.8	16.1	4.4	19.4	$\frac{100}{248}$
	月	5.2	13.7	10.9	19.9	5.2	2.8	1.4	15.2	0.9	24.6	$\frac{100}{211}$
	{ % (実数)	8.6 (54)	14.3 (90)	9.2 (58)	14.3 (90)	4.9 (31)	4.1 (26)	1.3 (8)	16.8 (106)	3.2 (20)	23.3 (147)	100 (630)

備考 全回答者を母数とした率

したがって〔無答〕の中には〔子どもの数の調査〕の0人、未婚、無答を含む。

2 意識

余暇時間利用の実態とその

平日の自由時間、休日が、どのよう
に利用されているであろうか。こ
のこの実態をさぐると同時に、一
方では、各自その意識としてはど
うに過すのがよいと考えている
か。そしてこの両者の関係はどう
なっているか。さらにさまざまグル
ープに入って活動している人とい
いな人ではどんな差があるか。そ
ういった間のことをさぐってみた。

まず、第一問「あなたは平日の自
由時間をどのようにして過されるこ
とが多いでしょうか、次の中から比
較的多くするものの番号に○をお
つけ下さい。(いくつでもかまいま
せん) (問1)」。第二問「休日の場
合はどうですか (問2)」と尋ね
て、さらに第一問、第二問それぞれ
について「○をつけた中から最も多
くする順に三つあげて下さい」と順
序(一位、二位、三位)をつけさせ
た。その結果、平日、休日のそれぞ
れにつき、第一位に上げたものを
集計した表が次の第6表・第7表で
ある。

第6表 余暇利用の実態（平日のばあい）

意 義 実 態	地区別(%)			男女別(%)			年 令 別 (%)											
	此 花	戸 板	靴 計 月 %	男 計	女 計	%	20	25	30	35	40	45	50	55	60	無	計	
							1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 休 息	17.0	10.1	10.0	11.9	6.9	11.9	9.5	10.0	5.2	14.4	11.5	13.6	13.5	16.2	17.7	16.7	11.9	
2. 読書(専門的・教養的)	2.3	2.4	1.9	2.2	1.3	2.2	3.6	1.1	4.2	1.1	3.3	0	0	0	3.8	0	2.2	
3. 読書(娯楽的)	0.6	0.8	1.9	1.1	0.9	1.1	3.6	0	0	0	3.3	2.3	0	0	1.3	0	1.1	
4. 新聞を見る	5.3	7.7	8.1	7.1	2.8	7.1	3.6	2.2	6.2	6.7	18.0	9.1	13.5	2.7	7.6	8.3	7.1	
5. テレビを見る	29.2	28.2	32.2	29.8	24.8	29.8	26.2	26.7	36.5	34.4	21.3	38.6	24.3	29.7	31.6	8.3	29.8	
6. 趣味のことをする	2.9	5.2	8.1	5.6	7.2	5.6	4.8	7.8	3.1	7.8	4.9	2.3	2.7	10.8	6.3	0	5.6	
7. 技能・資格の勉強	0	2.4	0.5	1.1	1.6	1.1	2.4	1.1	1.0	2.2	0	2.3	0	0	0	0	1.1	
8. 教養的な勉強	0	0.4	0	0.2	0.3	0.2	0	0	0	0	0	0	2.7	0	0	0	0.2	
9. 散歩・ドライブ	0	1.6	0.5	0.8	1.6	0.8	4.8	0	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0.8	
10. 喫茶店・バー	0.6	0.8	0	0.5	0.3	0.5	2.4	0	0	0	0	2.3	0	0	0	0	0.5	
11. 家族との雑談子どもの相手	8.2	10.1	8.1	8.9	11.6	8.9	6.0	18.6	14.6	10.0	8.2	2.3	2.7	0	3.8	8.3	8.9	
12. 家 事	22.2	18.5	19.4	19.8	37.1	19.8	11.9	22.2	17.7	16.7	27.9	20.5	29.7	32.4	12.7	33.3	19.8	
13. 友人との交際	1.2	2.0	0.5	1.3	0.9	1.3	8.3	1.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1.3	
14. 勝負ごと(碁・マージャン等)	0.6	1.2	1.9	1.3	2.6	1.3	1.2	2.2	2.1	1.1	0	0	0	0	2.5	0	1.3	
15. 賭けごと(パチンコ・競馬等)	1.2	0.8	0	0.6	1.3	0.6	1.2	0	1.0	0	0	2.3	2.7	0	0	0	0.6	
16. スポーツを見る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
17. スポーツをする	1.2	0	0.9	0.6	1.3	0.6	3.6	1.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0.6	
18. グループ活動・地域活動	1.8	0.4	0	0.6	1.3	0.6	2.4	1.1	0	1.1	0	0	0	0	0	0	0.6	
19. 日曜大工・工作	0.6	0	0	0.2	0.3	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0	1.3	0	0.2	
20. 映画などの見物	0	0	0.9	0.3	0.3	0.3	1.2	0	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0.3	
21. 個人的つきあい(観せき・友人)	0.6	0.8	0.9	0.8	0.3	0.8	1.2	1.1	1.0	0	1.6	2.3	0	0	0	0	0.8	
22. 社会的つきあい(PTA・婦人会)	0.6	0.4	0	0.3	0.6	0.3	0	0	0	1.1	0	0	0	2.7	0	0	0.3	
23. 釣 ・ 登山	1.2	0.4	0.5	0.6	1.3	0.6	0	0	1.0	0	0	0	0	0	1.3	16.7	0.6	
24. 買い物に出かける	0	1.6	0.5	0.8	0	0.8	1.2	0	1.0	1.1	0	0	0	2.7	1.3	0	0.8	
25. 日帰り旅行	0	0	0.5	0.2	0.3	0.2	0	0	0	0	0	0	2.7	0	0	0	0.2	
26. 一泊以上の旅行	0	0.4	0	0.2	0.3	0.2	1.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.2	
27. そ の 他	0	1.2	0	0.5	1.0	0.5	0	2.2	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	
無 答	2.9	2.4	2.8	2.7	3.5	2.7	0	1.1	2.1	2.2	0	2.3	5.4	2.7	8.9	8.3	2.7	
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
〔1.休息〕から〔26.一泊以上の旅行〕のうち地区別、男女別、年齢別のそれぞれで1位～5位にあげられたもの	1 位	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	12	5	12	12	5	12	5
	2 位	12	12	12	12	1	5	12	12	12	12	5	12	5	5	1	1	12
	3 位	1	1	1	1	4	11	1	1	11	11	1	4	1	1	12	23	1
	4 位	11	11	11	11	11	6	11	13	1	4	11	1	4	4	6	4	11
	5 位	4	4	4	4	6	1	4	11	6	1	6	11			6		4

第7表 余暇利用の実態（休日のばあい）

実 態	地区別(%)				男女別(%)			年 令 別 (%)											
	此	戸	数	計	男	女	計	20	25	30	35	40	45	50	55	60	無	計	
	花	板	月					い	い	い	い	い	い	い	い	以上	答	%	
1. 休 息	21.6	12.9	21.3	18.1	23.4	12.9	18.1	21.4	18.9	10.4	17.8	27.9	18.2	13.5	16.2	20.3	8.3	18.1	
2. 読書(専門的、教養的)	1.8	1.2	0.5	1.1	1.6	0.6	1.1	0	1.0	0	0	4.9	4.5	0	0	1.3	0	1.1	
3. 読書(娯楽的)	1.8	0.8	0.9	1.1	1.3	0.9	1.1	3.6	0	0	0	1.6	0	0	2.7	2.5	0	1.1	
4. 新聞をみる	4.1	2.8	3.3	3.3	5.4	1.3	3.3	2.4	1.1	4.2	2.2	0	0	2.7	5.4	10.1	8.3	3.3	
5. テレビを見る	15.2	21.0	17.5	18.3	20.8	15.7	18.3	17.9	16.7	19.8	20.0	18.0	13.6	18.9	18.9	19.0	16.7	18.3	
6. 趣味のこをする	1.2	6.0	4.7	4.3	5.1	3.5	4.3	1.2	5.6	4.2	5.6	0	4.5	8.1	5.4	6.3	0	4.3	
7. 技能・資格の勉強	0.6	0.4	0	0.3	0.3	0.3	0.3	0	0	1.0	0	0	2.3	0	0	0	0	0.3	
8. 教養的な勉強	0	0.4	0	0.2	0.3	0	0.2	0	0	0	0	0	0	2.7	0	0	0	0.2	
9. 散歩・ドライブ	2.9	5.2	5.7	4.8	7.1	2.5	4.8	11.9	5.6	7.3	3.3	3.3	2.3	5.4	0	0	0	4.8	
10. 喫茶店・バー	0	0.4	0	0.2	0.3	0	0.2	1.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.2	
11. 家族との雑談、子どもの相手	11.7	8.9	8.1	9.4	6.4	12.3	9.4	2.4	17.8	18.7	17.8	1.6	4.5	2.7	0	1.3	16.7	9.4	
12. 家 事	15.8	17.7	15.2	16.3	2.9	29.6	16.3	6.0	16.7	12.5	17.8	21.3	27.3	27.0	29.7	10.1	8.3	18.3	
13. 友人との交際	0.6	2.8	2.4	2.1	2.6	1.6	2.1	10.7	2.2	1.0	0	1.6	0	0	0	0	0	2.1	
14. 勝負ごと(番・マージャン等)	0.6	1.0	0.9	1.1	2.2	0	1.1	2.4	1.1	1.0	1.1	1.6	0	0	0	1.3	0	1.1	
15. 賭けごと(パチンコ・競馬等)	2.3	0.8	0.5	1.1	2.2	0	1.1	1.2	1.1	2.1	0	0	2.3	2.7	0	1.3	0	1.1	
16. スポーツを見る	0	0	0.5	0.2	0.3	0	0.2	0	0	0	0	0	2.3	0	0	0	0	0.2	
17. スポーツをする	1.8	0.8	0.5	1.0	1.3	0.6	1.0	3.6	1.1	2.1	0	0	0	0	0	0	0	1.0	
18. グループ活動、地域活動	1.2	0	0	0.3	0.6	0	0.3	1.2	1.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1.3	
19. 日曜大工、工作	1.2	0.4	0	0.5	1.0	0	0.5	0	0	0	1.1	0	0	2.7	0	1.3	0	0.5	
20. 映画などの見物	0	0	0.9	0.3	0	0.6	0.3	1.2	0	0	0	0	0	2.7	0	0	0	0.3	
21. 個人的つきあい(親せき・友人)	1.8	3.6	3.8	3.2	3.5	2.8	3.2	3.6	3.3	2.1	0	4.9	2.3	2.7	5.4	6.3	0	3.2	
22. 社会的つきあい(PTA・婦人会)	0.6	0.4	0	0.3	0.3	0.3	0.3	0	0	0	1.1	0	0	0	2.7	0	0	0.3	
23. 釣 ・ 登山	2.3	1.2	0.5	1.3	2.6	0	1.3	0	0	1.0	2.2	0	4.5	0	0	1.3	16.7	1.3	
24. 買ひもの出かける	2.3	3.2	4.7	3.5	1.0	6.0	3.5	6.0	2.2	4.2	3.3	11.5	0	0	2.7	0	0	3.5	
25. 日帰り旅行	0	0.4	0	0.2	0	0.3	0.2	0	0	0	1.1	0	0	0	0	0	0	0.2	
26. 一泊以上の旅行	0	0.8	0.5	0.5	0.3	0.6	0.5	1.2	0	0	0	0	0	0	0	2.5	0	0.5	
27. そ の 他	0	1.6	0.5	0.8	1.3	0.3	0.8	0	1.1	3.1	0	0	0	2.7	0	0	0	0.8	
無 答	8.8	4.4	7.1	6.5	5.8	7.2	6.5	1.2	3.3	5.2	5.6	1.6	11.4	5.4	10.8	15.2	25.0	6.5	
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
1 位	1	5	1	5	1	12	5	1	1	5	5	1	12	12	12	1	5	5	
2 位	12	12	5	1	5	5	1	5	11	11	1	12	1	5	5	5	11	1	
3 位	5	1	12	12	9	1	12	9	12	12	11	5	5	1	1	4	23	12	
4 位	11	11	11	11	11	11	11	13	5	4	12	24		6		12		11	
5 位	4	6	9	9	4	24	9	12	24	6	9	9	6			6		9	
6 位	9	9	6	24	6	6	6									21		6	

第6表・第7表で見ると、地区・性別・年令をとわず、平日も休日も、「テレビを見る」「家事」(ただし女子のみ)「休息」が圧倒的に多い。ただ平日の25と34代、休日の30と34代と、平日の女子に「休息」が三位以内に入らず(特に女子は平日で男子の一七・〇%に対して六・九%、休日で男子の二三・四%に対して十二・九%と極端に少い)代りに「家族との雑談子ども相手」が入っているのは、ちょうど子どもに一番手のかかる年代であることがそうさせているのである。ただ平日の40と44代で「休息」の代りに「新聞を見る」が三位に入っているのは新聞をみながら休息というのと見てよい。

その他この表にみられる特長的な点を列挙すれば

地域別では、平日の場合「此花では「休息」「家事」に集中して(両者で計約四〇%)「趣味のことをする」というような答が他に比して少い。鞍月ではその逆に、「趣味」が八・一%あり「新聞を見る」というのも他地区に比して最も多い。一方、休日の場合は、戸板は「休息」の項が他の地区の半分で、それに代るものとして「テレビをみる」「趣味のことをする」が他地区に比して多くなっている。「グループ活動、地域活動」については、此花が平日一・八%休日一・二%とこの種の項目としては割合多くなっているのに比して、鞍月では平日休日ともに0というのが対照的である。男女の間の関係では、当然のことかもしれないが「家事」が女子で圧倒的に多く(平日で三七・一%、二位のテレビが二四・八%、休日で二九・六%、二位のテレビが一五・七%)男子では平日で二・二%、休日で二・九%あるにすぎない。休息についても前述の通り女子は男子に比して少い。家事負担が女子の休息時間を奪っているであろう。その他の点では、「新聞を見る」というのが女子には極端に少い。家事などで暇のないこともあろうが、女性の社会的関心の低さの一端を示しているのではなからうか。「趣味」については、平日では女子が男子の倍、休日はその逆で男子が女子のほぼ倍になっている。趣味のことは、女子は御主人出勤中の平日に、男子は休日になっ

て勝る。平日では「散歩ドライブ」「スポーツを見る」「スポーツをする」も0で娯楽的なものへの関わりは男子に比してかなり薄い。また「グループ活動地域活動」「教養的な勉強」も平日休日とも女子は0で、この点にも女子の家庭内閉鎖的な一面が現われているように思われる。

年令別では、前述の「休息」のことも他、20と24代では平日休日とも「友人との交際」が多いのは、まだ家庭内に住みついてしまわない年令として当然といえよう。それに比してこの項では、平日では30代以上、休日でも45才以上で皆無となつてくるのは面白い。趣味に関しては、休日の場合50と54代が最高で、平日の場合55と59代が最高というのは、年令の深まりともいってしっくりした趣味に生活のうらおいを見つけ、定年退職後(55と59代)平日にもこれをつづけていることが何えて面白い。一方この項には25と39代にも平日休日を問わずかなり印がついているにもかかわらず、40と44代で休日に0となつてくるのは社会的に最も忙しい世代だからであろうか。専門的教養的読書については休日の40才代にかなり多いのは、職場において責任をもたなくてはならない年令層であるからとみられる。しかしその他の技能資格の勉強・教養的勉強については、どの年令層にも(したがって性別・地域をとわず)ほとんどないのは、一般的傾向とはいへ残念である。特に20代では専門的教養的読書をもふくめて学習することの少いのはさみしい。そしてその代りに20と24代には散歩ドライブというのが約十二%とかなり高いものになっている。その他特長としては40と44代に日曜に買いものに出かけるというのが十一・五% (四位) となっているのは、地区別の表からみて、戸板・鞍月地区の主婦が都心部へと出かけるものと思われる。ついで第三問で「あなたは、仕事(家事・内職もふくめて)以外の自由な時間をどのような目的で過すのが一番よいと思いませんか。次の中から一つだけ選んで○をつけて下さい」と、余暇利用についての意識を問うてみた。その結果は第8表である。

この表でみると、地区・性別・年令のいづれにおいても「休息」

第 8 表 余暇利用についての意識

1 2 3 4 5 6 7	休 遊 別 途 収 入 社 会 奉 仕 教 育 知 的 創 造 無 趣 答	地区別(%)				男女別(%)			年 令 別 (%)											
		此 花	戸 板	鞍 月	計	男	女	計	20	25	30	35	40	45	50	55	60	以上	無 答	計
		(171)	(248)	(211)	(630)	(312)	(318)	(630)	(84)	(90)	(96)	(90)	(61)	(44)	(37)	(79)	(12)	(630)		
1	36.8	29.4	37.4	34.1	34.3	34.0	34.1	31.0	24.4	30.2	24.2	23.4	36.4	35.1	40.5	43.0	8.3	34.1		
2	7.0	12.5	5.2	8.6	10.6	6.6	8.6	13.1	11.1	14.6	5.6	6.6	2.3	5.4	5.4	5.1	8.3	8.6		
3	2.9	3.2	3.3	3.2	4.2	2.2	3.2	1.2	3.3	1.0	3.3	0	6.8	5.4	8.1	5.1	0	3.2		
4	5.3	4.0	3.8	4.3	3.8	4.7	4.3	2.4	4.4	0	4.4	9.8	4.5	5.4	5.4	6.3	0	4.3		
5	9.9	9.3	5.2	8.1	6.7	9.4	8.1	9.5	7.8	6.2	8.9	4.9	13.6	13.5	2.7	6.3	16.7	8.1		
6	2.9	1.2	3.3	2.4	2.9	1.9	2.4	10.7	1.1	0	1.1	3.3	0	0.2	2.7	0	8.3	2.4		
7	25.7	33.5	29.9	30.2	28.2	32.1	30.3	28.6	43.3	36.5	28.9	32.8	27.3	18.9	21.6	20.3	25.0	30.2		
無 趣 答	9.4	6.9	11.8	9.2	9.3	9.1	9.2	3.6	4.4	11.5	5.6	8.2	9.1	16.2	13.5	13.9	33.3	9.2		
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
	%	(171)	(248)	(211)	(630)	(312)	(318)	(630)	(84)	(90)	(96)	(90)	(61)	(44)	(37)	(79)	(12)	(630)		

「趣味」がそれぞれ圧倒的に多く(両者で六〇%以上)地区(戸板、鞍月)で25~34年令で一位になっている他は全「休息」が一位になっている。実態で高率を示した「テレビを見る」という項目をつくらなかつたので、このことを広い意味での趣味と解して答えている傾向がうかがい見れば、ほぼ実態と一致するが、実態と比較して「教養」が八・一%(第一・二問の回答2・7・8がこれに相当するものと見れば休日では約五倍、平日では約二・三倍)、「社会奉仕」四・三%(第一・二問の18・22と見れば休日で七・二倍、平日で四・八倍)とかなり高いのは、それらへの希望はあるが、実際は家事や子どもの相手に忙殺されたり、疲労のために休息に時をすごしたり、ついついテレビを見たりということになっているのであるうか。それともこの回答はあるいは立て前以上のものではないのか、おそらくその両方の複合というのが実状に近いのではなからうか。

地域別では、戸板に「遊び」と「趣味」が多くその分「休息」が減っている。また鞍月では他の二地区に比して教養が約半分になっている。

男女別では、男性には「遊び」が多く、女性には「教養」と「趣味」が多くなっている。

年令別では、35~39に四二・二%と60以上について「休息」への要求が一番強いのはこの年令層が、職場での中堅層として最も激務を要求される年令層だからなのかもしれない。これと呼応して「遊び」への要求が20~24代十三・一%、25~29代十一・一%、30~34代一四・六%といずれも十%をこえているのに、35~39代で急に五・六%と半分以下に落ち、それ以上の年令でははその線を保っているのは、「遊び」への要求が「休息」の要求に変わっていく年令を示しているかのようで面白い。その他で目的つくことは40~44代で「社会奉仕」が他に比して倍近くの九・八%、そして「別途収入」が0

第9表 余暇利用の意識と実態の相関

意識 実態	(1) 平日のばあい										(2) 休日のばあい									
	1 休 息	2 遊 び	3 別 途 取 入	4 社 会 奉 仕	5 教 養	6 知 的 創 造	7 趣 味	無 答	計	1 休 息	2 遊 び	3 別 途 取 入	4 社 会 奉 仕	5 教 養	6 知 的 創 造	7 趣 味	無 答	計		
1. 休 息	19.1	14.8	10.0	3.7	3.9	20.0	7.4	6.9	11.9	24.2	13.0	15.0	7.4	11.8	40.0	16.8	10.3	18.1		
2. 読書(専門的、教養的)	1.4	0	0	7.4	3.9	6.7	1.6	5.2	2.2	0.9	0	0	3.7	3.9	0	1.1	0	1.1		
3. 読書(娯乐的)	2.3	0	0	0	0	6.7	0.5	0	1.1	1.4	0	0	0	2.0	13.3	0.5	0	1.1		
4. 新聞を見る	7.9	1.9	5.0	11.1	17.6	6.7	5.8	5.2	7.1	2.8	0	10.0	11.1	5.9	0	1.6	6.9	3.3		
5. テレビを見る	31.2	44.4	25.0	7.4	23.5	13.3	32.1	25.9	29.8	21.4	22.2	15.0	11.1	21.6	6.7	16.8	12.1	18.3		
6. 趣味のことをする	0.9	3.7	10.0	7.4	7.8	0	10.5	5.2	5.6	1.4	1.9	10.0	3.7	2.0	0	9.5	1.7	4.3		
7. 技能・資格の勉強をする	1.4	0	5.0	0	2.0	0	1.1	0	1.1	0.5	0	5.0	0	0	0	0	0	0.3		
8. 教養的な勉強	0	0	0	0	2.0	0	0	0	0.2	0	0	0	0	2.0	0	0	0	0.2		
9. 散歩・ドライブ	0.5	1.9	5.0	0	0	0	1.1	0	0.8	4.2	11.1	0	0	5.9	0	5.3	3.4	4.8		
10. 喫茶店・バー	0.5	0	0	0	0	0	0.5	1.7	0.5	0	0	0	0	0	0	0	1.7	0.2		
11. 家族との雑談・子どもの相手	7.0	9.3	0	3.7	11.8	6.7	12.6	6.9	8.9	7.9	13.0	5.0	0	11.8	26.7	11.1	5.2	9.4		
12. 家 事	20.9	9.3	35.0	44.4	17.6	13.3	17.4	20.7	19.8	17.2	11.1	15.0	33.3	11.8	0	17.4	15.5	16.3		
13. 友人との交際	0.9	1.9	0	0	0	6.7	2.1	0	1.3	1.4	5.6	5.0	0	2.0	6.7	2.1	0	2.1		
14. 勝負ごと(碁・マージャン等)	0.5	3.7	0	3.7	0	0	1.6	1.7	1.3	0.5	5.6	0	3.7	0	0	1.1	0	1.1		
15. 賭けごと(パチンコ・競馬等)	0.5	5.6	0	0	0	0	0	0	0.6	0	5.6	5.0	0	0	0	1.1	1.7	1.1		
16. スポーツを見る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	0	0.2		
17. スポーツをする	0.5	0	0	0	0	6.7	1.1	0	0.6	0.5	1.9	0	0	0	0	2.1	0	1.0		
18. グループ活動・地域活動	0	0	0	7.4	0	13.3	0	0	0.6	0	0	0	7.4	0	0	0	0	0.3		
19. 日曜大工・工作	0	0	0	0	0	0	0.5	0	0.2	0.5	0	0	0	0	0	0.5	1.7	0.5		
20. 映画などの見物	0	0	0	0	2.0	0	0	1.7	0.3	0.5	0	0	0	0	0	0	1.7	0.3		
21. 個人的つきあい(親せき、友人)	1.4	0	0	0	2.0	0	0	1.7	0.8	2.8	3.7	10.0	0	5.9	6.7	3.2	0	3.2		
22. 社会的つきあい(PTA、婦人会)	0.5	0	0	0	0	0	0.5	0	0.3	0.5	0	0	3.7	0	0	0	0	0.3		
23. 釣 登山	0.9	0	0	0	2.0	0	0.5	0	0.6	1.4	0	0	0	2.0	0	2.1	0	1.3		
24. 買い物に出かける	0.9	1.9	0	0	0	0	1.1	0	0.8	4.7	1.9	0	3.7	2.0	0	3.7	3.4	3.5		
25. 日帰り旅行	0	0	0	0	0	0	0	1.7	0.2	0	1.9	0	0	0	0	0	0	0.2		
26. 一泊以上の旅行	0	0	0	0	0	0	0.5	0	0.2	0.5	0	0	0	0	0	0.5	1.7	0.5		
27. そ の 他	0	1.9	0	3.7	0	0	0.5	0	0.5	0	0	0	3.7	0	0	1.6	1.7	0.8		
無 答	1.4	0	5.0	0	3.9	0	1.1	15.5	2.7	5.1	1.9	5.0	7.4	9.8	0	1.6	31.0	6.5		
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
(実数)	(215)	(54)	(20)	(27)	(51)	(15)	(190)	(58)	(630)	(215)	(54)	(20)	(27)	(51)	(15)	(190)	(58)	(630)		
1 位	5	5	12	12	5	1	5	5	5	1	5	1	12	5	1	12		1		
2 位	12	1	5	4	4	5	12	12	12	5	1	5	4	4	1	11	1	5		
3 位	1	11	1	2	12	12	11	1	12	11	12	5	11	3	5			12		
4 位	4	12	6	5	11	18	6	11		9	4	1	12		11		11			
5 位	11			6				4		12	6	18			6					
6 位				18								21								

であるのに、次の年代45と49代からそれが逆転して「別途収入」が高まり、「社会奉仕」が若い層と同じ率にもどっている。何がそうさせているのか軽々には判断出来ないが、40と44代というこの年令層が、町会活動、PTA、婦人会、少年連盟、安全協会、防犯委員会等の担手になっているとこの現状もわかれかもしれない。またこの40と44代では「教養」が四・九%に落ちこみ54代が十三%台にはね上っているのもこれと関係があるのかもしれない。

余暇利用についての意識・つまり「余暇はこのように過すのがよい」という考えと、そのような考え方をする人の余暇利用の実際とがどうなっているかを第9表である。

「休息で過すのが一番よい」と答えた人は二・五名で、やはり他に比して「休息」「テレビを見る」が一番多く、両者あわせて平日で四〇%休日で四五・六%にもなっている。

「遊びで過すのがよい」と答えた人は五四名で、「読書、勉強、グループ活動、社会的つきあい」が平日休日ともに、「家事」についても平日で九・三%休日で一・一%とそれぞれ平均の平日一九・八%休日で十六・三%というのを下まわっている。これに対して当然のことながら、「テレビをみる」が平日で四四・四%、休日で二二・二%といずれも最高、「勝負ごと賭けごと」の合計が平日で九・三%休日で一・二%とそれぞれ平均の一・九%、二・二%を大きく上まわっている。休日の散歩ドライブも平均の四・八%を一一・一%と上まわっている。

「教養」と答えた人は五一名で、こう答えた人は「休息」が少く「専門的読書」が少々多いくらいでほとんど特長を見つけないことができない。これは、「教養」ということはが漠然としていて、各人各様の受止め方がなされた結果かもしれない。あるいは、この「教養」という回答は単なる立て前の表現だったのかもしれない。

「趣味で過すのがよい」と答えた人は一九〇名と「休息」について多いが、これは前述したように、「テレビを見て過すのがよい」という項目を入れなかったため、テレビを見るということまでふくめた広い意味のものとうけとられたからでもあろう。そのせいか、この回答をした人にはあまり特長的な傾向はみられない。「趣味のことをする」が平日休日とも平均の倍以上になっているのは当然として、その他では、「休息」が平均よりやや下まわっているくらいしか目につかない。

さらに「社会奉仕をするのがよい」と答えた人は総数二七名で、母数が少ないので百分比で比較することはできないが、傾向としては「休息」「テレビを見る」が少く、「娯楽的読書、散歩ドライブ、個人的つきあい」が平日休日とも。これに対し「新聞を見る」「専門的読書」「グループ活動地域活動」をする人が多くなっている。ただ、この回答をした人は「家事」の項が平日四四・四%休日三三・三%といずれも平均の倍になっている。「グループ活動社会活動」への志向も「家事」から解放されたいという願望の表現かもしれない。

「知的創造で過すのがよい」と答えた人も総数一五名と少ないので、これだけの人の傾向で決定的なことはいえないが、傾向としては「読書」「グループ活動地域活動」をする人が事実ある事を指摘しておくに止める。

この余暇利用の意識は、さまざまなグループに入っている人といない人とでどんな差があるか。その間の消息を教えてくださいの第10表である。

社会的活動をするグループに入っている人（七〇名）いない人（四八〇名）——当然のことながら「社会奉仕に余暇をすごすのがよい」とするのは、このグループに入っている人に一七・一%と極

第 10 表 グループ所属と余暇利用意識の相関

グループ所属 余暇利用の意識	グループの種類									どのようなグループにも入っていない人の入らない理由														
	3 [社会的活動を するもの] に 入っている。 いない。			4 [スポーツの 団体、グループ] に入っている。 いない。			5 [学習のグル ープ団体] に入 っている。 いない。			す き で な い か ら	近 く に 適 当 な もの が な い	さ そ わ れ な い か ら	忙 し く て	あ ま り 考 え た こ と が な い	そ の 他	計 実 数 %	無 答 非 該 当 者 (実数)	計 実 数 %	無 答 非 該 当 者 (実数)					
	い る	い な い	無 答	い る	い な い	無 答	い る	い な い	無 答															
1. 休 息	30.0	34.6	35.0	20.0	35.8	31.3	24.1	35.3	30.6	36.4	42.8	12.5	42.6	32.4	11.8	37.2	127	88	34.1	215				
2. 遊 び	2.9	9.6	7.5	15.6	8.1	7.5	6.9	8.9	7.1	13.6	13.2	12.5	7.8	13.2	5.9	10.9	37	17	8.6	54				
3. 別途収入	1.4	3.0	5.0	0	3.2	5.0	0	3.1	4.7	1.5	1.9	12.5	4.3	4.4	0	3.5	12	8	3.2	20				
4. 社会奉仕	17.1	2.5	3.8	4.4	4.0	6.3	10.3	3.7	5.9	0	1.9	12.5	2.3	0	17.6	2.3	8	19	4.3	27				
5. 教 養	7.1	9.0	3.8	2.2	9.2	5.0	13.8	7.9	7.1	4.5	11.3	12.5	8.5	5.9	23.5	8.5	29	22	8.1	51				
6. 知的創造	4.3	2.5	0	4.4	2.6	0	3.4	2.5	1.2	1.5	3.8	0	0.8	1.5	0	1.5	5	10	2.4	15				
7. 趣 味	35.7	31.3	18.8	53.3	30.1	17.5	41.4	31.6	17.6	30.3	22.6	37.5	22.5	30.9	35.3	26.7	91	99	30.2	190				
無 答	1.4	7.5	26.3	0	7.1	27.5	0	7.0	25.9	12.1	1.9	0	10.9	11.8	5.9	9.4	32	26	9.2	58				
計 (実数)	% 100			100			100			100			100			100			100			100		
	70	480	80	45	505	80	29	516	85	66	53	8	129	88	17	341	341	289	630	630				

めて高く、入っていない人の二・五割の七倍近くになっている。そして「遊びにすぎず」というのが二・九割で入っていない人の九・六割の三分の一以下となっている。

スポーツ団体・グループに入っている人(四五名)いない人(五〇五名)——入っている人はいない人に比して、「遊び」が約二倍、「趣味」が約一・八倍、「知的創造」が一・七倍になっている半面、「休息」が約半分、「教養」が四分の一、「別途収入」は〇となっている。陽性なスポーツ愛好者の面目が現われていて面白い。

学習のグループ・団体に入っている人(二九名)いない人(五一六名)——入っている人はいない人に比して、「教養」が一・七五倍、「社会奉仕」が約三倍、「趣味」が一・三倍になっている反面「休息」が七割、「遊び」が約八割、「別途収入」は〇となっているこれに対して、どのようなグループにも入っていない人(三四一名)は、傾向としては、「休息」「遊び」が高く、「社会奉仕」「知的創造」「趣味」が低くなっている。これは逆にこのような傾向の人はグループには入らないということの現われであろう。なおこれらの人たちのグループに入らない理由をみると、「忙しくて」というのが二九名(三七・八%)で一番多く、ついで「あまり考えたことがない」六八名、「すきでない」六六名、「近くに適當なものがない」五三名がそれぞれ二〇%近くになっている。この最後の「近くに適當なものがない」と答えた五三名は学習の可能性を秘めたものと評価してよい。

さらに、過去一年間に余暇を利用して行った、教養や趣味を深めたり、職業に必要な知識技能を高めたりするための活動の実態については、問13・問14・問15で調べてみたが、その結果を、「余暇はどのように過すのがよいか」を問うた問3との関係で集計したのが、次の第11表である。

第 11 表 学習活動の経験の有無と余暇利用意識の相関

	A ある	B 学習活動を行ったことがない (その理由)										総計		
		学習活動を行ったことがない	やる気がない	したいものがない	したいものはあったがどこでしているかわからない	していることはしているが自分にあわない	会場が遠い	経済的に又は時間的に余裕がなかった	子どもに手がかかる	別に理由はない	その他	無答	ない合計	
													%	実数
1 休息	27.9	53.6	46.4	83.3	42.9	40.2	27.9	25.0	0	45.2	40.1	129	34.1	215
2 遊び	6.8	17.9	10.7	0	0	10.3	4.7	27.8	0	4.1	10.2	33	8.6	54
3 別途収入	1.9	3.6	0	0	0	4.1	9.3	2.8	0	5.5	4.3	14	3.2	20
4 社会奉仕	5.8	0	0	0	14.3	4.1	2.3	2.8	50.0	0	2.8	9	4.3	27
5 教育的創造	9.7	0	7.1	0	0	9.3	7.0	8.3	25.0	4.1	6.5	21	8.1	51
6 知的創造	2.3	0	0	0	14.3	4.1	2.3	0	0	2.7	2.5	8	2.4	15
7 趣味無	36.7	14.3	32.1	16.7	28.6	23.7	34.9	27.8	25.0	16.4	23.9	77	30.2	190
無答	8.8	10.7	3.6	0	0	4.1	11.6	5.6	0	21.9	9.6	31	9.2	58
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	322	100	630
実数	308	28	28	6	7	97	43	36	4	73		322		
%	/	8.7	8.7	1.9	2.2	30.1	13.4	11.2	1.2	22.7	100	322	/	/

この表によると、活動した事のある人は三〇八名、ない人は三二二名とほぼ相半ばしていて、この学習への参加率の高さはかなり高く評価してよい。参加者の実態は後に譲って、した事のない人のなぜしなかったのかとの理由をしらべてみると、「経済的・時間的に余裕がなかった」九七名三〇・一％と圧倒的に多く、ついで「子どもに手がかかる」十三・四％、となりやはり生活に余裕のないことが最大の理由のようにみうけられる。しかしそれと同時に、「したいものがない・やる気がしない」八・七％、「別に理由はない」十一・二％、「無回答」二・七％とこの種の回答が合計四二・六％にもなっていて無関心さの深さを示している。これに反して、「したいものがあったがどこでしているかわからない」八・七％、「していることはしているが自分にあわない」一・九％、「会場が遠い」二・二％、というのが合計一三・八％、実数にして四一名あることは、社会教育関係施設や実施する活動の内容如何によっては学習に参加させうる層として注目すべきであろう。

ついで、この種の活動をした人、しなかった人それぞれの余暇の過ごし方についての意識との相関をみると、参加したことのある人はない人に対して、「社会奉仕、教養、趣味で過した方がよい」とする傾向が、その分「休息」「遊び」の回答が減っている。

では、約半数が参加した経験をもつ学習の実態、さらには、人々に秘められている学習要求はどのような傾向を示しているか、次節にそれをみよう。

第二章・第三章及び第四章の一 出雲路暢良

(金沢大学助教授・倫理学)

二 学習活動の実態について

あなたは、去年一年のあいだに、余暇時間を利用して、教養・趣味・職業などのために何かしたり、現在もしていることがありますがか」という設問で、学習活動の実態をたずねた結果が〔3-1表〕である。ここでは、現在継続中もしくは過去一年間のあいだに行なわれたものであること、勤務時間内に行なわれた企業の研修など以外の余暇の時間を利用して行なわれたものであること、教養・趣味・職業などのためのものであること、といった条件での学習活動を意味しているわけである。表に見られるように、全体としては半数弱の人が学習活動の経験者ようである。この数字は、これまで行なわれた同種の調査と比較して、かなり高いものといつてよさそうである。

各公民館別では、鞍月、戸板、此花の順になっているが、前二者にくらべて、此花の場合がやや低いようである。

(表 3-1)

地区	学習活動				
	あり	なし	不明	計	
此戸鞍平	花板	46.2	40.3	13.5	100.0
	月均	49.6	40.3	10.1	100.0
	均	50.2	38.0	11.8	100.0
	均	48.9	39.5	11.6	100.0

では、学習された内容としてはどのようなものであったかを見たのが〔3-2表〕である。「趣味に関するもの」であったとする人がもっとも多く、「自分の職業に直接役立つような内容のもの」がそれに次いでいることが3地区、いずれの場合にも共通の傾向となっている。「教養を高めるのに役立つもの」を学習したという人は全体で約一割と、もっとも低率であるが、此花地区では鞍月地区にくらべ

て、かなり高率になっているのが目立っている。

(表 3-2)

地区	学習内容	職業	趣味	生活	教養	その他	無記入
		此戸鞍平	花板	15.2	56.6	13.9	13.9
	月均	20.3	46.3	14.6	9.8	3.3	5.7
	均	22.6	45.3	12.3	6.6	2.8	10.4
	均	19.8	45.8	13.6	9.7	2.6	8.4

学習した内容を性別にみると、男性・女性いずれも趣味に関するものももっとも多くなっている。しかしその他の領域ではいずれも、男性と女性とはかなり異なった傾向がみられる。男性の場合は職業に役立つような内容のものが多いが、生活をよりよいものにするのに役立つもの、教養を高めるのに役立つものの学習は、男性よりも、女性の方が多く学習しているものようである。

年令別に学習した内容を見てみると、25〜44才までの層では、いずれの年代でも、趣味に関するものが第一位、職業に関するものが第二位になっている(20代前半も無答者を除けば同じ傾向である)これが50才以上になると、職業に関するものが第三位になつて、生活をよりよいものにするのに役立つものが第二位に代わっている。40代までは働きざかりで、50代になってやや生活に落ち着きを見出すようになる、ということなのであろうか。

学習を行なった方法としては、個人教授をあげる人が全体としてはもっとも多い。戸板及び鞍月ではいずれも三分の一程度の人がかれをあげているが、此花地区では約一割であり、大きなちがいを示している。職場の研修会やセミナーで行なったという人が、これについているが、この場合は、鞍月地区が他の他の二地区にくらべて

性別	職業	趣味	生活	教養	その他	無記入	計
男	28.8	45.4	8.0	7.4	3.1	7.4	100.0
女	9.7	46.2	20.0	12.4	2.1	9.7	100.0

年齢	職業	趣味	生活	教養	その他	無記入	計
20~24	25.5	47.3	9.1	5.5	1.8	10.9	100.0
25~29	19.6	54.3	10.9	4.3	4.3	6.5	100.0
30~34	17.4	43.5	15.2	17.4	0	6.5	100.0
35~39	22.0	42.0	14.0	14.0	2.0	6.0	100.0
40~44	20.0	60.0	12.0	8.0	0	0	100.0
45~49	40.0	40.0	6.7	6.7	6.7	6.7	100.0
50~54	17.6	23.5	23.5	17.6	5.9	11.8	100.0
55~59	6.3	50.0	12.5	6.3	6.3	18.7	100.0
60以上	11.4	40.0	22.9	8.6	2.9	14.3	100.0
不明	0	66.7	0	0	0	33.3	100.0

いくらか少なくなっている。そのほかでは、ラジオ・テレビで、通信教育で、及び、大学・学校の公開講座で、の比率がいくらか多くなっている。各地区別での目立った傾向としては、前記のほかに、此花地区では通信教育、戸板地区ではラジオ・テレビ、鞍月ではPTAや公民館の学級・講座が、それぞれ、他に比べていくらか多いことがあげられる。

学習した方法としては、男女とも、個人教授の形をあげた人もっとも多いが、男性の場合の方がより高い比率のもののようにある。男性では職場の研修会やセミナーで行なったという比率が、それについて第二位であるが、女性ではラジオ・テレビでというものが二位、大学・学校の公開講座が第三位であるが、この両者とも男性の比率はかなり少なくなっている。その他の方法の中で、PTAや公民館の学級・講座をあげた人の比率も男性の方に高いことが注

目される。

地区	学習方法										無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
此花 戸板 鞍月 平	13.9	3.8	11.4	11.4	5.1	16.5	3.8	11.4	0	8.9	13.9	100.0
	4.9	2.4	35.0	16.3	4.9	17.1	1.6	8.1	0	8.1	1.6	100.0
	7.5	1.9	34.0	11.3	6.6	9.4	8.5	3.8	0.9	6.6	9.4	100.0
	8.1	2.6	28.6	13.3	5.5	14.3	4.5	7.5	0.3	7.8	7.5	100.0

- 1) 通信教育で
- 2) 本やテキストを使い独力で
- 3) 個人教授で
- 4) ラジオ、テレビで
- 5) 自分たちのグループ、サークルで
- 6) 会社の研修会やセミナーで
- 7) P.T.Aや公民館の学級、講座で
- 8) 大学や学校の開放講座で
- 9) 民間企業や各種学校の教室、講座で
- 10) その他

どの年代でも個人教授でという比率がもっとも高いことには変わりがないが、なかでも、20代後半と40代後半ではとくにその比率が高くなっている。その他の方法を比較的多く利用した年代としては

方法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	無記入	計
男	8.6	1.8	32.5	8.6	4.3	20.9	8.0	3.1	0.6	6.7	4.9	100.0
女	7.6	3.4	24.1	18.6	6.9	6.9	0.7	12.4	0	9.0	10.3	100.0

このほかなものがあげられる。

通信教育……………40代後半、60才以上

本やテキスト……………40代前半

ラジオ・テレビ……………20代前半、40代

グループ・サークル……………50代

職場の研修会……………20代前半、30代後半

PTAや公民館……………40代前半

大学・学校の公開講座……………30代後半、40代前半、60才以上

各種学校……………50代前半

方法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	無記入	計
20～24	10.9	1.8	25.5	21.8	1.8	20.9	5.5	0	0	9.1	3.6	100.0
25～29	4.3	2.2	43.5	10.9	4.3	13.0	2.2	4.3	0	6.5	8.7	100.0
30～34	8.7	4.3	21.7	13.0	2.2	17.4	2.2	6.5	0	15.2	8.7	100.0
35～39	6.0	2.0	32.0	6.0	2.0	20.0	6.0	16.0	0	6.0	4.0	100.0
40～44	4.0	8.0	20.0	0.20	0	4.0	12.0	12.0	0	0	4.0	100.0
45～49	13.3	0.20	0.20	0	6.7	0	6.7	6.7	0	6.7	6.7	100.0
50～54	5.9	0.11	8.11	8.17	6	5.9	0	5.9	5.9	5.9	11.8	100.0
55～59	6.3	0.12	5.12	5.18	7	12.5	0	0	0	6.3	12.5	100.0
60以上	14.3	2.9	8.6	8.6	8.6	8.6	2.0	14.3	0	5.7	11.4	100.0
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0

学習時間帯	平日		土曜		日曜		不定	無記入	計			
	午前	午後	午前	午後	午前	午後						
此	29.1	12.7	10.1	21.5	0	3.8	2.5	3.8	3.8	2.5	10.1	100.0
戸	27.6	7.3	17.1	16.3	0	4.1	7.3	10.6	6.5	0	3.3	100.0
鞍	26.4	3.8	14.2	22.6	0.9	5.7	1.9	12.3	2.8	1.9	7.5	100.0
平	27.6	7.5	14.3	19.8	0.3	4.5	4.2	9.4	4.5	1.3	6.5	100.0

性別	平日		土曜		日曜		きつない	無記入	計			
	午前	午後	午前	午後	午前	午後						
男	30.1	3.7	7.4	19.0	0.6	4.3	3.7	16.0	7.4	2.5	5.5	100.0
女	24.8	11.7	22.1	20.7	0	4.8	4.8	2.1	1.4	0	7.6	100.0

学習を行なった時間帯としては、平日の午前がもっとも多く、以下土曜の午前、平日の夜と続くのが全体的な傾向である。土曜の午後と夜、日曜の午前と夜というのはたいへん低率であり、おとなの学習活動には向きの時間帯といえそうである。

各地区別では、此花地区は平日の午後が多く、日曜の午後が少ないこと、戸板地区は土曜の午前が少なく、日曜の午前と夜が多いこと、鞍月地区では平日の午後が少ないことが、それぞれ、いづらか他の地区とは異なっているものようである。

男女いずれにも比較的多く行なわれた時間帯は平日の午前と、土曜の午前である。その他の時間帯では、平日の午後、平日の夜は女性の場合にはかなり多く利用されており、日曜の午後、日曜の夜は男性が多く利用している。

年令の面からみると、平日の午前を利用したという人の率が最高

時間帯	平日		土曜		日曜		き		無記入	計		
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	ない	ま				
20~24	18.2	1.8	20.0	30.9	0	5.5	5.5	10.9	3.6	0	3.6	100.0
25~29	43.5	4.3	13.0	19.6	0	4.3	0	2.2	6.5	0	6.5	100.0
30~34	23.9	10.9	15.2	28.3	0	2.2	4.3	4.3	4.3	0	6.5	100.0
35~39	22.0	10.0	14.0	10.0	0	8.0	12.0	10.0	4.0	2.0	8.0	100.0
40~44	32.0	4.0	16.0	16.0	4.0	4.0	4.0	8.0	4.0	4.0	4.0	100.0
45~49	26.7	0	26.7	20.0	0	0	6.7	6.7	6.7	0	6.7	100.0
50~54	23.5	0	11.8	29.4	0	5.9	0	23.5	5.9	0	0	100.0
55~59	18.7	18.7	6.3	6.3	0	12.5	0	12.5	12.5	6.3	6.3	100.0
60以上	37.1	17.1	5.7	8.6	0	0	0	17.1	0	2.9	11.4	100.0
不明	33.3	0	0	33.3	0	0	0	0	0	0	33.3	100.0

四〜五千円以上となるとたいへん低率になるが、一万円以上かかったという人も含めて、四〜五千円以上かかったという人を合わせる」と一割程度になる。各地区ともほぼ同じような傾向であり、あまり差はみられない。

男女とも、月に二〜三千円ぐらいの経費をかけたという人がもつ

であるのは二〇才代後半、四〇才代前半・後半及び六〇才以上の人たちであるが、この時間帯は比較的どの年代層でも高い率を占めている。平日の午後は五才以上の高年令層の場合と三〇才代が比較的高率であるが平日の夜と土曜の午前及び日曜の午後は逆に高年令層には出にくい時間帯である。

学習に要した経費としては、一月平均二〜三千円という人がもつとも多く、五百円、千円ぐらいの人もかなり多い。

地区	経費								無記入	計
	0	500円	1,000円	2~3千円	4~5千円	5~6千円	1万円	1万円以上		
此花	13.9	16.5	16.5	21.5	11.4	5.1	0	1.3	13.9	100.0
戸板	14.6	19.5	17.9	25.2	10.6	2.4	0.8	4.9	4.1	100.0
月均	15.1	12.3	17.9	27.4	7.5	3.8	0.9	2.8	12.3	100.0
平均	14.6	16.2	17.5	25.0	9.7	3.6	0.6	3.2	9.4	100.0

性別	経費								無記入	計
	0	500円	1,000円	2~3千円	4~5千円	7~8千円	1万円	1万円以上		
男	14.7	14.7	17.2	26.4	11.0	2.5	1.2	5.5	6.7	100.0
女	14.5	17.9	17.9	23.4	8.3	4.8	0	0.7	12.4	100.0

とも多くなっている。それ以下の額の場合はやや女性の比率が高く、それ以上の経費をかけたのは男性の方がやや多い、といえそうである。

年令との関係では経費がまったくかからなかったか、かかっても五百円位だったという人が四〇代の後半から五〇代前半にかけての年代に多いこと、逆に、二〜三千円もしくは四〜五千円かけてなにかをやった人が二〇代から三〇代の前半ぐらいの人に多いという傾向がみられる。そうである。

それらの内容と学習した方法との関係を見ると、教養を高めるのに役立つ内容の学習はPTAや公民館でやったという人が最高の比

経費	1万円以上										計
	0	500円	1,000円	2,000円	3,000円	4,000円	5,000円	7,000円	1万円	無記入	
20~24	16.4	10.9	20.0	20.0	12.7	7.3	3.6	1.8	7.3	100.0	
25~29	8.7	15.2	15.2	39.1	13.0	0	0	0	8.7	100.0	
30~34	19.6	8.7	19.6	30.4	4.3	2.2	0	6.5	8.7	100.0	
35~39	16.0	16.0	18.0	26.0	10.0	6.0	0	0	8.0	100.0	
40~44	12.0	24.0	12.0	24.0	4.0	4.0	0	12.0	8.0	100.0	
45~49	20.0	46.7	20.0	13.3	0	0	0	0	0	100.0	
50~54	23.5	23.5	17.6	17.6	11.8	0	0	0	5.9	100.0	
55~59	6.3	18.7	6.3	31.3	0	12.5	0	0	25.0	100.0	
60以上	11.4	14.3	20.0	11.4	20.0	0	0	8.6	14.3	100.0	
不明	0	0	33.3	33.3	3.3	0	0	0	33.3	100.0	

率であるが、他の内容の場合はいずれも本やテキストを使い独学・独習であったという人がいちばん多い。職業に役立つ内容のものは、他の内容にくらべて、個人教授や自分たちのグループ及びPTAや公民館であった比率が低く、逆に職場の研修会など及び独学・独習の比率が高くなっている。趣味に関するものには独学・

方法	無記入										計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
職業	4.9	0.44	3.9	1.6	8.2	14.8	0	0.13	13.3	100.0		
趣味	9.2	4.3	25.5	17.0	7.1	19.1	2.8	4.3	0	6.4	4.3	100.0
生活	7.1	0.23	8.1	1.9	7.1	11.1	9	0.14	4.3	0.16	7.7	100.0
教養	6.7	6.7	26.7	13.3	3.3	13.3	0.30	0	0	0	100.0	
その他	25.0	0.50	0	0	12.5	12.5	0	0	0	0	100.0	

・独習の比率がもっとも高いが、自分たちのグループでの比率も高くなっている。逆に、各種学校での比率も低い。生活をよりよいものにする内容のものは、独学・独習の率がもっとも高いが、各種学校、PTAや公民館、自分たちのグループ、個人教授などでもかなり行なわれている。

内容のそれを学習した時間との関係を見ると、教養的なものは平日の夜が最高の比率であるほかは、いずれも平日の午前にもっとも多く行なわれている。しかし趣味的なものは土曜の午前も平日の午前とはほぼ同じくらいの比率となっているが、平日の夜は少ないのが特長的である。そのほかでは平日の午後及び日曜の午前は教養以外は低率であること、日曜の午後は職業と趣味が、生活と教養にくらべるとやや高率であることが目立っている。

時間	平日		土曜		日曜		無記入	計			
	前	後	前	後	前	後					
職業	31.1	4.9	13.1	19.7	0.3	1.6	11.5	6.3	4.9	100.0	
趣味	27.0	7.8	9.9	25.5	0.7	4.3	2.8	13.5	4.3	100.0	
生活	38.1	7.1	19.0	14.3	0.2	4.7	1.2	4.7	1.2	4.7	100.0
教養	23.3	13.3	3.2	7.1	0.3	3.3	3.3	3.3	0	3.3	100.0
その他	37.5	12.5	37.5	12.5	0	0	0	0	0	100.0	

内容と経費との関係をみよう。経費がまったくかからなかったというのは趣味の学習の場合には、他に比べて、かなり低率であり、逆に二〜三千円くらいかかったという人がかなり多い。四〜五千円以上かかったという人が、職業の場合約二三％、趣味一八％、生活一四％に比べて、教養の場合七％とかなり低いのが目立つ。社会教育関係施設の利用について

学習内容	総費								計	
	0	500	1,000	2~34	4~57	7~8	1万	1万		
	円	円	円	千円	千円	千円	円	円	以上	
職業	24.6	14.8	16.4	18.0	9.8	4.9	1.6	6.6	3.3	100.0
趣味	7.1	17.0	15.6	36.2	10.6	3.5	0	3.5	6.4	100.0
生活	31.0	16.7	16.7	14.3	14.3	0	0	0	7.1	100.0
教養	16.7	20.0	30.0	23.3	6.7	0	0	0	3.3	100.0
その他	25.0	37.5	12.5	0	0	12.5	0	12.5	0	100.0

住民が学習活動を行なう場合に利用する施設のうち、校下の公民館、市立中央公民館、社会教育センター及び生活科学センターの四施設に上り、それぞれをどの程度利用しているかなどを見ること以下のごとくである。

まず、校下公民館であるが、全体としては三分の一をややこえるくらいの方が利用したことがあると答えている。各地区別では此花地区がもっとも利用率が高く、以下、戸板、鞍月の順であり、此花と鞍月のあいだにはかなりの差があるといえそうである。此花地区の場合には、どこにあるかも知らないという人が他の二地区にくらべて非常に少ないことから見ても、地区住民のあいだへの浸透度がかなり高いことがうかがえる。

地区	校下公民館利用した人が知っている		利用したどこにあるか知らない		無記入	計
	利用した	知らない	利用した	知らない		
此花	44.4	30.1	1.2	19.3		100.0
戸板	36.7	42.7	9.7	10.9		100.0
鞍月	32.2	45.5	8.5	13.7		100.0
平均	37.3	41.6	7.0	14.1		100.0

市立中央公民館の場合は、利用したことがあるという人は約一割

で、これではあまり地区による差はみられない。しかし、利用したことはないが、どこにあるかは知っているという人は約四割あり地区公民館の場合とはほぼ同じ比率であることを見ると、知名度はかなり高いといえそうである。

県立社会教育センターの場合は、市立中央公民館とよく似たような傾向を示している。市民にとっては、金沢市の中央部にあるこの二つの施設はほぼ同じようなものとして理解されていることを示しているのだらう。

地区	中央公民館利用した人が知っている		利用したどこにあるか知らない		無記入	計
	利用した	知らない	利用した	知らない		
此花	11.7	38.0	18.1	32.2		100.0
戸板	11.3	44.4	28.6	15.7		100.0
鞍月	21.4	39.3	27.0	22.3		100.0
平均	11.4	41.0	25.2	21.4		100.0

地区	社会センター利用した人が知っている		利用したどこにあるか知らない		無記入	計
	利用した	知らない	利用した	知らない		
此花	14.0	38.6	15.2	32.2		100.0
戸板	12.9	43.5	29.0	14.5		100.0
鞍月	14.2	41.7	22.3	21.8		100.0
平均	13.7	41.6	23.0	21.7		10.00

最後に、生活科学センターであるが、利用したことがあるという人は約五割で、この中ではもっとも低い率であり、三地区の中ではもっとも距離の遠い鞍月地区がもっとも低率とわっている。利用したこともなく、どこにあるかも知らない人、無答の人の比率は四施設

設の中でもっとも高く、これらの中ではいちばん知名度は低そうである。

地区	生活科学センター		利用したいが知っている	どこに知らない	無記入	計
	此	均				
花	5.3	20.5	33.9	40.4	100.0	
板	5.2	30.6	45.6	18.5	100.0	
月	3.3	30.8	37.4	28.4	100.0	
鞍	4.6	27.9	39.7	27.8	100.0	
平						

団体活動の実態について

団体・グループとしては多くの種類があるわけだが、ここでは、とくに社会教育と関係の深い、社会的な活動をするもの、スポーツのグループ・団体、及び学習のグループ・団体の三種類のみについて、いくつかの側面の実態をながめてみよう。

加入率	社会的活動のグループ	スポーツグループ	学習グループ	その他
花	14.0	5.8	5.8	5.8
板	11.7	8.5	4.8	4.8
月	8.1	6.6	3.3	3.3
鞍	11.1	7.1	4.6	4.6
平				

まず加入の状況であるが、社会的な活動をするものへの加入率ももっとも高く、以下、スポーツのグループ、学習のグループの順になっているが、もっとも高い社会的な活動をするグループの場合でもだいたい一〇%の割合であり、これらの団体への加入率は必ずしも高くはないようである。地区別では、鞍月地区が、他の二地区にくらべて、総体的にやや低いといえそうである。

このように、団体活動に入っている人はたいへん少ないわけだが、入っていない

理由としては、忙しいことをあげる人がもっとも多く、これはどの地区にも共通の傾向である。これについては、そういうことが好きでないとか、あまりそのようなことは考えたことがないという理由が多くなっている。これらはいずれも、団体活動というものへの適応性を有していない人ということができようが、そのような人がかなり多いといえそうである。

地区	入らない理由							無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7		
此	14.6	4.1	1.2	22.2	9.4	1.8	4.1	42.7	100.0
板	8.9	8.1	1.2	18.1	11.3	4.8	3.6	44.0	100.0
月	9.0	12.3	1.4	21.8	11.4	0.9	3.3	39.8	100.0
鞍	10.5	8.4	1.3	20.5	10.8	2.7	3.7	42.2	100.0
平									

- (1) そういうことが好きでない
- (2) 近くに適当なものがない
- (3) さやわれぬいから
- (4) 忙しくて入れない
- (5) そのようなことは考えたことがない
- (6) その他
- (7) 入っている

前記の、社会的な団体、スポーツ団体、学習の団体以外の各種のグループ、団体も含めて、全くグループや集団に入っていない人の理由を男女別に見てみると、忙しくて入れないというのが男女とももっとも多いことは変りがないが、近くに適当なものがないことを理由としている人は男性にくらべて女性の方が多い。この場合ほどの明らかな差はないが、あまりそのようなことは考えたことがないのは女性、そういうことが好きでないのは男性の方がいくらか多

くなっている。

年令的には三〇才代の後半から三〇才代の人たちにはそういうことが好きでないという理由をあげている人が少なく、逆に、近くに適當なものがないという人が多くなっている。又、忙しくて入れないという人は三〇才後半から四〇才代の人に多く、逆に、この年代では、あまりそのようなことは考えたとことがないという人が少なくない。

年齢	入会理由							無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7		
20~24	14.3	6.0	2.4	11.9	16.7	1.2	3.6	44.0	100.0
25~29	7.8	15.6	2.2	20.0	14.4	7.8	5.6	26.7	100.0
30~34	7.3	12.5	1.0	20.8	13.5	3.1	3.1	38.5	100.0
35~39	4.4	8.9	1.1	26.7	6.7	1.1	4.4	46.7	100.0
40~44	13.1	4.9	0	36.1	3.3	3.3	1.6	37.7	100.0
45~49	11.4	4.5	2.3	25.0	9.1	2.3	2.3	43.2	100.0
50~54	10.8	2.7	2.7	18.9	18.9	0	2.7	43.2	100.0
55~59	18.9	5.4	0	16.2	16.2	0	5.4	37.8	100.0
60以上	13.9	6.3	0	10.1	2.5	2.5	3.8	60.8	100.0

数としては少ないが、これらの団体活動に入っている人について、どういう構成メンバーの団体であるか、それに入った動機はどのようなところにあるか、そして、その団体の中でどういう役割を果しているのか、をながめてみることにする。

まず、構成メンバーであるが、金沢に永く住んでいる人がメンバーの大部分である団体に入っている人がもっとも多くなっている。

地区別では、此花地区がもっとも高率であり、鞍月地区がもっとも低い。人口がほとんど固定している地区、流入人口がかなり多い地区の特性がうかがえる数字である。戸板地区の場合、金沢に永く住んでいる人と、よそから越してきた人が半分ぐらいずつの団体に入しているという人の比率が、他にくらべて、高いこともこの地区の特性とみることができよう。

地区	構成メンバー						無記入	計
	1	2	3	4	5	6		
此花	50.0	1.3	3.8	15.0	1.3	1.3	27.5	100.0
戸板	40.7	1.7	11.0	12.7	0.8	8.5	24.6	100.0
鞍月	33.0	0	5.5	12.1	3.3	6.6	29.6	100.0
平均	40.8	1.0	7.3	13.1	1.7	5.9	30.1	100.0

- (1) 金沢に永く住んでいる人が大部分
- (2) よそから越してきた人が大部分
- (3) 半分位ずつ
- (4) どちらかというと、永く住んでいる人が多い
- (5) どちらかというと、越してきた人が多い
- (6) わからない

加入した動機としては、人からさそわれてという率ももっとも高い。いずれの地区でも一〇人のうち三人ぐらいがこれを理由としてあげている。そのつきに多い(人にすすめられて)とあわせる。団体への参加、加入に個人的な人間関係が大きな力になっていることがうかがえる。

動機 地区	1	2	3	4	5	6	7	無記 入	計
	此花	31.3	15.0	0	2.5	2.5	3.8	17.5	27.5
戸板	32.2	16.1	0	1.7	1.7	1.7	17.8	28.8	100.0
鞍月	31.9	13.2	0	0	3.3	0	15.4	36.3	100.0
平均	31.8	14.9	0	1.4	2.4	1.7	17.0	30.8	100.0

- (1) 人からさそわれて
- (2) 人にすすめられて
- (3) ポスターなどで知って
- (4) 市の広報で知って
- (5) 会からのPRやパンフレットで知って
- (6) 会の活動の記事やテレビで見て
- (7) その他

それらの団体に入っている人が、それぞれの団体でどういう地位にあるのかをみると、どの地区でも、ふつうの会員であるという人がもっとも多いが、戸板地区はいくらか多く、鞍月地区はやや少ないようである。選ばれた役員・リーダーであるという、かなり積極的なメンバーである人が、此花地区では、他の二地区にくらべて、いくらか多くなっている。

役割 地区	ふつうの 会員	選ばれた 役員、リ ーダー	まわりも リーダー	無回答	計
	此花	45.0	26.3	7.5	21.3
戸板	54.2	15.3	6.8	23.7	100.0
鞍月	39.6	14.3	8.8	37.4	100.0
平均	47.1	18.0	7.6	27.3	100.0

III 学習要求の諸領域

学習要求の諸領域についてきく前に、いくらか包括的な形で、ふだんから関心を持っているもののうち、もっとも強いものをたずねたものが(◎)の表で全体としては、職業・職場・事業の問題、家族内の問題、自分個人の問題というのがベスト・スリーであり、他はいずれも、かなり低い率となっている。この傾向は三地区に共通のものであるが、此花地区の場合は、職業・職場・事業の問題がいくらか少なく、逆に、家族内の問題がやや多いのが、他の地区とは異なった傾向となっている。

一番目に関心の強いものとしては、やはり、家族内の問題、職業・職場・事業の問題が多くなっているが、自分個人の問題、社会問題、国内の経済問題の比率もかなり高くなっている。(○の表)

両者を通して考えると、自分個人の問題、家族内の問題、職業・職場・事業の問題の第一次関心領域、社会問題、国内の経済問題などが第二次関心領域ということができそうである。

関心 ◎ 地区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	無記 入	計
	此花	17.5	26.9	22.8	2.3	3.5	5.8	4.1	4.7	0.6	11.7
戸板	15.3	24.2	29.4	2.0	2.4	6.5	5.6	7.7	2.8	4.0	100.0
鞍月	18.0	21.3	28.4	3.8	6.2	3.3	4.3	7.6	0.5	6.6	100.0
平均	16.8	24.0	27.3	2.7	4.0	5.2	4.8	6.8	1.4	7.0	100.0

関心 ○ 地区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	無記 入	計
	此花	8.8	19.9	13.5	5.8	3.5	11.7	7.6	7.0	1.2	21.1
戸板	12.5	15.3	14.9	5.2	5.2	12.9	6.0	11.7	3.2	12.9	100.0
鞍月	11.4	19.0	18.5	4.3	3.8	9.5	6.2	9.5	1.9	16.1	100.0
平均	11.1	17.8	15.7	5.1	4.3	11.4	6.5	9.7	2.2	16.2	100.0

- (1) 自分個人の問題
- (2) 家族内の問題
- (3) 職業、職場、職業の問題
- (4) 隣近所の問題
- (5) 金沢や石川県の問題
- (6) 社会問題
- (7) 国内の政治問題
- (8) 国内の経済問題
- (9) 国際的な問題

学習要求の内容を大きく、一般教養的なもの、趣味的なもの、実用技術的なものという三つの領域に分けて、それぞれについて、いくつかの角度からながめてみることにする。

まず、一般教養的なものなかで、学習したい気持ちのもっとも強いものとして第一位にあげられたものは、政治・社会・時事問題といった社会的分野のもので、全体の約半の人がこれをあげている。これについて多いのは日本の歴史・世界の歴史、経済の知識などとなっている。

一般教養的なものに学習したい気持ちを持たない人は全体の約二割であるが、此花地区では約三割近くであり、他の二地区にくらべてやや高くなっている。各分野別では、第一、二位であった社会的分野及び歴史分野の比率が此花地区ではやや低いようであるが、その分野ではそれほど目立つ傾向はみられない。

内容	地区										計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
此花	1.212	3.205	8.8	5.3	8.2	2.32	3.6	4.4	1.28	7	100.0	
戸板	4.4	8.927	4.14	1	4.0	8.5	7.31	6.5	6.3	2.14	9	100.0
被月	0.5	10.029	9.15	2	2.4	9.0	4.70	9.4	3.5	2.18	0	100.0
平均	2.210	2.26	3.13	0	3.8	8.6	5.11	6.5	4.4	1.19	7	100.0

- (1) 法律 (民法、商法、憲法など) の知識
- (2) 経済 (物価、景気、株式など) の知識
- (3) 政治、社会の知識、時事問題
- (4) 日本の歴史、世界の歴史
- (5) 人生観の問題

内容	無記入										計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
小・高	2.5	8.1	24.8	14.3	8.7	6.2	2.5	1.2	3.1	1.2	32.3	100.0
新中	3.1	9.4	29.7	12.5	3.1	9.4	6.3	1.6	2.3	1.6	21.1	100.0
旧中・高女	0	10.3	22.1	14.7	8.8	5.9	5.9	1.5	4.4	5.9	20.6	100.0
新高	2.4	12.0	30.5	12.6	3.0	10.8	6.0	1.8	6.0	6.6	8.4	100.0
旧専高	0	16.0	28.0	8.0	4.0	12.0	8.0	4.0	8.0	8.0	4.0	100.0
短大	4.8	0	23.8	9.5	4.8	19.0	9.5	0	19.0	4.8	4.8	100.0
新・旧	3.3	20.0	26.7	10.0	0	6.7	3.3	0	6.7	13.3	10.0	100.0
不明	0	6.7	6.7	16.7	3.3	3.3	3.3	3.3	16.7	0	40.0	100.0

学習したいものとして第一位にあげた内容と学歴との関係を見ると、どの学歴の人でも政治・社会・時事問題をあげている人がもつとも多くなっているのが共通の傾向としてあらわれている。その他の内容としては、経済をあげた人の比率は大学卒、旧制の専門学校や高校卒の人に多く、教育学・心理学は短大卒、工学も短大卒の人の場合にやや

他の学歴の人よりも比率が高いようであるが、総じていえば、学歴による要求内容の差はそれほど目立つ傾向はないといえそうである。

職業との関係をみると、労務職以外の職業の人はいずれも社会的なもの（政治・社会・時事問題）をもっとも多く、歴史がもっとも多いという傾向になっている。しかし、その比率にはかなりの開きがあり、社会科学的なものを（第一位に）あげた人が管理職では四一％であるのに対して、自由業では二六％である。その他の内容では、経済は事務職、労務職、教育学・心理学は労務職、工学は事務職の人の場合にいくらか他の職業の人よりも希望が強いように見えることがやや目立っている。

内容	職業										無記人	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
自由業	2.2	10.9	26.1	15.2	0	8.7	6.5	0	2.2	2.2	26.1	100.0
管理職	0	8.8	41.0	17.9	5.1	0	0	7.7	12.8	2.6	100.0	100.0
事務職	1.5	12.1	28.8	16.7	0	9.1	3.0	3.0	15.2	3.0	7.6	100.0
労務職	0	15.1	15.1	120.8	1.9	15.1	0	0	3.8	1.9	26.4	100.0
専門	6.5	9.3	26.9	13.0	2.8	10.2	5.6	0	3.7	10.2	112.0	100.0
技術職	4.0	24.0	28.0	8.0	4.0	8.0	0	0	4.0	4.0	16.0	100.0
その他	1.4	8.2	25.6	10.2	5.8	7.2	7.2	2.7	4.4	1.7	25.6	100.0

学習したいものとして第一位にあげたものを、どのような理由からその気持を持ったのかをみると、現在の職業に必要なからという理由と、現代人の教養として必要だからという理由がいずれもやく二〇％の高率を占めている。此花地区で後者の理由がやや少ないほかは、いずれの地区においてもこの傾向は共通である。そのほかとしては、家庭生活の上で必要だから、自己向上のために役立つから

という理由も多いほうである。この場合は、敷月地区において、前者がやや多く、逆に後者が少ないのが他地区と異なった傾向としてあらわれている。

理由	地区									無記人	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
此花	19.9	1.2	16.4	11.1	1.8	1.8	12.3	4.7	2.3	28.7	100.0
戸板	21.8	3.2	22.2	11.7	2.0	1.6	14.5	5.6	3.6	13.7	100.0
敷月	20.9	4.3	22.7	15.2	1.9	1.4	10.0	6.2	0.5	17.1	100.0
平均	21.0	3.0	20.8	12.7	1.9	1.6	12.4	5.6	2.2	18.9	100.0

- (1) 現在の職業に必要なから
- (2) 転職や就職のために必要だから
- (3) 現代人の教養として必要だから
- (4) 家庭生活の上で必要だから
- (5) 多くの人と知り合う機会になるから
- (6) 余暇時間をむだに過ごしたくないから
- (7) 自己向上のために役立つから
- (8) 別に動機はない
- (9) その他

第一位にあげた内容とその理由との関係をみると、法律及び政治・社会・時事問題を第一位にあげた人の場合は、現在の職業にあってそれらを学習することが必要だからという理由をあげた人ももっとも多くなっている。経済、歴史、人生観、工学などは現代人の教養として必要だからを、また、教育学・心理学及び英会話・英語は自己向上のために役立つからという理由をもっとも多くの人があげている。その他の理由としては、政治・社会・時事問題や教育学・心理学、文学を、家庭生活の上で必要だから、また、余暇時間をむ

内 容	理 由										計
	無答	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
法 律	7.1	35.7	7.1	0	14.3	0	0	0	0	35.7	100.0
経 済	1.6	28.1	7.8	35.9	4.7	4.7	3.1	12.5	1.6	0	100.0
政治・社会・時事問題	2.4	38.1	3.6	18.7	21.7	1.2	0.6	8.4	4.2	0.6	100.0
歴 史(日本・世界)	1.2	8.5	2.4	45.1	14.6	2.4	2.4	14.6	6.1	2.4	100.0
人 生 観	4.2	4.2	8.3	37.5	8.3	0	8.3	8.3	12.5	8.3	100.0
教 育 学・心 理 学	0	7.4	1.9	7.4	24.1	5.6	1.9	38.9	11.1	1.9	100.0
文学(日本・東洋・西洋)	0	12.5	0	25.0	25.0	0	0	25.0	12.5	0	100.0
英 会 話・英 語	0	0	0	30.0	0	10.0	20.0	40.0	0	0	100.0
工 学(建築・コンピューター)	2.9	17.6	0	38.2	0	0	0	23.5	8.8	8.8	100.0
そ の 他	3.8	76.9	7.7	3.8	0	0	0	0	7.7	7.7	100.0

べて高いようである。

だに過したくないからという理由で英会話を学習したいという人が多いことが目立っている。

第一位にあげたそれらの内容を学習したい方法としては、自分たちのグループ・サークルでやりたいという人がもっとも多く、四人に一人の割合になつてゐる。そのほかでは、個人教授、大学・学校の公開講座をあげている人がおよそ十人に一人であるが、その他の理由はいずれもあまり多くはない。地区別の様子としては、戸板地区の場合に、公開講座の比率がやや他にくら

方法	地区										無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
出 花	2.3	2.9	13.5	2.9	21.6	5.8	4.1	6.4	3.5	9.26	9.100.0	
戸 板	2.0	3.6	15.7	3.2	25.0	5.2	5.6	12.9	3.6	8.5	100.0	
月 均	1.4	6.2	10.4	5.7	26.5	4.7	7.1	9.0	4.3	36.2	18.5	100.0
平 均	1.9	4.3	13.3	4.0	24.6	5.2	5.7	9.8	3.8	8.1	19.2	100.0

- (1) 通学教育で
- (2) 本やテキストを使い独力で
- (3) 個人教授で
- (4) ラジオ、テレビで
- (5) 自分たちのグループ、サークルで
- (6) 会社の研修会やセミナーで
- (7) PTAや公民館の学級、講座で
- (8) 大学、学校の公開講座で
- (9) 民間企業や各種学校の教室、講座で
- (10) その他

内容と方法との関係を見ると、経済、政治・社会・時事問題、歴史、人生観、教育学・心理学の場合はいずれも、自分たちのグループやサークルで希望する人がもっとも多くなつてゐる。そのほかでは、文学は大学などの公開講座、英会話は個人教授、工学はラジオ・テレビでという人がもっとも多い。PTAや公民館の学級・講座でやりたいという人は、どの内容の場合もあまり多くないが、法律の場合のみは二〇%の人が希望しているのが例外的に高率である。

内 容	方 位										無答	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
法 律	0	0	21.4	0	14.3	14.3	21.4	7.1	0	21.4	0	100.0
経 済	0	6.3	21.9	9.4	25.0	4.7	1.6	7.8	7.8	12.5	3.1	100.0
政 治・社 会・時 事 問 題	0	6.0	15.1	3.6	34.9	5.4	9.6	6.6	2.4	13.3	3.0	100.0
歴 史 (日 本・世 界)	2.4	3.7	4.9	0	41.5	3.7	7.3	23.2	3.7	6.1	3.7	100.0
人 生 観	8.3	4.2	16.7	4.2	29.2	16.7	0	12.5	4.2	4.2	0	100.0
教 育 学・心 理 学	7.4	3.7	14.8	3.7	29.6	16.7	1.9	14.8	3.7	3.7	0	100.0
文 学 (日 本・東 洋・西 洋)	0	6.3	18.7	0	15.6	3.1	9.4	28.1	9.4	9.4	0	100.0
英 会 話・英 語	10.0	0	30.0	10.0	10.0	10.0	0	10.0	10.0	10.0	0	100.0
工 学 (建 築・コ ンピ ュー ター)	2.9	8.8	20.6	26.5	23.5	0	0	5.9	2.9	8.8	0	100.0
そ の 他	0	7.7	26.9	0	15.4	3.8	19.2	7.7	15.4	3.8	0	100.0

これらのものを学習するのに都合のよい時間帯としては、平日の午前土曜の午前をあげた人がいずれも二割近く、日曜の午前も一割ほどの人があげている。これを合わせると四割以上の人が午前中が都合がよいことになる。この点に関しては、地区による差はほとんどない、といえうである。

内容と時間の関係を見ると、午日の午前を希望するものと、土曜の午前を希望するものが多い。前者としては、法律、経済、歴史、教育学・心理学、文学があり、後者としては政治・社会・時事問題、人生観、英会話、工学がある。その他の時間は一般的に希望する人が少ないが、平日の午後は法律、人生観、平日の夜は人生観、英会話、土曜の夜は法律、日曜の午前は教育学・心理学を学習したいという人の中に比較的多くいる。

地区	時間帯	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	無答	計
		此 花	15.2	5.8	9.4	16.4	0.6	4.7	9.4	7.0	3.5	0.6	27.5
戸 板	21.0	4.0	10.1	17.7	0.4	5.6	14.1	3.2	7.3	2.0	14.5	100.0	
鞆 月	15.6	5.7	7.6	14.7	0.5	9.5	8.1	9.0	7.1	14.7	17.5	100.0	
平 均	17.6	5.1	9.0	16.3	0.5	6.7	10.8	6.2	6.2	2.5	19.0	100.0	

- | | |
|-----------|-------------|
| (1) 平日の午前 | (2) 平日の午後 |
| (3) 平日の夜 | (4) 土曜の午前 |
| (5) 土曜の午後 | (6) 土曜の夜 |
| (7) 日曜の午前 | (8) 日曜の午後 |
| (9) 日曜の夜 | (10) いつでもよい |

内 容	時間帯										無答	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
法 律	35.7	14.3	7.1	7.1	0	14.3	14.3	0	0	7.1	0	100.0
経 済	21.9	6.3	10.9	20.3	1.6	4.7	14.1	7.8	4.7	4.7	3.1	100.0
政治・社会・時事問題	16.9	7.2	9.0	22.3	0.6	9.0	14.5	7.8	7.2	2.4	3.0	100.0
歴 史 (日本・世界)	23.2	4.6	7.3	18.3	0	8.5	12.2	4.9	14.6	3.7	2.4	100.0
人 生 観	16.7	12.5	25.0	29.2	0	8.3	4.2	0	0	0	4.2	100.0
教 育 学・心 理 学	20.4	7.4	14.8	11.1	0	7.4	20.4	7.4	11.1	0	0	100.0
文学(日本・東洋・西洋)	25.0	3.1	15.6	15.6	0	9.4	12.5	6.3	9.4	3.1	0	100.0
英 会 話・英 語	20.0	0	30.0	30.0	0	10.0	0	0	10.0	0	0	100.0
工 学 (建築・コンピューター)	20.6	2.9	8.8	29.4	2.9	5.9	8.8	5.9	5.9	5.9	2.9	100.0
そ の 他	26.9	3.8	6.8	19.2	0	3.8	11.5	26.9	0	3.8	0	100.0

学習したい気持ちももっとも強いものとしてあげたものの強さを推量する一つの手段として、経費との関係を見てみると、約半数の人が多少は(経費が)かかってますと答えているが、四人のうち一人々らの人は、お金をかけてまでする気はない、と答えている。

地区別では、少の経費はかけるという人及び、相当かかってやるという人が多しとお金をかけてやる気はない人がもっとも多しのが数月というところになる。

地区	経費		相 当		計
	お金をかけておぼだす気はない	多少はかかっていてもいい	相当かかってもいい	何ともいいえない	
此 戸 板	20.5	48.0	4.7	26.9	100.0
月 均	21.8	55.6	6.0	16.5	100.0
平 均	31.8	48.3	1.9	17.5	100.0
平 均	24.8	51.3	4.3	19.7	100.0

内容との関係を見ると、法律を希望する人の場合は例外的に、お金をかける気はない人の比率が低く、相当かかってもらいたい人の比率が高くなっている。その他の内容では似たような傾向となっているが、歴史及び英会話の場合は相当かかってもらいたい人が皆無くなるという点が目立つところ。

内 容	経 費				無答	計
	お金をかけてまでする気はない	多少はかかっていてもいい	相当かかってもいい	何ともいいえない		
法 律	7.1	71.4	14.3	7.1	100.0	
経 済	25.0	67.2	6.3	1.6	100.0	
政治・社会・時事問題	34.3	57.8	3.6	4.2	100.0	
歴 史 (日本・世界)	31.7	61.0	0	7.3	100.0	
人 生 観	33.3	54.2	8.3	4.2	100.0	
教 育 学・心 理 学	37.0	53.7	7.4	1.9	100.0	
文学(日本・東洋・西洋)	21.9	71.9	6.3	0	100.0	
英 会 話・英 語	20.0	70.0	0	10.0	100.0	
工 学 (建築・コンピューター)	32.4	58.8	8.8	0	100.0	
そ の 他	11.5	76.9	11.5	0	100.0	

一般教養の領域の中で二番目にやりたいものとして、歴史分野

がもっとも高い比率となり、社会的な分野（政治・社会・時事問題）がそれについて多い。これらはいずれも一番目にやりたいものとしても多くあげられていたものであるが、教育学・心理学について学習したいという人が一割近くと多くなっている。第三位にあげたものでは、社会的な分野がもっとも多いことは、第一・二位にあげたものの場合と同じであるが、それについて教育学・心理学が第二位になっているのが目立っている。

一般教養の領域で学習したいと思うものが一つもなかった人は一八・九％、一つだけあった人は一五・四％、二つだけあった人は一九・四％ということになり、したがって、四六・三％の人は三つ以上の希望事項があったわけである。地区別では、此花地区の人の中心に、一般教養の領域への学習希望がやや低いのが目立っている。

学習希望項目数		0	1項目	2項目	3項目以上	計
地区	此花	28.7	14.6	16.9	39.8	100.0
	戸板	13.7	14.9	22.2	49.2	100.0
平均		17.1	16.5	18.1	48.3	100.0
平均		18.9	15.4	19.4	46.3	100.0

第2位に希望した内容項目

地区	内容										無記入	計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
此花	1.2	4.1	11.3	5.1	6.4	5.3	2.9	1.8	4.1	11.2	4.3	3.1	100.0
戸板	0.4	5.6	14.1	11.7	7.5	9.3	5.2	3.2	2.7	3.3	2.8	6.1	100.0
平均	0.5	3.8	12.3	11.9	4.4	7.1	5.7	2.8	3.8	2.4	3.3	6.1	100.0
平均	0.6	4.6	13.3	11.7	9.5	4.8	7.4	2.7	5.2	2.2	4.3	3.1	100.0

第3位に希望した内容項目

地区	内容										無記入	計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
此花	0	3.5	5.1	4.0	1.8	8.2	2.9	2.3	1.8	1.8	6.0	2.1	100.0
戸板	0	6.5	4.8	19.0	6.5	4.0	3.2	2.4	1.6	1.2	5.0	8.1	100.0
平均	0	9.0	5.8	10.0	4.3	8.1	2.8	1.9	4.7	1.9	5.1	7.1	100.0
平均	0	6.5	4.8	14.6	4.4	6.5	3.0	2.2	2.7	1.6	5.3	7.1	100.0

つぎに、趣味的なことからへの要求であるが、全体で約八割近くの人がなんらかのものを学習したいという気持ちをあきらかにしている。この場合も、一般教養の場合と同じく、此花地区の場合がやや、学習希望なしの人の比率がいくらか高いが、それでも二割以下である。

個々の内容に関して、やりたい気持ちの強いものとして第一位にあげたものは、書道（毛筆・ペン習字）と手芸編物がいずれも一〇％を越え、高率となっている。そのほかでは、合唱・民謡、園芸知識、ゴルフの技術などが比較的高率のものといえる。

やりたいものとして第一位にあげたものを学歴の面から見るとよく目立つのは大学卒の場合で、約三割の人がゴルフの技術を第一位にやりたいものとしてあげていること、及び、一割の人が囲碁・トランプなどの室内遊戯をあげていることである。これらはいずれも他の学歴の人の場合には、大学卒にくらべてかなり低率となっている。また、手芸・編物を第一位にあげた人は新制高校以下の学歴の人の場合に高率であり、それ以上の学歴の人との間にきわ立った差を見せている。

地区	内容																				無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
此花	2.9	2.3	7.0	4.7	14.6	6.4	3.5	7.0	2.3	2.9	1.2	7.0	0.6	5.8	2.3	2.3	1.2	2.9	1.8	2.3	18.7	100.0
戸板	2.4	5.2	8.5	3.6	10.5	2.8	4.0	15.7	3.2	0.4	1.2	8.1	2.8	6.9	2.0	2.8	2.8	2.0	2.4	1.2	11.3	100.0
鞍月	2.8	5.2	7.6	1.4	13.7	3.8	1.9	11.8	5.7	0.9	2.4	10.9	1.9	5.2	0.5	3.8	0.9	6.2	1.4	0	11.8	100.0
平均	2.7	4.4	7.8	3.2	12.7	4.1	3.2	12.1	3.8	1.3	1.6	8.7	1.9	6.0	1.6	3.0	1.7	3.7	1.9	1.1	13.5	100.0

- (1) 洋楽器 (ピアノ, ヴァイオリンなど)
(2) 邦楽器 (琴, 三味線など) (3) 合唱・民謡 (4) 絵画 (洋画・日本画)
(5) 書道 (毛筆, ペン習字) (6) お花 (7) お茶 (8) 手芸・編物
(9) 写真 (10) 彫刻・陶芸 (11) 俳句・短歌 (12) 園芸知識
(13) 囲碁・トランプ等の室内遊戯 (14) ゴルフの技術 (15) スケート・スキーマの技術
(16) ボーリングの技術 (17) その他のスポーツ (18) 謡曲・仕舞 (19) 小唄・長唄 (20) その他

学 歴	内 容																				無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
小・高小	0.6	3.1	11.2	0.6	9.3	5.0	1.9	11.8	2.5	2.5	2.5	14.3	1.9	1.9	0	1.2	0	3.1	2.5	0	24.2	100.0
新 中	1.6	3.9	9.4	2.3	14.1	6.3	2.3	16.4	5.5	1.6	2.3	6.3	0.8	3.1	0	4.7	1.6	2.3	3.9	3.1	8.6	100.0
旧中・高女	0	5.9	10.3	4.4	13.2	1.5	7.4	13.2	0	1.5	0	13.2	1.5	4.4	0	0	1.5	4.4	0	1.5	16.2	100.0
新 高	6.0	6.0	4.8	3.0	14.4	3.6	3.0	15.0	5.4	0.6	0	3.6	2.4	7.2	5.4	5.4	3.0	4.2	0	1.2	6.0	100.0
旧 専 高	4.0	4.0	0	16.0	12.0	0	13.0	0	0	0	4.0	12.0	0	12.0	4.0	0	4.0	12.0	0	0	4.0	100.0
短 大	4.8	14.3	4.8	9.5	9.5	9.5	0	4.8	9.5	0	4.8	4.8	0	9.5	0	0	4.8	4.8	4.8	0	0	100.0
新・旧 大	3.3	0	3.3	3.3	16.7	0	3.3	0	3.3	0	0	6.7	10.0	33.3	0	0	3.3	3.3	0	0	10.0	100.0
不 明	3.3	0	6.7	3.3	13.3	3.3	0	3.3	3.3	0	3.3	10.0	0	3.3	0	6.7	0	0	6.7	0	33.3	100.0

各職種ごとに上位のものをお列記すると、つぎのようになる。

学歴	順位	1 位	2 位	3 位
小・高小	園芸知識	手芸・編物	合唱・民謡	
新中	手芸・編物	書道	合唱・民謡	
旧中・高女	書道, 手芸・編物,	園芸知識(同率)		
新高	手芸・編物	書道	道—ゴルフの技術	
旧高専	絵画	書道, お茶, 園芸知識, ゴルフ,		
短大	邦楽	器楽	謡曲(同率)	
新・旧大	ゴルフの技術	書道, お花, 写真, ゴルフの技術(同率)	道—室内遊戯	

つぎに、職業の面から見ると、つぎの如くである。書道を第一位にあげた人の比率がやや高いのが事務職、労務職、手芸・編物は自由業、労務職、写真は自由業、園芸知識は労務職、ゴルフの技術は管理職、事務職、謡曲・仕舞は管理職がいずれも、他の職業にくらべると、いくらか高率になっている。第一位に希望した人が一人もないものを見ると、専門・技術職の場合は小頃・専頃の1項目だけであるのが、他の職業の場合は5項目〜8項目であるのにくらべて目立つ。

職 種	内 容																				無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
自由業	0	4.3	4.3	4.3	8.7	4.3	0	10.9	13.0	0	0	10.9	0	4.3	2.2	2.2	2.2	4.3	4.3	0	19.6	100.0
管理職	5.1	0	10.3	7.7	12.8	0	5.1	2.6	2.6	0	0	10.3	5.1	23.1	2.6	0	0	10.3	0	0	2.6	100.0
事務職	1.5	7.6	9.1	4.5	18.2	17.6	4.5	4.5	1.5	0	0	7.6	0	15.2	0	3.0	4.5	4.5	0	0	6.1	100.0
労務職	5.7	1.9	7.5	1.9	17.0	3.8	1.9	17.0	0	0	0	15.1	5.7	0	0	1.9	1.9	5.7	1.9	1.9	9.4	100.0
専門・技術職	6.5	2.8	11.1	0.9	13.0	3.7	1.9	0.9	9.3	2.8	0.9	8.3	5.6	5.6	4.6	7.4	2.8	2.8	0	1.9	8.3	100.0
その他	0	8.0	0	0	12.0	0	0	12.0	12.0	4.0	4.0	12.0	0	4.0	4.0	0	8.0	4.0	0	4.0	12.0	100.0
不明	1.4	5.1	7.2	3.4	11.3	4.4	4.1	18.4	1.0	1.4	2.7	7.2	0.3	3.8	0.7	2.4	0.3	2.4	3.1	1.0	18.4	100.0

各職業ごとに、上位のものをお列記すると、つぎのようになる。

職 種	順位	第 1 位	第 2 位	第 3 位
自由業	写真	真書	手芸編物	園芸知識
管理職	ゴルフの技術	書道	書道	合唱・民謡
事務職	書道, 手芸	編物	園芸知識	園芸知識
労務職	書道	編物	園芸知識	園芸知識
専門・技術職	書道	編物	園芸知識	園芸知識

やりたい気持がもっとも強いものとしてあげたものを学習したいと思う理由としては、余暇時間をむだに過したくないから、自己向上のために役立つから、をあげた人がいずれも二割近くおり、ついでは、家庭生活の上で必要だから、多くの人と知り合う機会になるから、が多い。

地区別では、此花地区では自己向上のためをあげた人が少なく、戸板地区では、余暇時間をむだに過したくないからの率がやや低く、鞍月地区では、多くの人と知り合えるから、家庭生活の上で必要だからの比率がやや高いという傾向がみられる。

理由	地区									無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
此花	4.1	0.6	5.8	8.2	7.6	17.5	15.8	15.2	4.7	20.5	100.0
戸板	4.4	0.8	6.5	8.9	7.7	21.0	19.4	13.7	6.5	11.3	100.0
鞍月	4.7	0.9	6.6	10.9	9.5	17.5	19.4	14.2	3.3	12.8	100.0
平均	4.4	0.8	6.3	9.4	8.3	18.9	18.4	14.3	4.9	14.3	100.0

- (1) 現在の職業に必要だから
- (2) 転職や就職のために必要だから
- (3) 現代人の教養として必要だから
- (4) 家庭生活の上で必要だから
- (5) 多くの人と知り合う機会になるから
- (6) 余暇時間をむだに過したくないから
- (7) 自己向上のために役立つから
- (8) 別に動機はない
- (9) その他

内容との関係を見ると、洋楽器、手芸・編物、写真、彫刻・陶芸、園芸知識、室内遊戯、その他のスポーツを第一位にやりたいものと

理由	理由									無記入	計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
内容	洋邦合奏	0	5.9	11.8	0	0	47.1	5.9	11.8	17.6	0	100.0
	民謡	2.0	2.0	8.2	2.0	20.4	14.3	4.1	30.6	10.2	6.1	100.0
内	器楽	5.0	0	0	0	5.0	10.0	40.0	15.0	15.0	10.0	100.0
	唱歌	10.0	1.3	12.5	7.5	3.8	8.8	46.3	6.3	1.3	2.5	100.0
容	花	0	15.4	26.9	11.5	23.1	19.2	0	3.8	0	0	100.0
	茶	0	0	5.0	5.0	15.0	0	45.0	20.0	5.0	5.0	100.0
内	編	4.2	1.3	8.3	4.2	8.3	35.5	10.5	5.3	0	6.6	100.0
	陶	25.0	0	12.5	0	0	4.2	25.0	20.8	4.2	4.2	100.0
内	短	0	0	0	10.0	40.0	10.0	20.0	10.0	10.0	0	100.0
	知	3.6	0	1.8	16.4	3.6	32.7	7.3	23.6	7.3	3.6	100.0
内	遊	16.7	0	0	0	8.3	2.5	25.0	25.0	0	0	100.0
	ス	10.5	0	5.3	0	26.3	21.1	2.6	28.9	2.6	2.6	100.0
内	スケ	10.0	0	0	0	10.0	10.0	40.0	0	30.0	0	100.0
	ボ	10.5	0	5.3	5.3	5.3	21.1	0	36.8	0	15.8	100.0
内	ス	9.1	0	9.1	0	0	27.3	27.3	9.1	18.2	0	100.0
	仕	8.7	0	4.3	4.3	13.0	8.7	39.1	12.7	0	0	100.0
内	長	0	0	25.0	0	8.3	25.0	0	8.3	33.3	0	100.0
	他	14.3	0	14.3	14.3	0	14.3	0	14.3	28.6	0	100.0

してあげた人の場合には、余暇時間をむだに過したくないからという理由をあげた人がもっとも高い比率となっている。邦楽器、絵画、書道、お茶、スキー・スケートは自己向上のために役立つから、合唱・民謡、ゴルフの技術、ボーリングの技術、小唄・長唄の場合

別に動機はないとする人が多くなっている。その他では、彫刻・陶芸の場合に、職業に必要だから、小唄・長唄を現代人の教養としてお花、手芸・編物を家庭生活の上で、俳句・短歌を多くの人と知り合う機会に、ということから希望した人が、相対的に高い比率となっているのが特長的である。

そういった内容の学習は個人教授についてやりたいという人もっとも多く、自分たちのグループやサークルでやりたいという人もこれとほぼ同じくらい多くいる。また、本やテキストを使い独学でやろうという人もかなりいる。PTAや公民館の学級・講座といった社会教育関係の場をあげている人も一割近くいる。地区別では、此花地区で個人教授をあげた人の比率が高いことと、鞍月地区でPTA・公民館の比率が低いことぐらいがいくらか特長的なようである。

方法	地区										計		
	無記	1	2	3	4	5	6	7	8	9		10	
花	1.8	1.2	1.1	1.2	1.1	8.8	15.8	1.8	9.9	6.6	4.2	1.6	100.0
戸	4.0	3.6	15.7	16.9	10.5	17.3	1.6	10.9	0.8	6.5	12.1	1.0	100.0
被	0.5	5.2	14.7	18.0	10.9	18.5	2.4	6.6	0.7	6.1	5.6	1.0	100.0
平均	2.2	3.5	14.1	18.4	10.2	17.3	1.9	9.2	0.5	6.8	15.9	1.0	100.0

- (1) 通信教育で
- (2) 本やテキストを使い自力で
- (3) 個人教授で
- (4) ラジオ・テレビで
- (5) 自分たちのグループ・サークルで
- (6) 職場の研修会やセミナーで
- (7) PTAや公民館の学級講座で
- (8) 大学・学校の公開講座で

⑥ 西洋音楽や民族音楽の教授・講座で
小の部

内 容	方 法	計											
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
洋邦合 奏楽 唱・民	楽器	0	5.9	23.5	41.2	0	11.8	0	0	0	17.6	0	100.0
	器器謡画道	0	7.1	3.6	57.1	3.6	10.7	7.1	7.1	0	0	3.6	100.0
おお手 写彫 刻・陶	花茶物真芸	2.0	0	6.1	12.2	16.3	38.8	4.1	4.1	0	10.2	6.1	100.0
	器器謡画道	10.0	0	35.0	20.0	5.0	10.0	0	10.0	0	5.0	5.0	100.0
俳句・短 知遊	花茶物真芸	2.5	16.3	21.3	23.8	3.8	7.5	1.3	12.5	0	5.0	6.3	100.0
	器器謡画道	7.7	0	7.7	30.8	11.5	11.5	0	19.2	0	11.5	0	100.0
ケート・ス キー	花茶物真芸	0	0	5.0	45.0	5.0	20.0	0	10.0	0	10.0	5.0	100.0
	器器謡画道	1.3	2.6	21.1	14.5	9.2	18.4	0	17.1	0	10.5	5.3	100.0
ボソ の	花茶物真芸	0	0	25.0	20.8	12.5	16.7	4.2	4.2	0	12.5	4.2	100.0
	器器謡画道	0	0	0	12.5	25.0	12.5	0	25.0	0	12.5	12.5	100.0
グ ン	歌謡戯	0	20.0	40.0	0	0	20.0	10.0	0	0	10.0	0	100.0
	器器謡画道	1.8	1.8	20.8	5.5	32.7	14.5	1.8	9.1	0	5.5	5.5	100.0
一 の	歌謡戯	0	0	16.7	8.3	8.3	25.0	8.3	25.0	8.3	0	0	100.0
	器器謡画道	5.3	0	21.1	18.4	2.6	39.5	0	0	0	7.9	5.3	100.0
ス キ	歌謡戯	10.0	10.0	0	40.0	10.0	20.0	10.0	0	0	0	0	100.0
	器器謡画道	0	0	0	10.5	31.6	15.8	0	10.5	0	10.5	21.1	100.0
ポ ソ	歌謡戯	9.1	0	0	0	9.1	9.1	9.1	9.1	0	9.1	0	100.0
	器器謡画道	0	0	0	4.3	30.0	17.4	17.4	4.3	17.4	4.3	4.3	100.0
小 ソ	歌謡戯	0	0	0	8.3	16.7	8.3	25.0	0	25.0	0	16.7	100.0
	器器謡画道	14.3	0	14.3	28.6	14.3	28.6	0	0	0	0	0	100.0

学習内容との関係では、洋楽器、邦楽器、書道、お花、お茶、スキー・スケートの技術、謡曲・仕舞は個人教授でやりたいという人が最高の比率を占めている。合唱・民謡、室内遊戯、ゴルフの技術その他のスポーツ、小唄・長唄は自分たちのグループで、彫刻・陶芸、室内遊戯及び小唄・長唄はPTAや公民館で、をあげている人が多い。

地区	時間帯	平日		土曜		日曜		無記		計			
		午前	午後	午前	午後	午前	午後	入	入				
此戸鞍平	花板	25.1	4.1	10.5	15.8	1.2	1.8	8.2	8.2	5.8	0.6	18.7	100.0
	月	17.7	5.2	10.9	15.7	0.8	5.2	10.5	8.9	10.9	2.4	11.7	100.0
	均	16.1	6.2	7.6	16.1		0.8	5.9	12.3	8.5	2.8	12.3	100.0
	平均	19.2	5.2	9.7	15.9	0.6	5.4	9.5	9.8	8.7	2.1	13.8	100.0

その他で特に目立つものとしては、書道と俳句・和歌は通信教育で、絵画、俳句・和歌は本やテキストを使って独学で、園芸知識、ボーリングの技術はラジオ、テレビで、洋楽器、小唄・長唄は各種学校でという人がかなり多くなっている。

時間的には平日・土曜の午前中というのが都合がよい人が多い。土曜の午後はもっとも都合が悪い時間帯のように見える。この傾向はどの地区にも共通にみられるものである。地区別に異なる傾向としては、土曜の夜及び日曜の夜が都合がよいという人の比率が、此花地区では他の二地区にくらべて、いくらか低く、逆に、平日の午前がよいとする人がかなり多くなっているのが目につく。

約六割の人は、多少の経費はかかっててもこれらのことをやりたいとしているが、お金をかけてまでする気はないという人も一割ぐらいいる。相当かかって

地区	花板月均	無記入			計	
		お金をかけるつもりはない	多少はかかってもいい	かかってもいい		
此戸鞍平	8.6	61.1	5.7	10.0	14.6	100.0
花板月均	6.4	62.0	5.3	7.0	19.2	100.0
平均	7.7	60.1	6.9	12.9	12.5	100.0
	11.4	61.6	4.7	9.0	13.3	100.0
	8.6	61.1	5.7	10.0	14.6	100.0

やりたいという人は戸板地区の人がもっとも多いようである。

内容	無記入					計
	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい	
洋装絵巻	11.8	52.9	23.5	11.8	0	100.0
合唱	3.6	75.0	3.6	10.7	7.1	100.0
民謡	8.2	73.5	2.0	8.2	8.2	100.0
器楽	5.0	60.0	15.0	15.0	5.0	100.0
書お	7.5	75.0	3.8	11.3	2.5	100.0
お	11.5	73.1	7.7	3.8	3.8	100.0
手	5.0	65.0	15.0	10.0	5.0	100.0
写	11.8	76.3	1.3	6.6	3.9	100.0
影	4.2	70.8	4.2	16.7	4.2	100.0
俳	12.5	87.5	0	0	0	100.0
園	10.0	50.0	0	20.0	20.0	100.0
遊	9.1	65.5	5.5	16.4	3.6	100.0
戯	41.7	50.0	8.3	0	0	100.0
内	2.6	98.4	18.4	7.9	2.6	100.0
ル	0	63.2	10.0	20.0	0	100.0
ス	15.8	70.0	0	15.8	5.3	100.0
キ	0	63.6	9.1	27.3	0	100.0
ー	13.0	69.6	8.7	8.7	0	100.0
ン	25.0	50.0	8.3	16.7	0	100.0
シ	14.3	57.1	14.3	14.3	0	100.0
テ						
レ						
ノ						
ハ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						
フ						
ブ						
ヘ						
ニ						
ホ						

内容別にみると、室内遊戯はお金をかけてまでやる気はしないという人が四割おり、他にくらべて圧倒的に高率になっている。逆にスキー・スケートの技術、その他のスポーツの場合はそれが皆無である。一方、相当かかってでもやりたいという人が比較的高率を占めているものとしては、洋楽器、絵画、お茶、ゴルフがある。

趣味に関するものうち、一番目に強くやりたいと思うものとしては、園芸知識、書道(毛筆、ペン習字)合唱・民謡、手芸・編物

内容	地区																				計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
此花	1.2	4.1	8.2	2.3	5.8	5.3	4.7	8.2	1.8	0	2.3	4.7	2.3	2.9	1.8	4.1	1.2	2.9	2.3	0	33.9
戸板	0.8	1.6	6.5	4.4	7.7	6.9	4.4	5.6	4.4	2.0	2.8	8.5	1.2	4.8	2.8	6.9	0.8	1.6	2.0	0	24.2
鞍月	1.4	2.8	7.6	2.8	8.5	2.8	5.7	8.5	1.9	0.9	1.9	9.5	1.9	2.8	1.4	5.2	2.4	3.8	0.9	0.5	26.5
平均	1.1	2.7	7.3	3.3	7.5	5.1	4.9	7.3	2.9	1.1	2.4	7.8	1.7	3.7	2.1	5.6	1.4	2.7	1.7	0.2	27.6

第三の領域として実用知識・技術に関するものについての要求をみてみよう。八割近くの人がこの領域のものの中に学んだり、習ったりしたいものがあると答えている。やりたい気持ちの一番強いものとして高い比率を占めたのはどの地区においても料理・栄養である。

。そのほかでは、園芸の知識・技術・簿記・接客・販売技術といったものが比較的多くの人が希望しているものである。此花地区の人場合には、この領域のもの学習を希望しない人が、他の二地区に比べてやや多いようである。

と、第一位に多くあげられたものとはほぼ共通のものが高率になっている。これらについて多いのは、ボーリングの技術、お花、お茶などである。

地区別では、此花地区では園芸知識、書道が戸板地区では合唱・民謡、手芸・編物が、鞍月地区ではお花がいずれも他の地区に比べてやや低率である、のが目につく。

内容	地区																				計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	0		
此花	0.6	1.8	5.8	1.8	5.8	2.3	0.6	2.3	5.3	2.9	6.4	7.6	2.3	14.6	1.2	5.3	3.5	0	29.8	100.0	
戸板	3.6	4.0	7.7	1.6	6.5	4.4	0.4	1.6	5.6	6.5	8.9	6.0	2.4	8.9	3.2	4.8	4.4	0.4	9.0	100.0	
鞍月	2.8	2.4	8.5	1.9	4.3	3.8	0	1.9	3.8	5.2	10.9	7.1	1.4	12.3	1.4	5.7	5.2	0.5	20.9	100.0	
平均	2.5	2.9	7.5	1.7	5.6	3.7	0.3	1.9	4.9	5.1	8.9	6.8	2.1	11.6	2.1	5.2	4.4	0.3	22.5	100.0	

(1) 珠算
(2) 計算尺

(3) 簿記
(4) 家計簿のつけ方

- (5) テーブル・スピーチの話し方
- (6) 家庭医療の知識・技術
- (7) タイプ
- (8) 和裁
- (9) 洋裁
- (10) 手芸・編物
- (11) 園芸の知識・技術
- (12) 接客・販売技術
- (13) 室内装飾
- (14) 料理・栄養
- (15) 衣服一般のこと (流行・再生など)
- (16) 自動車の運転
- (17) 礼儀作法・エチケット
- (18) その他

学歴	内容																		無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
小・高	2.5	3.7	5.0	1.9	3.7	4.3	0	2.5	1.2	5.0	14.9	1.9	0	12.4	1.2	1.2	3.7	0.6	34.2	100.0
新中	3.1	2.3	7.8	1.6	6.3	5.5	0.8	2.3	6.3	3.9	3.9	7.8	3.1	10.9	2.3	7.0	6.3	0	18.7	100.0
旧中・高女	1.5	5.9	5.9	2.9	7.4	2.9	0	2.9	4.4	7.4	11.8	2.9	2.9	11.8	1.5	2.9	1.5	0	23.5	100.0
新高	2.4	2.4	10.2	1.8	4.8	3.0	0	1.8	8.4	4.8	5.4	9.0	1.8	12.0	3.0	9.0	4.8	0	61.5	100.0
旧専	0	4.0	12.0	0	0	0	0	4.0	4.0	20.0	20.0	0	12.0	4.0	4.0	0	0	0	16.0	100.0
短大	9.5	0	0	0	0	9.5	0	0	9.5	14.3	14.8	14.3	0	19.0	4.8	0	4.8	0	9.5	100.0
新・旧明	3.3	0	13.3	0	16.7	0	0	0	0	13.3	10.0	13.3	3.3	0	0	6.7	0	0	20.0	100.0
不	0	0	3.3	3.3	10.0	0	3.3	0	3.3	6.7	0	6.7	0	10.0	0	13.3	6.7	0	33.3	100.0

職業との関係はつきりである。自由業、管理職はテーブルスピーチの話し方、事務職、専門・技術職は園芸の知識・技術、労務職は料理・栄養を第一位にやりたいものとしてあげた人が多くなっている。希望者が一人もいなかったものは自由業は五項目、管理

第一位にやりたいとしてあげたものと学歴との関係を見ると、小学校・高小卒、旧制中学・高女卒、旧専高校卒では園芸の知識・技術、新制中卒、新制高卒、及び短大卒では料理・栄養、新・旧大卒では簿記をあげた人も多くなっている。学歴の差によるものがった傾向としては、簿記を希望する人の比率が新制高卒以上の人、それ以下の人にくらべると、総体的に多く、これが家計簿のつけ方になると逆の傾向になっていること、また、接客・販売技術や衣服一般のことも比較的高学歴層の方に率が高いことなどが目につく。

職は九項目、事務職は一項目、労務職は三項目、専門・技術職は四項目であり、実用技術的な領域への事務職の関心が広いことがうかがえる。

いずれも家庭生活の上で必要だからという理由で希望されている率が高いが、家計簿、家庭医療の場合とはくに高率である。計算尺、簿記、テープルスピーチの話し方、接客・販売技術はいずれも職業に必要だから、タイプ、園芸の知識・技術、室内装飾は余暇時間をむ

理由 内容	理由										無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
珠算	25.0	31.3	6.3	0	6.3	6.3	18.7	6.3	0	0	0	100.0
計算尺	66.7	0	16.7	0	5.6	11.1	0	0	0	0	0	100.0
簿記	48.9	19.1	6.4	4.3	0	4.3	10.6	2.1	2.1	2.1	0	100.0
家計簿	0	9.1	0	81.8	0	0	0	0	0	9.1	0	100.0
テープル・スピーチ	34.3	0	22.9	0	5.7	0	37.1	0	0	0	0	100.0
家庭医療	4.3	0	4.3	69.6	0	0	8.7	13.0	0	0	0	100.0
タイプ	0	0	0	0	0	50.0	0	0	0	50.0	0	100.0
和裁	8.3	0	0	50.0	0	0	8.3	25.0	0	8.3	0	100.0
洋裁	6.5	0	6.5	41.9	0	22.6	9.7	6.5	3.2	3.2	0	100.0
手芸・編物	0	3.1	0	40.6	3.1	28.1	12.5	6.3	3.1	3.1	0	100.0
園芸	7.1	0	3.6	19.6	1.8	37.5	16.1	5.4	7.1	1.8	0	100.0
接客・販売技術	74.4	9.3	2.3	0	2.3	2.3	9.3	0	0	0	0	100.0
室内装飾	23.1	0	0	7.7	0	30.8	0	30.8	7.7	0	0	100.0
料理栄養	9.6	0	0	63.0	1.4	6.8	12.3	1.4	1.4	4.1	0	100.0
衣服一般	7.7	7.7	7.7	53.8	0	7.7	7.7	7.7	0	0	0	100.0
自動車運転	27.3	9.1	9.1	9.1	3.0	12.1	9.1	18.2	3.0	0	0	100.0
礼作法	3.6	3.6	28.6	25.0	10.7	3.6	21.4	0	0	3.6	0	100.0
その他	0	0	0	100.0	0	0	0	0	0	0	0	100.0

だに過したくないから、といった理由から希望が出ているようである。

その他としては、珠算の場合に転職や就職に便利だから、テープルスピーチを自己向上のために役立つからという理由であげている人の率がかかなり高いのが目立っている。

これらのものを学習する方法としては、本やテキストを使って独習したい、ラジオやテレビで学習したいと思っている人が多い。そのほかの方法としては、個人教授や、自分たちのグループやサークルでやりたいという人が全体としては比較的高率のものである。

方法	地区										無記入	計		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10				
此花	6.4	9.9	8.2	11.7	7.6	3.5	9.4	1.2	7.6	0	0	0	34.5	100.0
戸板	4.0	19.8	7.3	13.3	9.3	5.2	9.7	1.2	11.3	0	8.1	8.1	100.0	0
鞍月	8.1	14.2	12.3	10.9	10.0	1.9	6.6	0	12.8	0	5.2	2.7	100.0	0
平均	6.0	15.2	9.2	12.1	9.0	3.7	8.6	0.8	10.8	0	5.2	4.1	100.0	0

- (1) 通信教育で
 - (2) 本やテキストを使って独力で
 - (3) 個人教授で
 - (4) ラジオ・テレビで
 - (5) 自分たちのグループ・サークルで
 - (6) 会社の研修会やセミナーで
 - (7) PTAや公民館の学校・講座で
 - (8) 大学・学校の開放講座で
 - (9) 民間企業や各種学校の教室・講座で
 - (10) その他
- 内容の面からみると、独学でやりたい人が多いものは、簿記、接客・販売技術、室内装飾、料理・栄養、衣服一般のことなどである。

る。ラジオやテレビでという人は計算尺、家庭医療・知識・技術、タイプ、園芸の知識・技術の中に多くなっている。和裁、洋裁、手芸・編物は個人教授で、接客・販売技術、室内装飾は会社の研修会

方 法	領 域										無記入	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
珠 算	18.7	25.0	6.3	12.5	12.5	0	6.3	0	18.3	0	0	100.0
計 簿	11.1	22.2	11.1	22.2	11.1	11.1	0	5.6	5.6	0	0	100.0
簿 記	27.7	29.8	8.5	6.4	8.5	0	10.6	2.1	6.4	0	0	100.0
家 計	0	9.1	9.1	9.1	27.3	0	9.1	0	9.1	0	27.3	100.0
テ ー ブ ル	0	17.1	5.7	11.4	11.4	17.1	11.4	0	20.0	0	5.7	100.0
ス ピ ー チ	21.7	17.4	4.3	26.1	4.3	0	26.1	0	0	0	0	100.0
家 庭 医 療	0	0	0	50.0	0	0	0	0	0	0	50.0	100.0
タ イ	0	8.3	50.0	25.0	0	0	0	0	0	0	16.7	100.0
和 洋	3.2	6.5	22.6	6.5	16.1	0	22.6	0	22.6	0	0	100.0
手 芸	3.1	18.7	28.1	9.4	18.7	0	3.1	0	15.6	0	3.1	100.0
園 芸	10.7	16.1	3.6	30.4	14.3	0	14.3	1.8	1.8	0	7.1	100.0
接 客 販 売 技 術	2.3	25.6	7.0	9.3	9.3	20.9	7.0	4.7	7.0	0	7.0	100.0
室 内 装 飾	15.4	30.8	0	7.7	0	23.1	0	0	15.4	7.7	0	100.0
料 理 栄 養	1.4	20.5	8.2	19.2	15.1	1.4	12.3	0	13.7	0	8.2	100.0
衣 服 一 般	15.4	30.8	0	15.4	15.4	0	15.4	0	7.7	0	0	100.0
自 動 車 運 転	3.0	9.1	21.2	6.1	0	0	3.0	0	57.6	0	0	100.0
礼 儀 作 法	0	17.9	14.3	14.3	14.3	3.6	10.7	0	17.9	0	7.1	100.0
そ の 他	0	0	0	0	0	0	50.0	0	0	50.0	0	100.0

などで、が比較的多いものである。また、PTAや公民館での学習は家庭医療、洋裁、衣服一般のことを希望する人の中にいくらかいるようである。

学習するのに都合のよい時間帯としては、平日か土曜の午前中をあげる人が三地区に共通して多い。そのほかでは平日と日曜の夜が比較的多い方である。地区別では、鞍月地区では日曜の午後をあげた人が多く、此花地区の場合、土曜の夜都合が悪いという人が多いのが目立っている。

時 間 帯	地区		土 曜		日 曜		無記入	計	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後			
比 花	23.4	5.8	10.5	11.7	0.6	2.3	7.0	0.6	31.0
平 坂	20.2	5.6	12.5	14.9	1.2	6.0	8.5	4.0	7.3
平 均	17.1	5.7	4.7	16.1	0.8	1.3	8.1	7.8	1.1
無 記 入	20.0	5.7	9.4	14.4	0.6	5.7	6.5	6.3	7.3
計									221.7

経費の点では五五%の人が多少はかかってもすると答えている。お金をかけてまでやる気はないという人は一割近くいるが、此花地区ではその比率は、他の二地区にくらべてかなり低くなっている。しかし、相当かかってもやりたいという人の比率も、此花地区の場合、かなり低くなっている。

地区	経費		相 当		何 とも		無記入	計
	お金をかけたくない	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい	かかってもいい		
比 花	4.7	53.8	1.8	8.8	31.0	100.0		
平 坂	11.7	58.9	4.4	8.9	16.1	100.0		
平 均	9.0	52.6	5.2	11.4	21.8	100.0		
無 記 入	8.9	55.4	4.0	9.7	22.1	100.0		

どの内容を希望する人も、経費は多少かかってもするという人が大部分であるが、タイプ、和裁、衣服一般のことは、いくらかその率が低く、タイプ、和裁の場合はお金をかけてまでする気はないという人がかなり多いのが特長的である。逆に、自動車の運転

経費内容	おて金まをける多少はかかも相当てもい	かかや何ともい	無記入	計		
	おて金まをける多少はかかも相当てもい	かかや何ともい				
珠算	12.5	75.0	0	12.5	0	100.0
尺記簿	11.1	72.2	11.1	5.6	0	100.0
家計簿	4.3	85.1	4.3	6.4	0	100.0
テーブル・椅子	18.2	63.6	0	9.1	9.1	100.0
家庭医療	8.6	65.7	8.6	17.1	0	100.0
タイプロ	13.0	65.2	0	21.7	0	100.0
和裁	50.0	0	0	0	50.0	100.0
洋裁	33.3	41.7	8.3	8.3	8.3	100.0
手芸・編物	3.2	83.9	0	12.9	0	100.0
園芸	6.3	51.3	3.1	6.3	3.1	100.0
接客・販売技術	14.3	67.9	3.6	12.5	1.8	100.0
室内装飾	7.0	26.7	4.7	11.6	0	100.0
料理栄養	15.4	61.5	4.7	15.4	0	100.0
衣服	5.5	82.2	1.4	8.2	2.7	100.0
自動車	7.7	38.5	7.7	38.5	2.7	100.0
自働車	12.1	51.5	24.2	9.1	3.0	100.0
礼儀作法	21.4	50.0	3.6	17.9	7.1	100.0
その他	0	0	0	50.0	50.0	100.0

の場合は相当かかってもやりたいという率が高くなっている。
四社会教育観について

住民が社会教育というものについて、どのような気持を抱いているのかをイメージ調査の形でさぐってみたわけである。「あなたは公民館とか、社会教育という言葉を聞いたり、見たりした時、どういふ感じをもちますか」という設問で、次の五つの側面について、それぞれの反応をチェックしてもらった。すなわち、五つの側面として、

- 開放的—閉鎖的
- 楽しい—つまらない
- スマート—泥くさい
- 親しみやすい—固苦しい
- 進歩的—保守的

という対比的な軸を設定し、それぞれの軸にたいして、どちらともいえないという反応をばさんで両側に非常に(そう思う)かなり(そう思う)のいずれの反応をとるか答えてもらったのである。以下、それぞれの軸ごとに反応の状況を記すと、次のとおりである。

五つの軸のいずれも無答者がたいへん多く四五%内外になっている。また、反応をチェックした人の中でも、どちらともいえないという人が多く、この両者を合わせると七〇%以上になる。つまり十人のうち七人ぐらいの人は、公民館とか社会教育とかいわれてもピンとこない、といった状態にあることを示しているものといえよう。

開放的—閉鎖的の軸にたいしては、開放的だというイメージを抱く人が一六%、閉鎖的だという人が九%になっている。地区別で

は戸板地区では約二〇%の人が開放的だというイメージを持っているのたいてい、鞍月地区では約一三%といくら低い比率になっている。したがって、この側面に関しては、全体的にはいくらか開放的な雰囲気を感じさせているということができよう。

これを男女の別でみると、回答者のうちでは「どちらともいえない」とする人ももっとも多く、「かなり開放的」とする人がそれについて多いこと、そしてその比率もほとんど同じくらいと、全く似かよった傾向がみられる。ただし、閉鎖的とみる傾向はやや男性の方が強いようである。

閉鎖的→開放的

スコア		1	2	3	4	5	無記 入	計
地区	花板	4.7	5.3	25.7	12.9	2.3	49.1	100.0
	戸板	3.6	5.6	35.1	16.9	3.2	35.5	100.0
	鞍月	0.9	6.6	25.6	9.0	3.8	54.0	100.0
	平均	3.0	5.9	29.4	13.2	3.2	45.4	100.0

閉鎖的→開放的

スコア		1	2	3	4	5	無記 入	計
性別	男	3.5	7.7	29.5	12.8	3.2	43.3	100.0
	女	2.5	4.1	29.2	13.5	3.1	47.5	100.0

われている。しかし、戸板地区においては、「つまらない」の比率を上廻るといふ逆の傾向を示している。無答者の比率が戸板地区の場合は、他の二地区にくらべて、かなり低いことも目につく現象である。

第二の軸、つま

まらないという軸に関しては、つまらないものというイメージを持つ人の方が、ほんの少しではあるが、楽しいイメージを感じる人よりも多いという結果になっている。この傾向はとくに此花地区において著しく現

つまらない→楽しい

スコア		1	2	3	4	5	無記 入	計
地区	花板	7.0	8.2	24.6	7.6	1.8	50.9	100.0
	戸板	4.4	7.3	36.7	12.5	3.6	35.5	100.0
	鞍月	6.2	6.6	23.7	9.5	0.5	53.6	100.0
	平均	5.7	7.3	29.0	10.2	2.1	45.7	100.0

この軸に関しても、第一の軸と同様な傾向がみられる。つまり「なんともいえない」とする人が回答者中ではもっとも多いが、非好意的な反応（この場合は「つまらない」）が男性の方が多いことである。

つまらない→楽しい

スコア		1	2	3	4	5	無記 入	計
性別	男	5.4	9.0	29.5	8.7	2.2	44.2	100.0
	女	5.0	5.7	28.6	11.6	1.9	47.2	100.0

スマート——泥くさいの軸についてみると、泥くさいというイメージを持つ人が一二%にたいして、スマートだというイメージを持つ人が六%弱と大きな開きがみられ、泥くさいというイメージがかなり強く持たれていることがうかがえる。三地区の中では此花地区

がもっともその傾向が強く、戸板、鞍月はいずれも、此花地区ほど

スコア	地区	スコア					無記 入	計
		1	2	3	4	5		
スコア	花板	5.3	11.1	28.1	2.3	1.2	52.0	100.0
	戸板	4.4	6.9	40.7	5.6	1.6	40.7	100.0
	鞍月	4.3	6.2	26.5	5.2	0.5	57.3	100.0
	平均	4.6	7.8	32.5	4.6	1.1	49.4	100.0

の開きとはなっていない。

また、この軸の場合には無答者が約五〇%に達し、五つの軸の中でもっとも高率となっている。

男女のちがいは、ほとんどみられないといつてよさそうである。数字的には、第一、第二の軸と同じように、泥くさいとみる非好意的な反応がやや男性の方に多いが、前二者の場合よりもその差は少なくなっている。

泥くさい→スタート

性別	スコア	1	2	3	4	5	無記入	計
男	5.4	8.3	32.7	4.5	1.3	47.8	100.0	
女	3.8	7.2	32.4	4.7	0.9	50.9	100.0	

次に、親しみやすい—固苦しいという軸についてみると、無答者が三八%ともっとも少数であり、どちらともいえないの二三%を除いた約四〇%の人が、何らかの判断をしているのが特徴的である。判断をした人の中では、親しみやすいというイメージを持った人と、固苦しいというイメージを持つ人がほぼ同じくらいに分れている。

固苦しい→親しみやすい

スコア	1	2	3	4	5	無記入	計
地区	1	2	3	4	5	無記入	計
花	7.0	11.1	18.7	14.6	3.5	45.0	100.0
板	5.6	14.9	29.4	15.3	6.0	28.6	100.0
此	6.6	13.3	19.9	11.4	4.7	44.1	100.0
戸	6.6	13.3	23.3	13.8	4.9	38.3	100.0
数	6.3	13.3	23.3	13.8	4.9	38.3	100.0
月	6.3	13.3	23.3	13.8	4.9	38.3	100.0
平均	6.3	13.3	23.3	13.8	4.9	38.3	100.0

地区別では、戸板の場合に親しみやすいイメージを持っている人が二〇%をこえ、三地区の中ではもっとも高率であることが目立っている。

男性と女性とではやや異なった傾向がみられる。「親しみやすい」という感じを持っている人が女性の場合には二〇%ほどいるのに対して、男性の比率は一五%ほどであり、女性の方がやや強く親しみやすさを感じているといえそうである。

固苦しい→親しみやすい

性別	スコア	1	2	3	4	5	無記入	計
男	7.1	12.5	26.9	11.9	4.8	36.9	100.0	
女	5.7	14.2	19.8	15.7	5.0	39.6	100.0	

最後に、進歩的—保守的の軸であるが、この場合も、判断を下した人の中のイメージが全体としては割れているといえる。しかし地区ごとになると、此花では保守的、戸板では進歩的というイメージを持つ人がやや多く、鞍月ではほぼ同率という、三様の傾向となっている。

保守的→進歩的

スコア	1	2	3	4	5	無記入	計
地区	1	2	3	4	5 <td>無記入</td> <td>計</td>	無記入	計
花	7.6	8.2	23.4	9.9	0.6	50.3	100.0
板	5.6	7.7	33.1	13.7	3.2	36.7	100.0
此	6.2	5.2	20.9	10.4	0.9	56.4	100.0
戸	6.2	5.2	20.9	10.4	0.9	56.4	100.0
数	6.3	7.0	26.3	11.6	1.7	47.0	100.0
月	6.3	7.0	26.3	11.6	1.7	47.0	100.0
平均	6.3	7.0	26.3	11.6	1.7	47.0	100.0

男女別では、第三の軸の場合と同様、ほとんど差がみとみられない。

い、似かよった傾向を示している。男性の方に、いくらか保守的だと見なす人が多くくらいである。

保守的→進歩的

スコア	性別					計
	1	2	3	4	5	
男	6.4	8.3	27.6	11.2	1.3	45.2
女	6.3	5.7	25.2	11.9	2.2	48.7
						100.0
						100.0

これまで記してきた五つの軸のうち、最後の進歩的——保守的の軸を除いた他の四つの軸はいずれも、社会教育（ないしは公民館）にたいしての意識として、好意的な反応と、非好意的なものとも見なすことができよう。したがって、この四つの軸への反応を総合すると、四つの軸すべてにもっとも好意的な反応を下したタイプから、逆に、すべてにたいして非好意的な反応を下したタイプまでの範囲におさめることができる。各軸とも、もっとも好意的な反応にたいして五、もっとも非好意的な反応にたいして一のスコアを与えること、二十から四の範囲ということになる。これを便宜上、七つに段階化してその分布をみたのが（下の表）である。

スコアで十一〜十三を含む、段階4が約四分の一を占め、もっとも多くなっている。これを境にして、好意度の低いグループ（段階1〜3）と高いグループ（段階5〜7）に分けると、前者が後者の約二倍になっている。

このことからみると、社会教育（ないしは公民館）にたいしての住民の意識はかならずしも社会教育活動を進めるためにいい条件を備えてはいないといふべきであろう。

こういった全般的状況は三地区の場合にもほぼ共通にみとめられるが、各地区ごとの傾向をみると、鞍月地区では好意度の低いグル

ープがいくらか少なく、戸板地区では好意度の高いグループがいくらか多いといえそうである。

好意度	地区							計
	1	2	3	4	5	6	7	
比花	9.9	5.8	11.7	20.5	8.8	0	0.6	42.7
戸板	6.5	6.5	11.3	34.3	11.3	1.6	0.28	6
鞍月	5.7	5.7	7.6	23.7	7.1	0.9	0.49	3
平均	7.1	6.0	10.2	27.0	9.2	1.0	0.23	9.4
								100.0

男女別では、男女いずれも中間段階にあたる段階4にはいる人がもっとも多いが、それより以下の段階、つまり、社会教育にたいしての好意度が低いといえる層が男では約二五％、女は二二％であること、また逆に、好意度が高いといえる層（段階5・6・7）の比率は男が九％、女は約一二％であることから、男性よりも女性の方がやや、好意度が高いようにも思われる。

好意度	性別							計
	1	2	3	4	5	6	7	
男	7.1	7.1	10.6	28.5	7.7	1.0	0.3	37.8
女	7.2	5.0	9.7	25.5	10.7	0.9	0.40	9
								100.0

年代別にみると、四十才代前半では好意度のやや高い段階5が最高の比率を占めているのを除けば、どの年代でも中間的な段階4がもっとも多くなっている。好意度の低い層の比率がもっとも高いのは二十才代前半、ついで五十才代前半であり、好意度の高い層が多いのは四十才代前半、ついで二十才代後半となっている。好意度の低い層と高い層との差を出してみると、三十才代前半、四十才代前半と後半がその差が少ない。仕事・家事で多忙な三十才代後半は例

外として、三十才代・四十才代の人の中に、好意的な印象を持っている人が多い、ということになろう。

好意度	年齢										計
	1	2	3	4	5	6	7	0	差	計	
20~24	2.4	9.5	19.0	26.2	7.1	0	0.55.7(23.8)			100.0	
25~29	6.7	7.8	10.0	34.4	12.2	2.2	0.26.7(10.1)			100.0	
30~34	6.2	0	7.3	39.6	12.5	0	0.34.4(1.0)			100.0	
35~39	11.1	6.7	8.9	28.9	6.7	2.0	0.56.6(17.8)			100.0	
40~44	8.2	3.3	9.8	11.5	14.8	0	0.52.5(6.5)			100.0	
45~49	11.4	6.8	2.3	25.0	11.4	0	0.43.2(9.1)			100.0	
50~54	13.5	5.4	10.8	27.0	5.4	2.7	0.35.1(21.6)			100.0	
55~59	5.4	8.1	8.1	18.9	8.1	0	0.51.4(13.5)			100.0	
60以上	5.1	8.9	12.7	22.8	5.1	1.3	1.343.0(19.0)			100.0	

職業別にみると、中間段階がどの職業の割合が多いか、好意度の低い層の比率がもっとも高いのは自由業、ついで事務職となっている。次に、好意度の高い層がどの職種が多いか、

好意度	職種										計
	1	2	3	4	5	6	7	0	差	計	
業	8.7	13.0	4.4	19.6	6.5	0	0.47.8(19.6)			100.0	
自由業	5.1	2.6	15.4	23.1	15.4	0	0.38.5(7.7)			100.0	
管理職	4.6	3.0	12.1	36.4	7.6	3.0	0.33.3(9.1)			100.0	
事務職	3.8	7.6	13.2	28.3	11.3	1.9	0.34.0(11.4)			100.0	
専門・技術職	0.6	0.6	15.7	32.4	0.6	0.1	0.31.5(16.2)			100.0	
その他	4.0	4.0	12.0	28.0	8.0	4.0	0.40.0(8.0)			100.0	
不明	8.9	5.8	7.2	24.2	9.9	0.3	0.343.3(11.4)			100.0	

の場合も労務職がついでいる。その差をみると、自由業、専門技術職の場合に大きく、管理職、事務職が小さいという結果になっている。

学歴でも、中間段階がもっとも多い。好意度の低い層が多いのは大卒、ついで短大卒の場合となっている。好意度の高い層がもっとも高いのは旧制中学・高卒で、短大卒がそれについている。前回のようにその差を出してみると、学歴の高い層にその差が大きいことがわかる。中間的な学歴層の人に好意的な印象を持っている人が多いことがそうである。

好意度	学歴										計
	1	2	3	4	5	6	7	0	差	計	
小	7.4	8.1	6.8	21.7	5.6	1.2	0.49.1(15.5)			100.0	
新中	6.3	4.7	7.0	26.6	7.8	1.6	0.46.1(8.6)			100.0	
旧中・高女	7.4	2.9	13.2	19.1	16.2	0	1.539.7(5.8)			100.0	
新高	6.0	3.6	9.0	38.9	12.0	0.6	0.29.9(6.0)			100.0	
旧専・高	8.0	12.0	16.0	24.0	8.0	0	0.32.0(28.0)			100.0	
短大	0	9.5	38.1	19.1	9.5	4.8	0.19.1(33.3)			100.0	
新・旧大	16.7	13.3	23.3	23.3	10.0	0	0.13.3(43.3)			100.0	

最後に、集団活動、学習活動の実態とこのような社会教育観の関係をながめてみよう。社会的な活動をするもの、スポーツのグループ・団体及び学習のグループ・団体について社会教育への好意度の7段階による加入状況は各表の如くであるが、好意度の低い層と高い層で比べてみると、この集団の場合にも好意度の高い層の方が、低い層よりも参加率が高という結果がみられる。

スポーツグループ 好意度	参加している	参加していない	無記入	計
1	8.9	71.1	20.0	100.0
2	5.3	81.6	13.2	100.0
3	4.7	84.4	10.9	100.0
4	4.1	89.4	6.5	100.0
5	13.8	81.0	5.2	100.0
6	16.7	66.7	16.7	100.0
7	100.0	0	0	100.0

社会的グループ 好意度	参加している	参加していない	無記入	計
1	13.3	64.4	22.2	100.0
2	21.1	65.8	13.2	100.0
3	14.1	76.6	9.4	100.0
4	8.8	84.7	6.5	100.0
5	19.0	75.9	5.2	100.0
9	66.7	33.3	0	100.0
7	0	100.0	0	100.0

学習グループ 好意度	参加している	参加していない	無記入	計
1	13.3	66.7	20.0	100.0
2	15.8	71.1	13.2	100.0
3	3.1	85.9	10.9	100.0
4	6.5	88.2	5.3	100.0
5	10.3	84.5	5.2	100.0
6	16.7	66.7	16.7	100.0
7	0	100.0	0	100.0

学習活動の実態の一側面として、金沢市内にあるいくつかの社会教育施設の利用状況をながめてみることにする。まず、それぞれの地区の公民館の場合は好意度の高い層の場合には利用したことがあるという率が、低い層にくらべて高く、場所も知らないという人の率は低くなっている。この傾向は中央公民館その

中央公民館 好意度	利用した	知っている	知らない	無記入	計
1	17.8	31.1	17.8	33.3	100.0
2	15.8(17.1)	42.1	36.8	5.3	100.0
3	17.2	46.9	26.6	9.4	100.0
4	12.4	47.6	34.1	5.9	100.0
5	22.4(21.5)	43.1	19.0	15.5	100.0
6	0	100.0	0	0	100.0
7	100.0	0	0	0	100.0

地区公民館 好意度	利用した	知っている	知らない	無記入	計
1	40.0	46.7	4.4	8.9	100.0
2	47.4(40.0)	39.5	5.3	7.9	100.0
3	35.9	53.1	6.3	4.7	100.0
4	40.0	49.4	8.8	1.8	100.0
5	56.9(58.5)	34.5	1.7	6.9	100.0
6	66.7	33.3	0	0	100.0
7	100.0	0	0	0	100.0

他の場合でも同様であるが、地区公民館の場合ほど顕著な差にはなっていない。つまり、社会教育に対する住民の意識の差は地区公民館の諸活動への参加のちがひとなって現われているとみることでよい。

社会センター 好意度	利用した	知っている	知らない	無記入	計
1	13.3	42.2	15.6	28.9	100.0
2	21.1 (17.6)	34.2	34.2	10.5	100.0
3	18.7	39.1	28.1	14.1	100.0
4	15.3	44.7	32.4	7.6	100.0
5	22.4	51.7	13.8	12.1	100.0
6	16.7 (21.5)	83.3	0	0	100.0
7	0	100.0	0	0	100.0

生活科学センター 好意度	利用した	知っている	知らない	無記入	計
1	4.4	28.9	33.3	33.3	100.0
2	7.9 (5.4)	26.3	47.4	18.4	100.0
3	4.7	26.6	50.0	18.7	100.0
4	5.3	29.4	52.4	12.9	100.0
5	6.9	48.3	25.9	19.0	100.0
6	16.7 (7.7)	66.7	0	16.7	100.0
7	0	100.0	0	0	100.0

終章まとめ

都市化傾向といわれる現象が社会の随所に出現し、その影響に
いて多くが語られるようになってかなりの時日がすでに経過した。
社会教育というわれわれの領域においても然りといえる。周知の通
り、主として、農村地域にその活動基盤を置いてきたわが国の社会

教育にとつては、そのありかたを根底から問われる情勢が生じたわけである。いわく「社会教育の現代化」いわく「都市化と社会教育」、そして又「急激に変化する社会における社会教育のあり方」なる命題に関心が寄せられたことがそれを示している。

単に農村地域の変貌ということにとどまらない都市化現象が広汎な範囲に、各種の影響をもたらしたことは金沢市においても例外ではない。金沢駅に近い、中心部に位置する此花地区は昼間の在住人口が減少し、周辺地区である鞍月地区では農地の宅地化が進み、急激な人口増が見られているというドーナツ現象もそのあらわれの一つである。今回の調査は金沢市の三地域を対象として行ったものであるが、意味する所はその範囲内にとどまるものではなく、共通の条件を有する地域に通用するものといえよう。

金沢市の社会教育活動は全小学校区に存在する公民館を舞台を中心として展開してきている。第二章に記したように、民主主義の啓蒙期ともいえる戦後しばらくのあいだ、その活動はかなり活発であった、といつてよさそうである。しかしながら、活発であったと過去形でいわざるを得ないのが、残念ながら、現在の姿のようである。昨年一年間に何らかの学習活動をした人が調査対象者の約半数いるが、公民館を利用して行なった人は第八位であることはそれを示す一つの例であろう。公民館についてのイメージを何も持っていない人が全体の半数近くいることも、もう一つの例といえるかもしれない。

社会教育の中心的な施設、拠点が公民館であることはおそらく異論が出ることはないほどあきらかである。公民館の充実なくして、活発な社会教育活動が展開する可能性は開けてこないといつてまちがいない。市民の八〇九割の人が何らかの学習要求を表明しているという実情に対応しうることを目途とした充実がはかられるべきで

あろう。その場合、考慮されるべき二、三のことがらについて触れてみたい。その一つは、地域性の重視ということである。市内にある社会教育関係施設の利用実態を見ると、市立中央公民館、県立社会教育センターという所にくらべると、校下の公民館を利用した率はかなり高くなっている。施設・設備の状況からいえば比較にならないほどの差を持ち、職員的面においても大きな開きがあるにもかかわらず、それぞれの身近かな所にある校下公民館の利用がもっとも多いし、その知名度も当然のことながらもっとも高くなっている。コミュニティを社会体系としてとらえる場合、その要件の一つである生活空間としては、歩いていける範囲ということがいわれられていることとあわせて、地区公民館の充実がなによりもまずだじであるといえよう。

第二に、学習活動に関連してのことである。住民のあいだにある学習必要感はかなり高いものであることは本調査でも明らかであるが、それに充分対応してはいない現状もまた明らかであるといわざるをえない。いわゆる自治公民館である金沢市の公民館の最大の問題点がここにある。住民の学習要求を正しく把握・発掘し、それを満たすための専門的配慮をするところに公民館の中心的役割・存在理由がある。むしろ行政センターの役割を荷わされている実情からの転換がはかれるべきであると思われる。

第四章の二・三・四・

終章 古野 有 隣

(金沢大学助教授・社会教育学)

あとがき

この調査に当っては、金沢市教育委員会、同委員会社会教育課の諸賢、さらに此花町公民館新主事、戸板公民館戸室主事、鞍月公民館根布主事、双葉町々会長秋山氏をはじめ、三地区の公民館関係の方々には一方ならぬお世話になった。稿を終えるに当ってこのことに深くお礼申し上げますとともに、このような協力を頂いたにもかかわらず、調査集計の段階での手違いから今少しくわしい分析のために必要だった集計が若干得られなかったため、結果としては不十分な分析に終らざるをえなかったことをおわびして謝罪する。

出雲路暢良

調査についてのお願い

金沢大学教育学部 社会教育研究学

ご協力をお願いいたします。

このたび、金沢大学教育学部社会教育研究学では、市民の暮らし、自由時間や休日などを、生活を楽しむため、自分を含めたいわゆる、どのような生活をしていかれるか、また、どのようなことを望んだり、学びたいか、希望していただけるのをお知らせの調査を行おうと決まりました。世の中がますます大きく変わりつつある現在、社会教育「とは何か」をテーマに、青年会がやっている活動、公民館のいろいろな事業、老人の集まり……等は、昔と変わってまいりましたが、市民の面ではなにか変わりつつある問題があるように感じています。この調査は、そのような社会教育をもっと市民の方々に広げたいことが目的です。ご協力をお願いいたします。

この調査は、どのような社会教育をもっと市民の方々に広げたいことが目的です。ご協力をお願いいたします。

調査をお願いした方は 金沢市内のいくつかの地域の公民館を選び、そこでボランティアとして活動している方々です。一冊のお便り1人もしくは2人の方にお便りをする場合がありますが、お一人、お一人ごと、ご自分の希望で調査票をご記入下さい。

ご記入いただいた調査票は、4～5日のうちに、お返事をさせていただきます。一冊のお便りとしてお便りを入れて、調査してまいります。金沢市社会教育研究学の責任において調査し、集計いたします。

記入にあたって 調査の結果は、統計的に集計し、数字としてお返りいたしますので、おなごの個人情報が漏れることはありません。個人に不利になるようなことは絶対にありません。どうぞ、おなごの安心をください。

お名前を記入する必要はありませんが、記入もれがありますと、せっかくお寄せ下さったものが、お返りできません。お名前を記入していただくようお願いいたします。

ご不要 その他のお便り 1979年2月4日(10時)～5時、及び7月4日は午前中のみ、お問い合わせ先は、金沢大学教育学部研究員 1-10-10-101 011-821-4743 (10時～18時) までお願いします。

問11-3 あなたが1位にあげたことなどの理由からですか。あなたの実績ももっともよいもの1つ○をつけて下さい。

- 1 現在の職責に必要だから
- 2 専任や就業のためが必要だから
- 3 現代の職業として必要だから
- 4 職業生活の上で必要だから
- 5 多くの人と知り合う機会になるから
- 6 余暇時間をむだに過ごしたくないから
- 7 自己向上のためが必要だから
- 8 別に動機はない
- 9 その他 記入して下さい

問11-4 それほどよい方法ではないと思いますが、あなたも1つ○をつけて下さい。

- 1 通夜教育で
- 2 3ヶ月前までを使い強力で
- 3 個人教授で
- 4 ラジオ、テレビで
- 5 自分たちのグループ、ワークショップで
- 6 会社の研修会やセミナーで
- 7 F・T・Aや公民館の学習講座で
- 8 大学・学校の公開講座で
- 9 民間企業や各種学校の教育・講座で
- 10 その他 記入して下さい

問11-5 あなたが1位にあげたことは、いつかしたいと思いませんか。もっともよい時1つ○をつけて下さい。

- 1 平日の午前
- 2 平日の午後
- 3 平日の夜
- 4 土曜の午前
- 5 土曜の午後
- 6 土曜の夜
- 7 日曜の午前
- 8 日曜の午後
- 9 日曜の夜
- 10 いつでもよい

問11-6 あなたが1位にあげたことをするの、いくらかお金がかかるかしらうと思いますが、

- 1 お金をかけますでする気はない
- 2 多少はかかってもする
- 3 用がたかってもやりたい
- 4 何ともない

問11-7 下記の表の中は、学んだり習ったりしたいと思うものがあります。ありましたその番号○をかつ下さい。(いくつでもかまいません)

- 1 英語
- 2 計算尺
- 3 簿記
- 4 算計簿のつくり方
- 5 テープ・レコーダの使い方
- 6 家庭医療の知識
- 7 タイプ
- 8 和歌
- 9 洋装
- 10 手芸・織物
- 11 通信の知識・技術
- 12 最新・最先技術
- 13 室内装飾
- 14 料理・栄養
- 15 夜間一般のこま(飛行、再生など)
- 16 自動車運転
- 17 礼儀作法・マナー
- 18 その他

問12-1 あなたは、去年一年の間に、余暇時間を利用して、教育・趣味・職業などのため何回かしたり、現在もしていることがありますか。

- 1 ある → 問14 はとほして問15から答えて下さい。
- 2 ない → 問14から答えて下さい。そのあと問15はとほして問16から答えて下さい。

問14 それをなぜでしょう。おもな理由を1つだけ○をかつ下さい。

- 1 したいものがない
- 2 したいものがあったが、どこでしていいかわからうしい
- 3 知っていることが知っているが、自分にあわない
- 4 金額が高い
- 5 経済的に余裕がない
- 6 時間的に余裕がない
- 7 子供の手がかかる
- 8 やる気がしない
- 9 別な理由はない
- 10 その他

問15-1 (あると答えた方に) それほどよい内容のものでしたか。次の中から選んで○をつけて下さい。

- 1 自分の職業に直接役立つような内容のもの
- 2 職業に関係するもの
- 3 生活よりよいものにするのに役立つもの
- 4 教養を高めるのに役立つもの
- 5 その他

問15-2 それほどよい方法でありませんでしたか。おもなものを○をつけて下さい。(いくつなくてもかまいません)

- 1 通夜教育で
- 2 3ヶ月前までを使い強力で
- 3 個人教授で
- 4 ラジオ、テレビで
- 5 自分たちのグループ、ワークショップで
- 6 職場の研修会やセミナーで
- 7 F・T・Aや公民館の学習講座で
- 8 大学・学校の公開講座で
- 9 民間企業や各種学校の教育・講座で
- 10 その他 記入して下さい

問15-3 あなたが1位にあげたことは、いつかしたいと思いませんか。

- 1 平日の午前
- 2 平日の午後
- 3 平日の夜
- 4 土曜の午前
- 5 土曜の午後
- 6 土曜の夜
- 7 日曜の午前
- 8 日曜の午後
- 9 日曜の夜
- 10 別に決っていない

問15-4 それをするのに1ヵ月平均どの位お金がかかりますか。

- 1 1000円以下
- 2 5000円
- 3 10000円
- 4 20000円
- 5 100000円
- 6 700000円
- 7 1万円
- 8 1万円以上

問10-4 それほどよい方法ではないと思いますが、あなたも1つ○をつけて下さい。

- 1 通夜教育で
- 2 3ヶ月前までを使い強力で
- 3 個人教授で
- 4 ラジオ、テレビで
- 5 自分たちのグループ、ワークショップで
- 6 職場の研修会やセミナーで
- 7 F・T・Aや公民館の学習講座で
- 8 大学・学校の公開講座で
- 9 民間企業や各種学校の教育・講座で
- 10 その他 記入して下さい

問10-5 あなたが1位にあげたことは、いつかしたいと思いませんか。もっともよい時1つ○をつけて下さい。

- 1 平日の午前
- 2 平日の午後
- 3 平日の夜
- 4 土曜の午前
- 5 土曜の午後
- 6 土曜の夜
- 7 日曜の午前
- 8 日曜の午後
- 9 日曜の夜
- 10 いつでもよい

問10-6 あなたが1位にあげたことをするの、いくらかお金がかかるかしらうと思いますが、

- 1 お金をかけますでする気はない
- 2 多少はかかってもする
- 3 用がたかってもやりたい
- 4 何ともない

問10-7 下記の表の中は、学んだり習ったりしたいと思うものがあります。ありましたその番号○をかつ下さい。(いくつでもかまいません)

- 1 外国語(ピアノ、バイオリンなど)
- 2 彫刻(石、木材、紙など)
- 3 合唱、民謡
- 4 歌舞(邦舞、日本舞)
- 5 書道(毛筆、ペン書)
- 6 和紙
- 7 和茶
- 8 手芸、織物
- 9 写真
- 10 彫刻、陶芸
- 11 俳句、漢詩
- 12 園芸知識
- 13 音楽、ドラッグなどの室内遊戯
- 14 プログラム技術
- 15 スケート、スキー技術
- 16 ボートなどの技術
- 17 その他のスポーツ
- 18 映画、狂言
- 19 小説、長編
- 20 その他

問10-8 いま○をつけた中でやりたいと思うものの強い興味3つまであげるとするとどうなりますか。それぞれの順位の下に番号を入れて下さい。

1 位	2 位	3 位

(3つない場合は強いのらんば、×を入れて下さい)

問12-2 いま○をつけた中で、やりたいと思うものの強い興味3つまであげるとするとどうなりますか。それぞれの順位の下に番号を入れて下さい。

1 位	2 位	3 位

(3つない場合は強いのらんば、×を入れて下さい)

問12-5 あなたが1位にあげたことは、どのような理由からですか。あなたの実績ももっともよいもの1つ○をつけて下さい。

- 1 現在の職責に必要だから
- 2 専任や就業のためが必要だから
- 3 現代の職業として必要だから
- 4 職業生活の上で必要だから
- 5 多くの人と知り合う機会になるから
- 6 余暇時間をむだに過ごしたくないから
- 7 自己向上のためが必要だから
- 8 別に動機はない
- 9 その他 記入して下さい

問12-6 それは、どのような方法でしたいと思いませんか。おもなものを1つ○をつけて下さい。

- 1 通夜教育で
- 2 3ヶ月前までを使い強力で
- 3 個人教授で
- 4 ラジオ、テレビで
- 5 自分たちのグループ、ワークショップで
- 6 会社の研修会やセミナーで
- 7 F・T・Aや公民館の学習講座で
- 8 大学・学校の公開講座で
- 9 民間企業や各種学校の教育・講座で
- 10 その他 記入して下さい

問12-7 あなたが1位にあげたことは、いつかしたいと思いませんか。もっともよい時1つ○をつけて下さい。

- 1 平日の午前
- 2 平日の午後
- 3 平日の夜
- 4 土曜の午前
- 5 土曜の午後
- 6 土曜の夜
- 7 日曜の午前
- 8 日曜の午後
- 9 日曜の夜
- 10 いつでもよい

問12-8 あなたが1位にあげたことをするの、いくらかお金がかかるかしらうと思いますが、

- 1 お金をかけますでする気はない
- 2 多少はかかってもする
- 3 用がたかってもやりたい
- 4 何ともない

7.3 あなたの家族は、次のどれに近いですか。

1. 独り暮らし 2. 商店経営(マーベムも含む) 3. 工場経営
4. 農家 5. その他

7.4 あなたの住居方法の点で、どのようが最もですか。

1. 本人 2. 妻 3. 夫 4. K 5. 妻
6. 姉妹 7. 兄弟 8. 息子 9. 娘 10. その他()

7.5 あなたは現在何か仕事をしていらっしゃいますか。次の中からいちばん主なもの1つK○をつけて下さい。

1. 自分で、農林・漁業(のどれか)を営んでいる。
2. 自分で、雇・工・マーベム(のどれか)を営んでいる。
3. 買った農機をもって毎日働か出ている。 → FにKか答えて下さい。
4. (パート)タイムで働いている。 5. 家で内職をしている
6. 家事だけをしている 7. 別荘もしている

7.6 (毎日働くか出ている方)その職業は何ですか。

1. 自由業 2. 管理職 3. 事務職
4. 単純労働者 5. 専門、技術職 6. その他記入して下さい

7.7 あなたの最終卒業された学校は次のどれになりますか。(任意学校のようなら○を印します。このKないままの学校を出られた場合は、在学中で同じ種類の所K○を付けて下さい)

1. 小学校より高等科 2. 新制中学校 3. 旧制中学校・高等女学校
4. 新制高校 5. 旧制専門・高等学校 6. 短大
7. 大学(旧・新)

7.8-1 あなたの結婚していらっしゃいますか。

1. 既婚 2. 未婚

7.8-2 (既婚の方)お子さんはありますか

1. ない 2. 1人いる 3. 2人いる
4. 3人いる 5. 4人いる 6. 5人以上いる

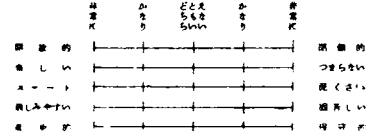
7.8-3 (お子さんのある方) いちばん下のお子さん社次のどれになりますか。

1. 乳児(1才未満) 2. 幼児(1～3才) 3. 幼児(4～6才)
4. 小学生 5. 中学生 6. 高校生
7. 大学生 8. 職者Kつけている 9. その他

7.9 あなたは、次の表の中からある職業を利用したことがありますか。利用したことがあるもののKは○、利用したことがないものがどれかK○をつけているものは○をつけて下さい。どこにもK○がつけられないものは×をつけて下さい。

以下の会社員		社会保険センター	国土農林省
中央公民館		都市農協センター	生活科学センター
青年労働者		近代文学館	
青年団事務		県立美術館	

7.10 あなたは、公民館とか、社会教育という言葉を聞いたことがありますか。どのような感じになりますか。次の○のつづきからK○をつけてください。それぞれ目盛りのあてはまる所を○で囲んで下さい。



7.11 あなたの出身のところがどのようか記入して下さい。

7.1 あなたの性別は

1. 男 2. 女

7.2 あなたの年齢はどのくらいですか。

1. 20～24才 2. 25～29才 3. 30～34才
4. 35～39才 5. 40～44才 6. 45～49才
7. 50～54才 8. 55～59才 9. 60才以上